

—1973—1983—

遭難を考える

—この悲しみを繰り返すまい—

1983年10月

兵庫県勤労者山岳連盟
遭難対策委員会

目 次

◎ 遭難事故報告

- 1、前穂高・北尾根遭難事故（1973年10月8日）……………2
- 2、武庫川遭難事故（1974年7月21日）……………6
- 3、奥穂高・ロバの耳遭難事故（1976年3月20日）……………10
- 4、鹿島槍・赤岩尾根遭難事故（1977年5月5日）……………22
- 5、八ヶ岳遭難事故（1982年3月21日）……………25
- 6、五竜・遠見尾根遭難事故（1983年8月15日）……………34

◎ 事故・事故未遂一覧表（1966年～1983年）……………38

◎ 遭難対策年表（1966年～1983年）……………67

◎ 資料

- (1) 兵庫県勤労者山岳連盟遭難対策規程……………71
- (2) 遭難対策活動について（1971.7.11 第3回全国登山研究集会で報告）……………73
- (3) 仲間の死を無駄にすまい
兵庫県連会長 武原勉（事務連絡No.17, 1972.4.24）……………75
- (4) 遭難対策について安全の保障をどこに求めるか
田淵常雄（事務連絡No.21, 1972.7.26）……………77
- (5) 高気圧 低気圧（山と仲間No.48, 1973.12.1）……………79
- (6) 総会決定を實踐するにあたって 一組織・運営問題と故柳楽さんの遭難を考える
一組織・運営問題と故柳楽さんの遭難を考える……………80
理事長 倉内司郎（兵庫労山No.21, 1973.12.18）……………80
- (7) 「遭難対策研究会」について……………81
- (8) 「岩登りテキスト（案）」について 一作成のねらいとその内容—
倉内司郎（山と仲間No.70, 1975.10.1）……………83
- (9) 第12回兵庫県連総会決定から抜粋（1976.11.7）……………86
- (10) 県連教育体系……………87
- (11) 入山前体力評価基準……………88
- (12) 第13回兵庫県連総会決定から抜粋（1978.6.18）……………89
- (13) 山行活動の強化充実のために 倉内司郎（登山時報No.42, 1978.8.1）……………90
- (14) 再び事故をおこさないために
教育部長代行 倉内司郎（事務連絡No.82, 1978.8.10）……………91
- (15) 第14回兵庫県連総会決定から抜粋（1979.6.17）……………93
- (16) 正月合宿を実り多いものとするためにただちに取り組みを！
遭難対策委員会（事務連絡No.100, 1979.10.18）……………93
- (17) 第17回兵庫県連総会決定から抜粋（1981.6.21）……………95
- (18) 山行活動の自粛ならびに各会における今回の事故問題の話し合いについて
（1982.3.22）……………96
- (19) 第19回兵庫県連総会決定から抜粋（1982.6.13）……………97
- (20) 山行活動の再開にあたって
遭難対策委員会（事務連絡No.131, 1982.8.6）……………100
- (21) 第20回兵庫県連総会決定から抜粋（1983.6.12）……………102

故 柳楽 峰子さん
(神戸労山会員)



(享年23才)

1973年10月8日
前穂高 北尾根

故 淵上 博さん
(芦屋労山会員)



(享年24才)

1974年7月21日
武庫川 大岩橋

故 安田 勢喜さん
(西宮労山会員)



(享年25才)

1976年3月20日
奥穂高 ロバの耳

故 上田 孝男さん
(尼崎労山会員)



(享年27才)

1977年5月5日
鹿島槍 赤岩尾根

故 新井 良さん
(神戸みなと労山会員)



(享年62才)

1982年3月21日
八ヶ岳 中岳沢

故 橋田 孝弘さん
(神戸みなと労山会員)



(享年42才)

1982年3月21日
八ヶ岳 中岳沢

故 安田 憲市さん
(神戸みなと労山会員)



(享年32才)

1982年3月21日
八ヶ岳 中岳沢

故 久保百合子さん
(神戸みなと労山会員)



(享年31才)

1982年3月21日
八ヶ岳 中岳沢

故 権藤美恵子さん
(神戸みなと労山会員)



(享年28才)

1982年3月21日
八ヶ岳 中岳沢

故 間田 幸治さん
(神戸みなと労山会員)



(享年28才)

1982年3月21日
八ヶ岳 中岳沢

故 柳 静子さん
(神戸みなと労山会員)



(享年27才)

1982年3月21日
八ヶ岳 中岳沢

故 杉本 悦子さん
(神戸みなと労山会員)



(享年25才)

1982年3月21日
八ヶ岳 中岳沢

故 田中かおるさん
(神戸みなと労山会員)



(享年24才)

1982年3月21日
八ヶ岳 中岳沢

故 田丸 敦子さん
(神戸みなと労山会員)



(享年24才)

1982年3月21日
八ヶ岳 中岳沢

故 沢田 和史さん
(神戸みなと労山会員)



(享年21才)

1982年3月21日
八ヶ岳 中岳沢

故 辻 宗郎さん
(西宮労山会員)



(享年45才)

1983年8月15日
五竜 遠見尾根

ご冥福をお祈りします。

山々で永遠にお眠り下さい。

前穂高岳北尾根遭難事故

兵庫県勤労者山岳連盟は岩登り技術の訓練及びリーダーの養成、加盟山岳会の親睦と交流を目的として1973年10月5日(夜)～10日の予定で、北アルプス穂高岳周辺で第2回兵庫県連合同合宿を行った。

メンバーはC.L 玉井進吾郎(神戸)、S.L 本部肇(神戸)、倉内司郎(宝塚)、中山正一(神戸)以上4名登攀リーダー、山野清隆(尼崎)、山内修作(芦屋)、竹中正樹(芦屋)、岡村康信(六甲)、山尾繁美(みなと)、柳楽峰子(神戸)、高木ひろみ(神戸)、三角秀一(神戸)の12名であった。

行動予定は10月5日夜神戸発、6日上高地から瀬沢へBC、7日屏風岩登攀、8日前穂東壁登攀、9日滝谷登攀、10日下山となっていた。

(1)事故発生日時 1973年10月8日午前11時40分

(2)事故発生場所 前穂高岳北尾根4.5 コル上部約30m登った地点

(3)事故者 柳楽峰子 享年23才(神戸労山会員)

(4)事故内容 滑落の後、約150m瀬沢側に転落し全身打撲により即死

(5)合宿の行動と事故発生までの経過 10月6日、入山で瀬沢着15:30 7日、前夜来からの雨で屏風岩登攀を中止し停滞。

8日前々夜からの雨で前穂東壁、四峰正面の登攀を中止し、北尾根未経験者も多いため、

5・6のコルから前穂への行動がリーダーよ

り指示される。07時起床、雨は小さくなる。

09:50体操の後、出発(霧雨)。10:40 5・

6のコル着。10:55倉内、本部パーティ出発、

11:00玉井、中山パーティ出発(中山が風邪

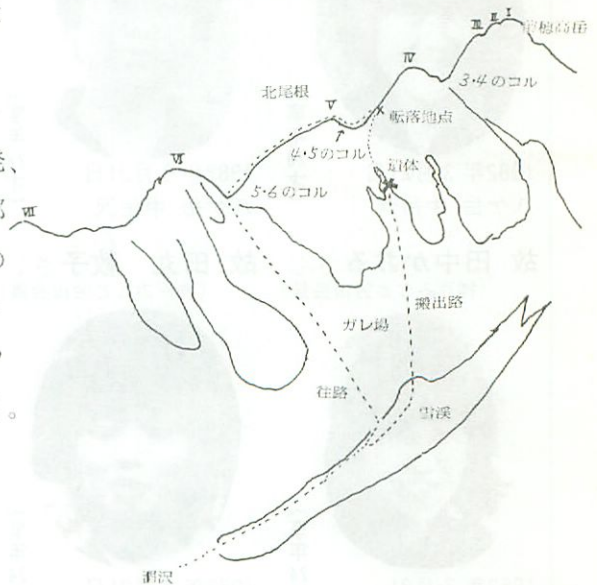
気味のためP5の手前で下山、山野、三角の

両名が玉井パーティに入る。オーダー玉井・

三角・山野・柳楽・山内) 11:15～11:20 P

5。11:30 4・5のコル通過、小雪ちらつく。

11時40分柳楽さん転落。



(6)転落現場の状況 左上ヘトラバース気味に登ってゆく所。転落の瞬間は約3m後にいた山内も確認していないので直接的原因は不明であるが、浮石によるスリップか、手にした岩が崩れてバランスをくずしたと推測される。降雨で岩場はゆるんでいた。転落は最初俯むけでずり落ち(この時点でパーティ員の視界から消える)、一度四峰基部下方でバウンドし、落石を誘発しながら下方へ転落していった。ヘルメットは転落中に脱げ、ザックは四峰基部より15m下にあり、内容物が一部散乱。柳楽さんは転落の際、一声も出していなかった。気象状況は小雪が舞い、気温は低かった。

(7)事故後の状況 リーダー玉井は直ちに登攀を中止し、柳楽さんにコールをかけ、さらに先行していた倉内、本部パーティへの連絡を三角に指示、山野、山内に遺留品を集めさせ、5・6の科尔経由で現場に来るように指示し4・5間を下降した。(倉内パーティは3・4の科尔で登攀準備、本部パーティは四峰奥又側にいた)。12:00、玉井現場到着(柳楽さんは頭部陥没ですでに絶命)。本部にトランシーバーで緊急発信を指示、湊沢ヒュッテと連絡できる。13:00、倉内、4・5間を下降し、ザックを回収し現場到着。遺体は頭を上へ俯せに横たわり、左の靴は脱げていた。5・6の科尔を経て下方より登りはじめた山内へ湊沢ヒュッテへ報告及びスノーボートの手配のため下山を指示。まもなくかけつけてもらった神奈川県旭硝子歩行部(A.G.A.C)の三瓶氏他1名、山野らと頭部を手拭とビニール風呂敷でくるみ、遺体全体をレスキューシートでくるむ。13:30、各方面へ連絡のため、玉井は現場をはなれ、倉内に搬出の指揮を委ねる。14:12、日本電気三田山岳部湊氏他1名が応援にかけつけて下さり、AGAC5名、労山7名の計14名にて搬出を開始。遺体をシュラフで包みスノーボートに乗せ、ザイルで確保しながら下ろし、雪溪に出てからはボートを滑らせ、16:10湊沢BCへ遺体を安置。この間に13:45中山は神戸労山の山田恒男へ第1報を送る。14:00、玉井は湊沢へ下り、豊科警察署へ事故を報告する。18:30、AGAC、日本電気の方々が見えられ、お通夜。21:00、留守本部との最終連絡。22:30就寝。

10月9日、快晴04:20起床。05:20遺体をタンカにザイルで固定し、出発。06:47、本谷橋通過。07:43、横尾通過。08:05広場着、木村小屋の自動車に遺体に乗せ、(神戸労山会長金田武他3名が車に同乗してきた)。玉井、倉内、高木、金田が同乗。残りの合宿メンバー8名と応援に来た3名はテント他装備回収のため湊沢へ向かう。09:15木村小屋到着、玉井、倉内は事故報告の後、事故分析アンケート及び事故概要をノートに記入。その後で柳楽さんの両親はじめご家族に面会する。09:40、玉井、倉内は遺体と共に鳥々へ向かう。12:20鳥々の中山医院に到着、検死の後、納棺し遺族と対面。13:40中山医院出発。14:00松本市営葬祭センターに到着。14:10火葬。16:00遺骨を納めセンター出発。

23:08三宮駅到着。約200名の労山の仲間の出迎えを受け、遺骨となった柳楽さんは家族に抱かれて家路につく。

10月10日13:00~16:00神戸労山事務所にて事故対策会議。同日18:30~19:30柳楽宅にてお通夜に弔問、労山から50名。11日11:00~12:00柳楽宅にて告別式、78名参列。

(B)事故の問題点と教訓について 県連はじめの死亡事故であり、労山のすべての仲間に大きな衝撃と悲しみを与えました。労山では第一報後直ちに事故対策に取組み武原県連会長はじめ約20名を家族のご案内や救援隊として派遣しました。又、遺骨の出迎えも深夜になつたにもかかわらず200名の仲間が半旗で整然と行き、仲間の死を自分のものとして受けとめたのでした。

(イ) この事故は前穂北尾根という岩登りでは入門コースともいうべきルートで起っており、柳楽さんの岩登り技術だけから判断すれば事故現場は問題にする箇所ではなく、メンバーの誰れも転落の直接原因については現認していません。「なんであんな所で」という疑問、又、一見特徴のない事故とも言われました。(ロ)しかし、メンバーの体調をみると、中山は出発の時「しんどいから行きたくない」と言っていたが、登攀リーダーが少ないので玉井リーダーが行くように頼みこんで出発に加わり、結果としてはP5手前で下山した。柳楽さんも「行きたくない」と他のメンバーに言っていたが玉井リーダーが「身体の工合が悪いのか」「やめるか」と聞いた時は「行きます」と答えたのでそのまま出発させた。柳楽さんは合宿直前の10月3日東京へ労働組合の用務でゆき、6日松本で合流したように疲労が残っており、又当日は下痢気味であるとメンバーの一人に言っていた。湊沢から5・6の科尔まで通常のタイムで登ったが、柳楽さんはしんどそうに登っていた。この時点で何らかの措置をするべきではなかったか。霧雨で気温が低くなり、前日来の雨でコースの岩がゆるみ慎重に行動が要求されたが、柳楽さんの通常の力量から考えると問題にする箇所でもないだけに、体調不良から判断力、注意力を鈍らせたのではないだろうか。(ハ)問題点としてリーダーがメンバーの体調を正確につかめていなかった。メンバーが自分の体調についてリーダーに正確に申出ない、あるいはそれを知っている他のメンバーがリーダーに申出なかった。このようにパーティの中でお互いにお思いやりのある行動がなされていなかった。(ニ)この合宿に参加した12名中6名が神戸労山の会員であったが、柳楽さんの家族関係をはじめ、彼女のことについてほとんど知らない状況であった。同じ労山の運動を進めるものとして、もっともっとお互いの人となりを理解しなければ真の仲間意識ははぐくまれてきません。このことはつまり、神戸労山の会運営、山行のあり方、日常活動あるいはそこに於ける人間関係などに深く根ざしていることが指摘されました。

(ホ) 今回の事故の教訓として最も大切な事は「仲間をよく知りあう。理解しあう」「顔

色ひとつみて体調がわかるように」「何でも言いあえる信頼関係をつくろう」であったと言えましょう。つまり、会員どおしがその人の出生、おいたち、生活、家族状況さらには考え方についても話し合っ理解を一致しあうことです。仲間意識とは単なる抽象ではなく、このように具体的な事柄について相互に理解しあうことであり、又、さらに援助しあうことです。労山のような運動体を動かすべき、一人ひとりの会員にこのような仲間意識がなければ運動は前進できません。

(へ) 今日では(1983年10月)、16期に及ぶ初級岩登り教室が制度化され、岩登りを正しく身につけ向上させるシステムができ、剣、三ノ窓合宿、屏風岩合宿も20~30名規模で行われています。当時は年1~2回の単発の県連主催の岩登講習会のみで、あとは各会まかせとなっていました。この合同合宿も県連全体の力量を結集したものとなりえず、パーティとして十分意思統一が図れてはいませんでした。兵庫県連で岩登りについてきっちりと指導できるようになったのは1976年第1期初級岩登り教室からでした。又、トレーニングについても真剣にやらねばならないと科学的に方針を打ち出したのは1977年3月の山行・指導責任者会議からであった。

柳楽さんを失い県連の多くの仲間は悲しみから、ああでもない、こうでもない論議し、2度と事故を繰り返さないと誓ったのですが、事故は皮肉にも続いていくのでした。しかし、「仲間をよく知りあう」という教訓は今日でも私たちの安全登山の基本的な考えとなっています。(ト) 神戸労山ではこの事故の收拾とともに当時100名を越え(最大130名で減少)ていた会を神戸の地で労山運動を一層発展させることと、血の通いあった会運営を図るために神戸労山を三つの労山に分離独立させるための論議を展開した。

翌1974年春、摩耶山友会、神戸労山、西神戸山の会が独立していった。さらに1976年には摩耶山友会から神戸港山の会が産れ出ました。今ではこれらを合わせて300名を超えるまでになりました。

1966年神戸労山の創立総会の拡大目標は300名であった。柳楽さんの尊い命は今、こんな形で報われつつあるのではないのでしょうか。

田淵は服を脱いで淵上を捜しつづけたが、力がつきてしまった。

△その後の捜索▽

九時三十分、有馬警察署は少年Bからの通報を受けた。一〇時ごろ警官一名が現場着。さらに二〇分後、警官五名が到着。その内の二名が水に潜ったが、捜索は無理と判断。

Tは川沿いの道を歩いてき、一〇時半ごろ現場で田淵に会い、事故を知った。

Tは近くの民家の電話を借り、兵庫県勤労者山岳連盟へ、事故発生を連絡。

一二時、県警アクアラング隊が到着して、捜索。一三時一三分、川底で淵上を発見して、右岸の警察の車に収容したがすでに絶命していた。

△死因▽

検死の結果、死因は「急性心不全」であった。

△事故当時の両名の服装等▽

田淵 Ⅱ半袖ポロシャツ、コールドテニスカー、地下足袋、ザック(ラフマー)
淵上 Ⅱ長袖スポーツシャツ、毛ニッカ地下足袋、ナイロンアタックザック

荷の重さは両名とも一〇kg前後。

△事故の原因▽

● 渡歩の際の問題

(1)出発前にトレニングの趣旨、心構えをメンバーに知らせ、充分理解してから行動すべきであった。

(2)事故の起きた渡歩場所は雨が降りて水量がふえていたが、川幅が三〇メートルくらいなので、リーダー田淵はアンザイレンの必要を感じずに行動した。黒部川の実践を想定したトレニングであれば、当然アンザイレン(編集部注)ザイルで体を結び合うこととして、スタカト(同一人ずつ行動すること)等の、安全対策を講ずべきであった。

● パーティの問題

(1)土曜(20日)夜から三人で入山することになっていたので、Tが別行動をとった。

(2)黒部上の廊下廻りをどんな方法でどのように登るかの研究が不足していて、パーティの共通の認識が、まだできていなかった。

(3)淵上は新入会員だが、かつて他の会に入っていたので、技術的にも体力的にもすぐれているとみなしてしまい、本人が不安を洩らしても問題にしないなど、お互いを知ることが不十分のままの、トレニングであった。

● 山岳会の問題

(1)会長(田淵)が取組む山行だから大丈夫という、間違った信頼感があった。

(2)あらゆる山行について計画書を提出することになっているのに、トレニン

グ山行については、当時ほとんど計画書が提出されていなかった。

(3)遭難対策委員会も開店休業で、計画書の未提出についても、何らの対策がとられていなかった。

△これからの対策▽

これまでも芦屋労山では四件の大きな事故があったので、この事故のあと、事故取扱委員会を設け、さらにその委員会の話し合いをもとに全体集会を開いて、この件についての反省とこれからの方向を考えた。そして、六項目の確認事項を委員で確認した。

(1)たとえ近郊の山でも、出発前に行動と目的を意志統一して出発する。

(2)トレニングだからといって、安易な取組み・考え方をしない。

(3)その時点、その時点で、CL・SLのいうことに従い、規律を守る。

(4)今後どんな取組みにおいても、意義・目的を明確にし、決めたことはお互いに守ることなど、曖昧にしない。問題があれば、その時点で相互批判していく。

(5)トレニング形態を明確にしていく。

(6)教育活動の強化に働く者の登山観・知識・技術の向上を計り、会として、全体的にとりくむ。

この確認事項は、山行規程を守ること、たとえば山行計画書・報告書の提出など、既存の約束ともきっちり守ること

とを義務つけた。また、山行に限らず、運営委員会においても時間や約束を守る(遅れたり欠席する場合はあらかじめ責任者に了解をとっておくこと)、これだけだから大丈夫、別にニニやないか、といった固定観念、馴れ合いをなくし、「本当に仲間の生命を大切にしよう」という立場から、けんかをして互いに批判し合えるような会運営を確立するなど、山行・日常活動に波及していった。

この原稿作成のために聞いた事故取扱委員会では、故淵上君が私たちに教えてくれた教訓は、「登山行為を厳しく見ていく姿勢であり、その厳しい姿勢は私的な交際も含め、日常の会運営の中で初めて培われるものである」とことごと、話し合いました。

私たちは、これだけ話し合ったから事故がなくなる、とは考えていません。しかし、同じ原因による事故だけは起こさないように、組織的な教育活動をし、それは新しい会員にも一つひとつ普及して行っています。

また、今後も他の事故事例の尊い教訓からも、学んでいくつもりです。

編集部から長大な原稿が寄せられたので、一部を省略し、収録分も要約した。

第四回

渡渉訓練で死亡

(兵庫県 武庫川)

八月に黒部川上の廊下廻行を予定していたので、ふたりで武庫川で渡渉訓練を行なった。深みを泳いで渡るとき、淵上はあと二、三メートルで岸に着くところで「泳がれへん」と叫ぶ、ザイルを投げたがつかめない。飛び込んで淵上をつかんだが、しがみつかれ……。

故 淵上博君事故収拾委員会

(兵庫県・芦屋勤労者山岳会)

一九七五年七月二日、リーダー・田

淵創生と淵上博とは、武庫川(編集部注

・兵庫県にある川)で渡渉訓練を行ない、そのとき、深みを泳いでいるうちに、淵上が水に沈んで死亡した。死因は、急性心不全とのことである。なお、

この訓練は、八月に予定していた黒部川上の廊下廻行にそなえてのものであった。

▲行動の経過▼

●七月二日

夜、芦屋労山の集会を終えて、二二時一五分、自家用車で出発。二三時一一分に国鉄道場駅に到着。近くの広場に車を止め、車の横でシュラフカバーをかぶつ

て就寝。

●七月二日

台流するはずのTが来ないので、二人で行動開始。道場駅付近から、川の渡渉をくりかえして下流に向う、というコースをとることにした。

準備体操をして、右岸から川に入る。雨上りで、上流に砕石工場があるために水が濁っていたが、淵上は「困難ではない」(トレーニングなので、困難なほうがいい、という意味)という。足さぐりで渡るが、水深は約九五センチ。

左岸をしばらくたどり、また右岸への渡渉をする。右岸を歩き、波豆川の合流点のすぐ下流を、こんどは左岸へと渡渉。ここは深

くて約一一〇センチの水深。川幅は約四

〇メートル、ここで一回目の休憩。

そこから左岸をへずり、国鉄の鉄橋下付近から川の中を下る。このとき、淵上は、「田淵さん、泳げますよ」と、ふざけて泳いでみせた。このころ、遅れたTは、道場駅に着いていた。

次に、左岸から右岸へと渡渉。右岸ぞいの川の中を下っていくと、少年二人が釣りをしていたので、じやまをしないように、右岸にあがった。

▲事故発生の概要▼

釣りの少年の位置をすぎ、田淵が「あの岸に行つて休憩しようか」と問いかけて、淵上の確認をとり、左岸へと渡り出

した。九時一五分ごろである。

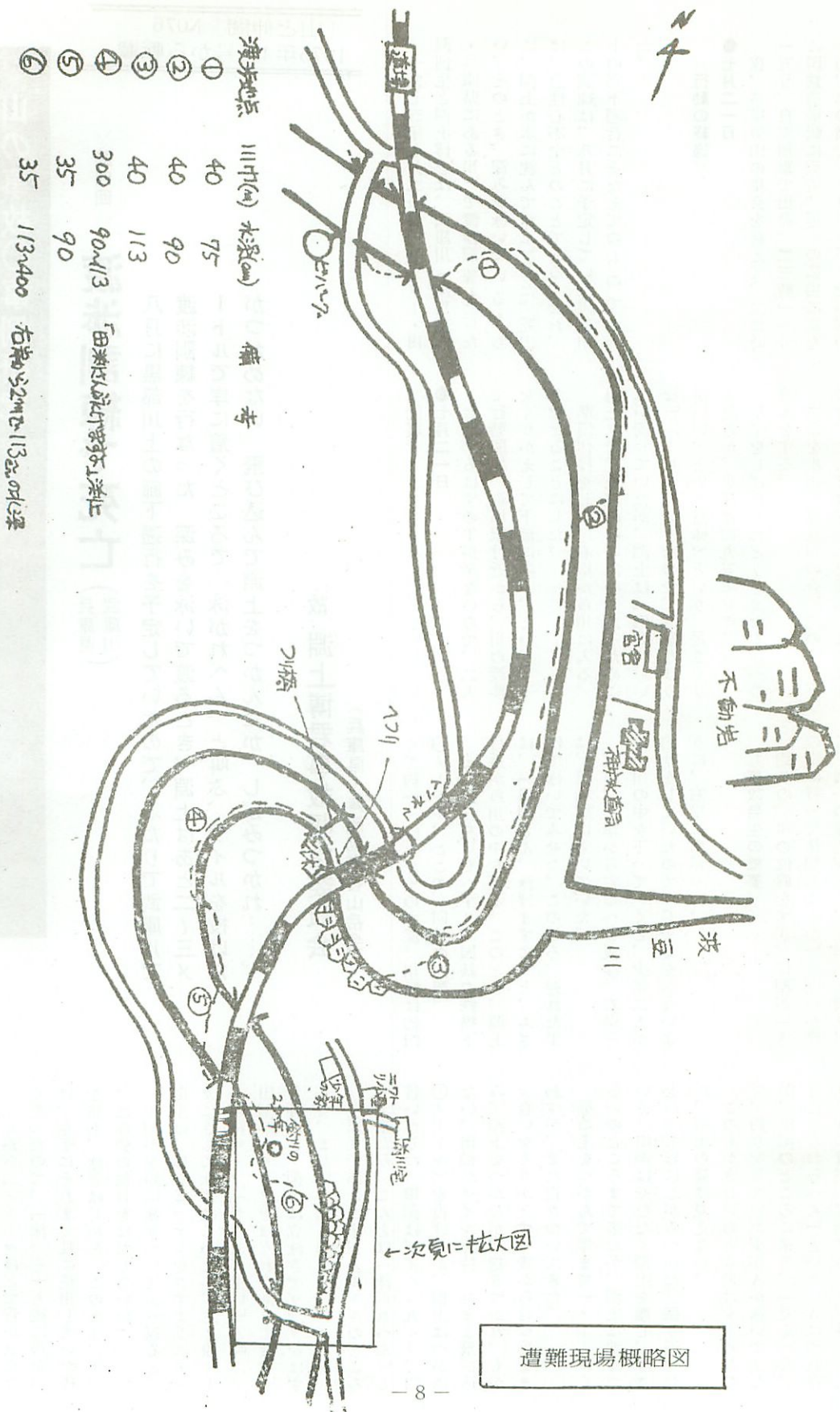
右岸から二メートルほどで背が立たなくなったので、「泳ぐぞ」と後に声をかけ、左手にそれまで杖に使用していた棒を持ち、泳ぎはじめた。このとき、ザックは浮袋の役目を果たしていた。

田淵が左岸に泳ぎついてふり返ると、淵上は、棒をビッケルをさすようにザックにさして泳ぎはじめたが、三、四メートル泳ぐと、「ザックが重い」と叫ぶ。田淵が「ザックをほうれ。あとで捜す」と叫ぶと、淵上は立泳ぎでザックをはずして、また泳ぎはじめた。

左岸まであと二、三メートルのところまで来たら、こんどは「泳がれへん」と言いだした。田淵はザイル(九ミリ、四〇メートル)を投げたが、淵上はつかめない。田淵がザイルを持ったまま飛び込み、淵上をつかむが、抱きつかれ、もがき合いをくりかえす。後から首に腕をまわすが、また抱きついてきた。

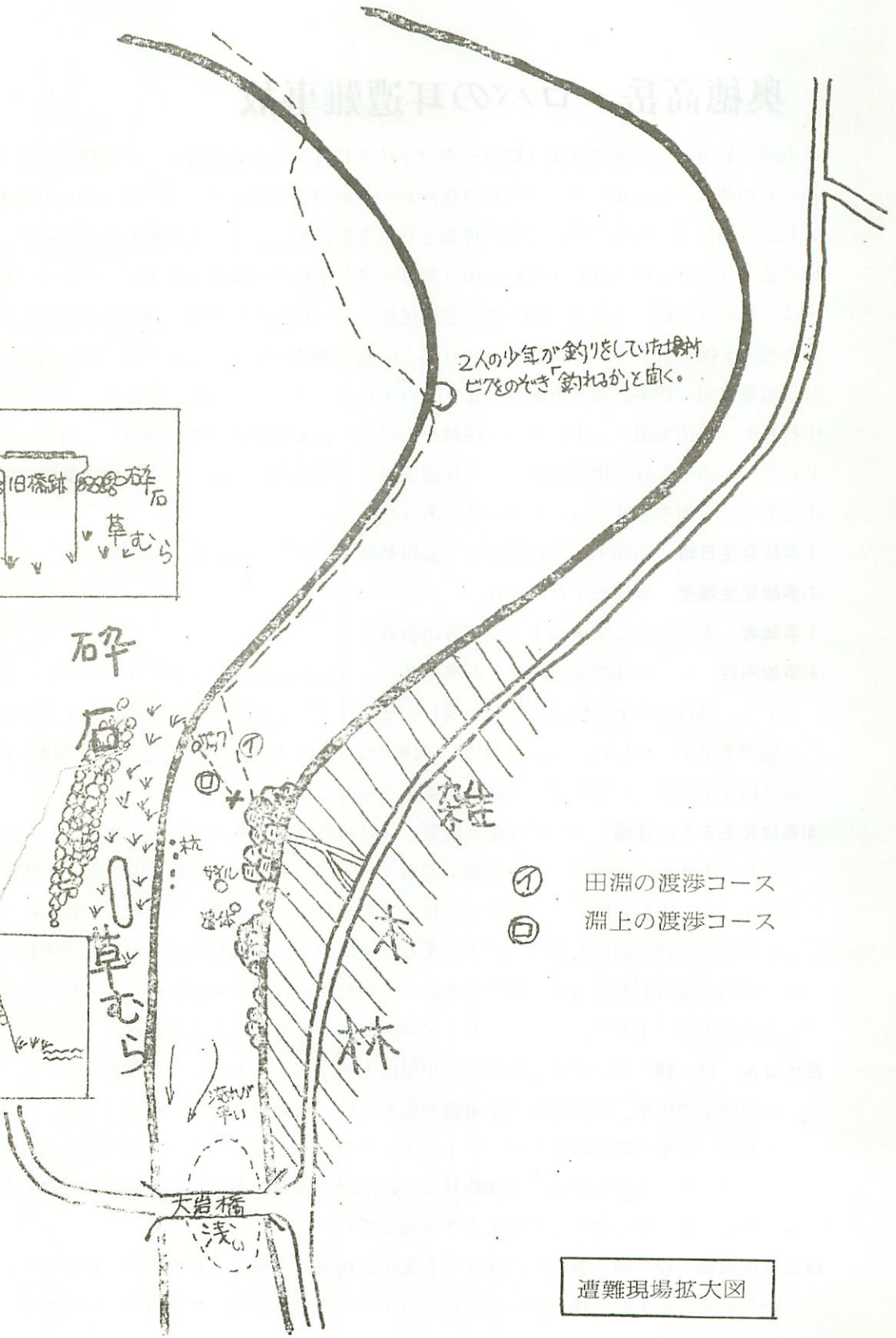
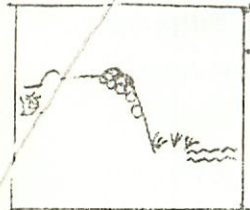
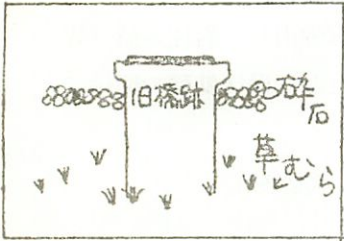
髪の毛をつかんで岸まで一メートルくらいのところまで来たが、淵上は沈んでいく。田淵はやむなく淵上を離し、浮き上がって岩にしがみついた。振り返ったが、淵上の姿は見えない。

このもがき合いのとき助けを求めたので、釣りをしていた少年Aが泳いできたが、田淵のところに来て、「見えへん、どこにもおらへん」という。Aはつれの少年Bに警察へ電話するよう、叫ぶ。



遭難現場概略図

2人の少年が釣りをしていて、
 ビエのやき「釣れるか」と聞く。



- ① 田淵の渡渉コース
- ② 淵上の渡渉コース

遭難現場拡大図

奥穂高岳・ロバの耳遭難事故

兵庫県勤労者山岳連盟は第3期リーダー学校を12月20日から開校し、その修了山行（奥穂高から西穂高への縦走）を、3月17日夜から22日の予定で行いました。修了山行の計画書によれば目的は「これまで学んできた理論と技術を総結集し、その成果をためすために、積雪期の北ア3,000 m級の縦走を行い、第3期リーダー学校の卒業山行とする」であり、行動予定は3月18日新穂高温泉9:00～涸沢岳西尾根2,400 m付近15:00、19日05:00発～涸沢岳～奥穂08:00～天狗のCOL14:00、20日05:00発～西穂08:00～上高地12:00～坂巻温泉、21日坂巻温泉～松本、22日予備日となっていました。メンバーはL、安留絃一（甲山労山）、中村邦興（甲山労山）、平野恭一（西神戸山の会）、安田勢喜（西宮労山）、岩佐正敏（W.V六甲）、西嶋喜好（伊丹労山）、久保富三夫（芦屋労山）であったが久保は就職の関係で出発前日に参加をとりやめたので6名であった。

(1)事故発生日時 1976年3月19日から（安田勢喜さんの死亡は20日9時20分）

(2)事故発生場所 奥穂高・ロバの耳

(3)事故者 安田勢喜 享年25才（西宮労山会員）

(4)事故内容 ロバの耳の通過の際、西嶋がスリップし安留ともども宙吊りになったことから始まり、彼らの引上げ作業に時間を要し、ピバークとなり安田さんが凍死、4名が重度の凍傷で手足を切断した。（安留、平野、西嶋の3名はいずれも両足を中足骨で切断、岩佐は両足指3本切断（6本を削り、両手指4本を切断した。）

(5)事故発生までの経過 3月17日夜大阪発、18日新穂高温泉発09:20～白出沢発12:00～涸沢岳西尾根2,400 m地点テント場15:05着、（夜間、風雪）19日起床03:20、新雪10m～出発06:10、膝から腰くらいのラッセルを交替で行なう。稜線への乗越して西嶋、安田は足場を崩し、特に安田が乗越しに手こずる。稜線07:30、風がきつくなる。涸沢岳の登りから西嶋、安田が遅れ気味、休み休み登っていたため白出小屋着は前後20分程の差がつく。岩佐は涸沢岳の下りで、ヘルメットとビニールシートを風にとばされる。

白出COL 11:30 先に到着した岩佐は小屋に入ろうとして入口の雪かきをしていたがリーダーの指示で中止。全員小屋の南東側で風をさげ、行動食をとり、セルフスト、ヘルメットを着用。小屋の南側に3人パーティがテントを張っており、この日は行動していない様子だった。その人たちの話しでは昨日までは小屋の入口はあいていたとのことだった。COLではそんなに風も強くなく時折青空が見えていた。

白出COL出発 12:00 奥穂への登りでも安田、西嶋は次第に遅れていた。風が強く、西嶋がバランスをくずし、膝をついていた。白出のCOLからの登りは新雪がついていて、トレ

ールはなく、はしごについた氷をピッケルで落しながら登る。

奥穂着 13:00すぎ (推定) 飛騨側からの風をさけて、ケルンの影で休憩、行動食をとり記念撮影、西穂へのトレールはついていなかった。馬の背、ロバの耳間のコルへの下りでザイルをフィックスしてブルージックにより下降。

オーダー 安留、平野、岩佐、西嶋、中村

馬の背とのコル着 14:00 2地点の岩影では風はなかった。ハーケンを打ち中村確保、安留トップでαへひきあげる。赤9巻、40mザイル一杯そこにブルージックで全員をあげ、ラストの中村がトップになってEへ向かってトラバース下降する。

A点は雪稜となっておりハーケンを打てるような岩がないのでしかたなく安留がピッケルを頭までさしこみザイルを2、3重まきつけてアイゼンでふみつけ確保し、末端は安留の安全ベルトに結んでいた。中村はE点を過ぎて途中からくさりピッケルでほり出しホールドにしながらB点にピレーをとり終了点Cをまわりこんだ岩角にジュリングをかけ固定する。平野がつづいてブルージックでトラバース下降してゆくが、E点からそのまま横へトラバースし、くさり場を足場にしてその上を通過してしまう。安田も平野と同じくくさり場の上を通過してゆく。安田が下降しはじめて少しスリップしたがすぐにブルージックがきき止まる。体制をたてなおして下降してゆくがE地点の通過に時間がかかりくさり場に達した時(ブルージックのかけかえに手間どっている安田に「早くいかんと日が暮れるぞ」と安留がハッパをかけている。この時16:20)西嶋が発するが、下降しはじめてすぐN地点でスリップ、安留がひきずりこまれS地点を支点に安留を下にして重なるように逆さまに宙ぶりとなる。2人の墜落で安田はB地点の左側でブルージックのかけかえをしようとしている状態であったので左足をザイルとくさりにはさまれて動けなくなる。

平野は岩佐に青ザイル(9巻、40m)で確保してもらいながら7~8m上の稜線に至っていた。すでに先行していた中村の姿は見え、岩佐の声でC地点へもどる。

中村を呼んだが風に消されて応答なし、宙ぶりとなった安留はけりあげるようにして西嶋の上体をおこしついでザイル末端にザックを固定し上体をおこし西嶋には何とか足場をつくらせ、そこにおいてブルージックでハング下まで雪面を登る。

岩佐は安田を救出するため岩角に中間で固定した青ザイルを持ってB地点へ行き安留たちが赤ザイルを離れるように青ザイルをたらし安田の足をはずす。

安留はハング下でB地点にいる岩佐がたらししてくれた青ザイルにぶらさがり、赤ザイルにセットしたブルージックをずりあげながら、岩佐、平野、安田の3人に引きあげられる。この時安田は岩佐に救出され、C地点でザイルを引いていた。中村は後続の平野がみえていたのでそのままジャングルムの基部まで行き幕営地の整地を行なう。

安留はC地点へ行き、中村の所在をきくがジャングルムをこえていった（実際には平野には見えなかった）ということなのでフライシートをかぶり4人で行動食をとり、休養の後再度西嶋救出のため下降する。うす暗くなっていたのでヘッドランプを使用する（7:00すぎ推定）

中村は後が続いてこないのでは引き返そうかと思ったが岩稜の下りに自信がなかったのでそのままツエルトを張りみんなを待っているうちうす暗くなっておりれなくなってしまう。西嶋は凹角からぬけ出し雪稜のところまで独力で安留のピッケル（安留のピッケルは西嶋のすぐ上でザイルにからまっていた）を持って登って来ていた。ハンク下まで安留、西嶋一緒に登りたらされていた青ザイルを西嶋の安全ベルトにセットして上の3人が引きあげようとするが重すぎてあがらないので安留は再度B点へあがり4人でまず西嶋のザックを引きあげ次いで西嶋を引きあげる。この時安留はB点他の3人はC点でザイルを引く。安田はフライシートをかぶって（寒さを訴えていたため）ザイルを引く。5人がC点に結集したときはすでに夜も遅く、空には星が輝いていた（時間不明）

風が強く寒さが厳しいので、C地点に5人程がすわれる段をつくりいそいでフライシートをかぶる。中村はジャングルム基部の岳沢側の風のあたらないところでカマテンにて1人でビバグ。岩佐は羽毛服安留は一担C点にあがったときに平野の羽毛服を借りて着用。平野は3枚（毛の肌着、毛のシャツ、ヤッケ）安田、西嶋も同じ。安田は岩佐のセーターを借りていたが尻の下にひいていた。

(6)安田くんの死亡にいたる経過 19日の夜は深夜に及ぶ（いつ頃までであったかは不明、星がみえていた）救出作業のため、全員が疲労し（特に西嶋の疲労がひどかった）風も強かったのでそのまま5人がようやく座れる程の段を切りそこに腰かけフライシートをかぶった。エスペースは安留のザック内にあり、ザイルにぶら下げられたままであり、ツエルト（カマボコ型）は中村が持っていた。

フライシートのため足もとは風にさらされて時折フライシートも飛ばされるありさまであった。5人横にならんだのでは幅がたりないので西嶋を安留の両ひざにはさみ込むようにして抱きあった。

うつらうつらして時折目がさめ、お互いに声をかけあい安田くんは平野の右隣りだったので平野が様子を見たり安留が声をかけたりした。そのつど安田くんからは「おう、大丈夫や」という返事だった。

朝方うとうとし8時頃になって急に安田くんの様態がおかしくなった。呼んでも「おう」「おう」としか答えなくなり寒さのためか体も硬直したようになった。そこで平野と場所をかわろうとするが自分では動けない状態になっていた。みんなで彼を動かし彼をはさむ

ようにして両側から全身マッサージを行なうと共に岩佐がホエーブスに火をつけあたたかいものを作ろうとするが風のために火がつかず又ホエーブスの部品がとばされたりした。しかし安田くんの意識は次第にうすらぎ、眠りかけたと思うとうわ言のようなことを言い出し私たちの手をはねのけようとする。平野の膝が言うことをきかないということなので岩佐が中村を呼びに行く。9時であった。「行き15分、帰り15分、予備に15分みて45分までに帰るようにザイルがないので(2本とも固定したままであった)ジャングルまきの道が危険なようであれば声をかけるだけで引きかえすように」と岩佐が出発した後もマッサージを続け、口うつしでチョコレートを食べさせたりしたが、9時25分息をひきとった。呼吸をせず心臓の鼓動も聞こえなかった。すぐ口うつしの人工呼吸を15~20分程こころみるが息をふきかえさなかった。

(7)事故後の行動

3月20日(土) 9:30 呼びに行った岩佐に続いて中村到着、中村は岩佐がジャングル基部の下まで行ったときテントをたたんでもどろろとしてザックをかついでいた。

中村、岩佐、平野の3名でビバーク地点より1.5mほど下の部分を平らにして中村の持っていたカマテンを張る。安田くんに対する人工呼吸を続けていた安留と共にツエルトをかぶっていた西嶋が「紫色がみえる」と幻覚症状を訴えだしたのですぐにカマテンに移す。

安田くんの死亡を確認し、フライシートで包んだあと残った5名がカマテンに入りラーメンを作って食べる、はじめてあたたかいものを腹に入れる。西嶋急速に元気をとりもどし全員眠って休養をとる。

14:30 中村が安留のザックを回収引き続きザックの奥穂側にとばされていた中村のピッケルも回収する。

この日はカマテンにてビバーク、安留、平野、の足指のつけ根付近から先が凍っていた。靴をぬいで新しい靴下にはきかえる。

トランシーバーで救助を求めて交信するが連絡とれず。

3月21日(日) 6:45 起床

7:10 朝食用意

7:40 朝食、パッキング、ツエルト撤収。

安留のアイゼンビスがとんでいたため修理、スパッツも凍ってチャックが動かないので西嶋のオーバーシューズを借りる。そのうえ中村以外凍傷のためぬれておりアイゼンバンドが足らなくなるほどで、出発に非常に時間がかかる。この間に中村はザイル回収。

次に安田くんの遺体をフライシートでつつみさらにカマテンで包んで岩角とハーケンにシュリング等で固定し安置する。ワカン、テントポール、安田くんのザックは置いてゆく。

11:30 中村トップで下山を開始する。C～ α 間が約60mあるため、ザイルを2本つなぎ、途中Bでピレーをとり、 α で固定する。中村のあと平野が続くがクサリ場を過ぎた付近でスリップ5～6mおちるがブルージックで自己確保していたため固定ザイルにぶら下がる形となる。この時右足のアイゼンがはずれて落ちる。そこで安留がB点まで進み、安留及びC点にいる岩佐、西嶋で平野をB点へ引上げ、安留が先に進みE点でアイスハーケンを打ってピレーをとり α 点におり立つ。(15:05)

平野は右足のアイゼンを落したので安田君のアイゼンを借りるためにC点にもどる。

安留の後を西嶋が α の手前に到着、ブルージックをはずし、平野がE点から下降しはじめたとき安田くんの死亡の連絡と救援を求めるため、中村が白出小屋へ出発(15:10)

平野が下りをはじめた時、西穂方面より来てC点で待っていた関西山岳会の3名も下降しはじめる。最後に岩佐が α 点におりたつ(16:30)

そこで安留、平野、岩佐、西嶋の4名は α 点(馬の背とのコル)でエスパースにて幕営。関西山岳会の3名も雪洞を掘る。

安留、平野は靴をぬぐと翌朝、靴をはけなくなるのではいたまま眠る。岩佐、西嶋もそれにならう。

中村は15:45奥穂、16:40白出冬期小屋到着、ちょうど小屋に居合せた東灘労山のパーティのリーダー田淵(常)に安田の死亡と他のメンバーの状況を伝える。小屋にいた元六甲労山会員大西氏、東京竜鳳登高会の三武、上村両氏とともに田淵は17:45現地にむけて出発するも天候悪化のため引き返す(18:15小屋着)

18:51 県連盟は白出冬期小屋からの緊急通信を傍受した松本山岳会、久保田氏からの連絡で遭難発生をキャッチ。ただちに西宮北口労山事務所に遭難対策本部を設置、白出冬期小屋との交信要員として、田淵(創)、杉本の2名を松本山岳会へ送るとともに第一次援助隊13名を車にて新穂高へむけて出発させる。

3月22日(月) 4:20 起床 食事 パッキング

6:00 装備をつけテント撤収中、救助隊が到着。

(8)負傷者の救出と遺体の搬出

3月22日 6:00田淵、関西登高会4名、東京竜鳳登高会2名、兵庫県庁大西氏計8名からなる救助隊が白出のコル出発。安留、他3名は出発の用意をし、テントをたたむところであった。救助隊がこなくても白出のコルまで行動の予定であったという。11:10に安留、12:00に平野、西嶋、岩佐が歩いて白出の冬期小屋に到着。この夜、山尾をリーダーとする第2次救助隊14名が新穂高にむけ出発。この日、中日本航空のヘリコプターをチャーターするも福井から小牧への回送後エンジントラブルを起し飛べなくなったので自衛隊にへ

リコプター出動を要請した。第1次救助隊橋上リーダー以下4名はこの日、穂高平小屋泊。白出コルにある金沢医大のデポ使用了解得る。

3月23日 自衛隊ヘリ松本駐屯地へ。待機するも悪天のため飛ばず。15:30橋上隊白出コル到着。15:20村西隊15名涸沢岳西尾根東灘B.C.へ入る。片岡をリーダーとする第3次救助隊4名、新穂高へむけ出発。

3月24日 7:16凍傷の5名自衛隊ヘリに救出され松本駐屯地へ到着。橋上リーダー以下5名10:07遺体フィックス地点へ到着。同時刻村西隊白出コル着。うち6名が橋上隊の応援へ。この日、遺体は奥穂よりロバの耳より1つ目のピークまで搬出安置。村西隊のうち6名(リーダー山尾)は荷上げのためB.C.へ下る。片岡隊(新穂高にいた赤鹿、久保を加え6名)は16:52森林限界B.C.着。柳原を残しただちを下山。安留以下4名は松本病院で診察を受けた後、神奈川県川崎市の聖マリアンナ医大付属病院へ。

3月25日 6:25行動開始。荷上げ隊6名、9:20白出コル着。うち5名搬出活動へ。12:05遺体、白出コル着。スノーボートを涸沢岳西尾根取付点まであげる。この日遺体は涸沢ピークより約300m下った地点まで搬出し安置。

3月26日 日の出とともに行動開始。白出コル冬期小屋のあとかたづけをしてひきはらう。蒲田富士のコルのエスパス、森林限界のB.C.も撤去する。西尾根取付点のスノーボートを森林限界まであげ遺体の到着をまつ。中崎山荘のご主人のご好意で雪上車に入れるところまで入ってもらい、遺体の到着をまつ。23:35新穂高着。ただちに、検死ののち、神岡の円城寺にて通夜。

(9)事故のまとめと教訓

①修了山行計画について

- (1)生徒の体力、トレーニング状況から見て、決して全員が、この山行内容に適していたとは言えない。当然、メンバーに適した山行内容に変更するか、メンバーについて再検討すべきであった。基本的には積雪期3,000mの縦走のように、きびしい山行を行なう以上、それに応じた力をつけるべきである。
- (2)講師が一人で、全コースについても経験がなく、(ジャングルム、西穂間の経験なし)又、体力のある、久保が欠けるという状態では、山行出発後であっても計画変更すべきであった。

②第3期リーダー学校について

- (1)まず受講生の自覚の問題が指摘される。高度な登山理論や技術を教えてもらうという受身の姿勢からぬけきれず、自分がリーダーとして、どうやってゆくかという応用の観点に立っての積極的な姿勢に欠けていた。そのため講師から要請されていた自治会もつく

らずじまいであり、修了山行の準備についてもリーダーまかせになっていた。

(2)講師団の方でも、コーチ団会議がもたれず、限られた講師にまかされ、指導面での意見統一がなされてなかった。当面予定されていたニュース等も発行されず、事前の準備も不十分であった。

(3)サブリーダー講師のいなかったことについて

大峰縦走の時も講師団をはじめ、県連のリーダークラスに、サブリーダーをあたったが、人がいなくて、サブリーダーなしに出発した。今回も同様、サブリーダーとしては、誰もいなかった。しかし事故がおきてからは多くの仲間が休みをとって、救助に来てくれた。サブリーダーをあたる時、このような危険性を充分認識して、話しあっていたなら、協力を得られていたと思う。山行そのものに対する甘さがあったと言える。

③出発まで

(1)岩佐、平野の遅れたのは平野が岩佐との待ち合せ時間に来ず平野のガソリン入れに岩佐の待っていたガソリンを入れるのが遅れたことに国鉄の順法闘争による列車の遅れが重なったことによる。このような準備はもっと以前にやっておくべきであり山行直前にあわせてぬよう十分余裕をもって行動する必要がある。

(2)直接2人が遅れた原因ではないが他のメンバーにも少なからず心理的な影響を与えた問題として国鉄のストがある。前日までストが中止されるか否か中止されなくても影響が及ぶか否か判明しなかった。そのため一応出発する体制で大阪駅に集合し列車が運行されれば予定どおり出発、運休であれば翌日出発ということにしていた。しかしメンバー各人の判断はまちまちで運休されるだろうと判断し17日の出発に消極性があった。パーティ全体で確認しリーダーの指示変更がない限り17日出発ということで万全の体制をとるべきである。

(3)準備の不十分さという点で西鳴が水筒を忘れたこと、及び個人装備だけで一杯になってしまう小さなザックで来たことは今回の山行そのものに対する認識不足に基本的な原因がある。(結局、久保のアタックザックを借りる)又、装備、食糧についても当日分担するというのであったので各人の荷量が把握できなかったのも一因である。

④18日夜の気象判断について

18日午後4時の天気図は安留、平野がとり午後10時には安留がとった。いずれの場合も最後まで等圧線を引いたりして天気図を完成させなかったので冬型になって来ているということは解ったが、くわしくは判断できなかった。特に冬山では16時のみではなく22時の気象も聞ききっちりと等圧線も引いて天気図を完成させ時間をかけて翌日の天候を予想することが重要である。冬型になったからといって必ずしも行動中止にはならないがより慎重

な行動をとる判断材料となったであろう。

⑤安田、西嶋が遅れたことについて

涸沢岳の登りで安田、西嶋が遅れ岩佐、平野が先行してしまったが、(安留、中村は安田、西嶋につく)一緒に行動してこそ弱った仲間には強い励ましとなる。又、パーティが離れすぎるとリーダーの指示が届かなくなりパーティとしてはまとまった行動のできなくなる危険性がある。この危険性がロバの耳での中村先行で現実のものとなった。

⑥白出のコルでの判断について

リーダーの判断としては白出のコルに着いた時間が遅かったので天狗のコルまでは無理としてもできるだけ足をのばそうと小屋にも入らなかった。特別にメンバーの体調も聞かなかったが、メンバーも又この時点では体調も悪くなく先に進むことが了解されていた。(岩佐は涸沢岳の下りでヘルメットを落したりして先に進むのがいやだなと思ったがリーダーの指示で気をとりなおす)

⑦奥穂での判断について

中村に西嶋がふらついていることを指摘されメンバーに「どうや」と聞いたが誰も不調を訴えなかった。しかしもっと詳しく特に奥穂の登りでも遅れていた安田、西嶋について体調を聞きメンバーとしても卒直な意見を出しておればちがった判断もありえた。又、リーダーがトップを歩いていたためパーティ全員、特に遅れていた安田、西嶋の状態を的確に把握できていなかった。サブリーダーのいないという欠点がここにも見出される。

⑧馬の背とのコルでの判断について

コルに到着したのが14:00、リーダーは正月に通った経験からもあと1時間位(ジャングルムの基部)までは進めると判断した。しかしこの日の行動時間(出発から8時間起床からだ10時間40分になろうとしていた)正月とは全々がっていた雪の状態及び馬の背のコルへ下る時、ブルージック下降に手間どったことからこの日はここで幕営するべきであった。

⑨ロバの耳のトラバースについて

(1)トップの安留が、ルートを誤まり、 α につきあげてしまう。 β から直接くさり場の方にトラバースしようとして、すべりそうなので上の方にルートをさがしているうち α へつきあげてしまう。(ルートは β から一担Eへ斜上し、そこから、くさり場に移っているが、E点が出っぱった岩で下部に雪がついていたため、ルートとわからなかった。直接くさり場にトラバースすることは21日同じところを下降しようとした平野が滑落したことからも無理であったと言える。)そのためA点より下りぎみの危険なトラバースとなった。

- (2)風の冷たいナイフリッジ状の雪稜に一担全員をあげたため、大巾に時間がかかり、体力を消耗することにもなった。又、確保点の見つからない状況では、ここに全員をあげたのは誤りであり、トップはバックをするか、新たなルートをさがすべきであった。確保点というものをもっと慎重に考えるべきであった。
- (3)寒い中で順番待ちをしたため、あとになる程、特に西嶋にあせりが見られ、滑落の原因ともなった。
- (4)西嶋のシュリングは6唸で2重まき位にしかしていなかったため、とまらなかった。(4唸を落したため)9唸のザイルに6唸のシュリング、それも2重位ではダメである。(平野も21日の下りで6唸のシュリングを使ったが、何重にもまいていたので、滑落したがブルージックがきいて止まった。)特に冬はザイルに雪がついて凍ることもあるので、ブルージックについて太さと、まき数を慎重に考えるべきである。
- (5) α 点からクサリ場の方が見えにくいというえ、トラバースの順番を待っている時、他のメンバーは飛驒側からの風をさけるために岳沢側を向いていたため、トップの歩いたコースが、はっきりわからなかった。そのため、ルートを誤りクサリの上を通ることになり、安田がくさりやザイルに足をはさまれる結果になった。クサリはホールドとして使用するべきであった。
- (6)パーティ編成について
この山行全体について言えることだが、このような冬山3000mの縦走に対しては、それに応じたパーティ編成でなければならない。6人が一緒に行動するというのではなく、2人ないし3人のザイル、パーティで行動するべきである。その方がスピーディであるし、安全性も高くなる。特にフィックスではトップとラストは自由に動けるが、中間はザイルに引っぱられてバランスをくずすことになる。今回の山行では、そのようなことが度々あり事故につながっている。(ザイルは2本しか持っていなかった)
- (7)トップの中村はC点でザイルを固定し平野がC点に到着してから一人で先に進んだ。正月の経験からもザイルなしでジャンダルムの基部までは行けるものと判断していた。しかし、ロバの耳のトラバースではザイルをフィックスする位、危険な個所であり、リーダーの指示もうけていなかったから、先行せず全員がそろそろまで待つべきであった。又、中村自身も危険な状態に陥っても誰にもわからないという状態であった。パーティが離れてしまった時が、最も危険であるということ認識しなければならなかった。

㊦安留、西嶋の救出活動について

- (1)C点にいた平野、岩佐は安田を救出。安留、西嶋の無事を確認した後、まず、救出法

について打合せを行ない、中村を呼びもどし、4人で救出作業をすべきであった。3人では1人を引き上げるのは、せいっぱいである。そのため体力の消耗もはげしく救出にも時間をついやすことになった。日頃から搬出法についての知識を十分身につけておくべきであった。

- (2)安留が救出されてから中村の所在を聞いたが、中村はジャングルムをまいて行ったという返事だった。(実際には平野からは見えなかったが、ジャングルムの基部の岳沢側にいた)が、事実をよく確認し、中村を呼びに行くべきであった。

㊦中村の行動について

- (1)平野が岩佐に確保されて続いて来るのが見えたのでなお先行し、ジャングルムの基部に至ったが、15分程で来れるところを30分たっても1時間たっても来ないことに何かあると感じてもどるべきであった。

気のついた時には暗くなりかけていて基部からの下りに不安を感じたので、そのまま待っていて暗くなってしまいもどれなくなってしまうのである。

- (2)中村の先行については3月14日のトレーニングにおいても勝手に早く帰ってしまった。(当日夜の甲山労山の指導部会に出席するため)この時リーダー(安留)から注意されているが同じことがこの卒業山行でくりかえされている。

①リーダーの指示に従うこと。②「パーティが離れた時が事故のおこる時」という認識が不十分であった。

㊧3月19日のビバークについて

ようやく5人が座れる位の段をつくり、フライシートをかぶったが、冷い風のふく中でのビバーク、凍死、凍傷の危険性を認識していたならばもっと細かく気を配れたと思うが、この時はすでに判断力がおとろえていたのか気がまわらなかった。

- (1)もっと広いビバークサイトを作りみんなが抱きあえるようにする。
(2)安定した足場をつくり、アイゼンをはずし靴ひもをゆるめる。
(3)行動食を沢山食べる。(安留が救出された時にはみんなで行動食をとり西嶋も下で行動食をとっていたがビバークに入る前には食べなかった。)
(4)ビレーをとってすべらないようにして、シュラフをかぶる(平野がシュラフを出したが入るとすべるので尻にしていた。)
(5)メタやローソクで暖をとる(ローソクはビバーク中に落してしまった。)
(6)上からかぶれるツェルトがあればよかった。フライシートではとばされないように端をおさえていなければならないのでお互いの体が密着しないがツェルトであればお互いに体をよせあうこともできたであろう。

(7)リーダーはピバークに入る前、再度詳しくメンバーの体調を把握し適切な措置（安田に対する防寒、岩佐に対する手袋交替等）をとるべきであった。

⑬20日のピバークについて

- (1)トランシーバーでの通信ができなかった、電池を入れかえたり電池をぬくめたりしてためてみる必要もあった。
- (2)凍傷に対しての知識が不十分であったため、19日のピバークでも痛切に感じなかった。20日になって凍った足をぬるま湯につけるかどうか迷った。（その後の措置に自信がなかったため）結局かわいた靴下にはきかえ、翌21日は靴をはいたまま寝た。正しい凍傷の知識があればこのような状態になる迄に措置できたであろう。
- (3)中村が岩佐と共に救助を求めに行こうと言ったがリーダーは岩佐の体力、及び中村一人だけの行動についても不安であり、二重遭難を防ぎ全員で安全な場所までもどるために行かせなかった。

⑭撤退行動について

- (1)平野のスリップは、フィックスザイルが張ってE点まで動けなかったため直接クサリ場から下降しようとしてスリップした。フィックスの欠点である。このようなコースは、ザイルパーティとしてスタカットで行動する方がよい。
- (2)馬の背の科尔で、リーダーはこれ以上時間はかけられないと判断し、中村の力に期待して救助にむかわせた。中村はそれにこたえて吹雪の中を白出小屋に到着した。

（ 兵庫県勤労者山岳連盟第3期リーダー学校修了山行
奥穂高・ロバの耳における遭難事故のまとめより
1976年11月発行 ）

鹿島槍・赤岩尾根遭難事故

尼崎勤労者山岳連盟は春山合宿を後立山連峰周辺で1974年4月29日から5月6日の予定で行いました。全体の目的を(1)同山域4年目(冬4回、春3回)としての地域研究(2)リーダー養成(初・中級)(3)参加者は夏山合宿、夏山登山成功のために貢献する。とし、パーティ3隊にしそれぞれの目的を(1)赤岩尾根隊 — 初心者の春山体験とピークハント(2)遠見尾根隊 — これまでの体験を生かしてより広範囲の縦走を行う。(3)主稜隊 — 後立山連峰の登攀ルートの導入、としていた。メンバーは(1)赤岩尾根隊はC.L高多弘、S.L瀬戸清子、上田孝男、久住重和、横山泰士、松森薫、天田幸子、中村優子の8名。(2)遠見尾根隊はL山本久雄、田尾由起子、仲宗根勇の3名。(3)主稜隊はL山野清隆、仲義照の2名で総員13名であった。

(1)事故発生日時 1977年5月5日09時40分

(2)事故発生場所 鹿島槍ヶ岳赤岩尾根の関西山岳会遭難レリーフの上部約50m地点を下降中

(3)事故者 上田孝男 享年27才

(4)事故内容 滑落の後転落し脳底骨折により死亡。

(5)事故発生までの経過(赤岩尾根隊の行動) 5月1日夜大阪出発。2日、大谷原～西俣出合～赤岩尾根～高千穂平着14:00(B.C設営)。3日B.C～冷池山荘～鹿島槍と布引岳の中間あたりから上田さんの体調が悪くなる。気温低下、風強くなる。～鹿島槍南峰着13:55～冷池山荘着15:50、上田さんアイゼンの一部を紛失、冷池山荘に泊まる。上田さん嘔吐16:00。上田さんおかゆを食べ体調やや良20:30。4日上田さん体調良。上田さんに高多氏のアイゼンを履かせる。出発07:10。高千穂B.C08:50着。雪上技術訓練の後、テントを撤収し下山を決め13:30出発したが14:20縦走隊と無線交信が出来たので元のB.Cから約800m下方にテントを設営した。高多他2名は縦走隊を迎えるため冷池に向かい、16:52合流し17:50全員集結した。5日、09:10出発。オーダーは山本久、中村、仲宗根、天田、横山、上田、高多、田尾、松森、仲、瀬戸、久住で山野はフリーとした。

(6)事故直後からの状況 9:40レリーフ上部で上田さんが一度スリップ仰むけに尻で滑べるがピッケルで停止した。ピッケルを支点に起き、左足を前に出すが、左足がスリップして尻をつき滑りはじめる。尾根上を1m位滑べり、すぐに右の西俣側の沢に落ちてゆく。沢の中ではブッシュが密生しているが、それをつかもうともせず尻をついたまま滑り落ちていった。山野がすぐに後を追い、続いて高多、仲も下降する。山本、仲宗根がザイル、医薬品、トランシーバーを持って下降する。10:05単独行者2名が上田さんを発見しコール。山野応答。もう1名の単独行者が西俣出合へ連絡に行く。10:10山野、上田さんの所へ着く。頭部挫傷、口と鼻から出血多量、呼吸、脈拍弱い。10:15呼吸、脈拍停止。10:25山

野、救援連絡のため西俣出合へ下山。10：40瞳孔拡散の確認、シュラフで遺体を包み搬出作業（長銀山の会、グループ、ド、エギュー18名）12：50西俣出合。14：50大谷原。鹿島山荘から霊柩車で16：03六角堂に到着。17：00検死。6日、11：30火葬。13：14納骨。夕刻大阪到着。

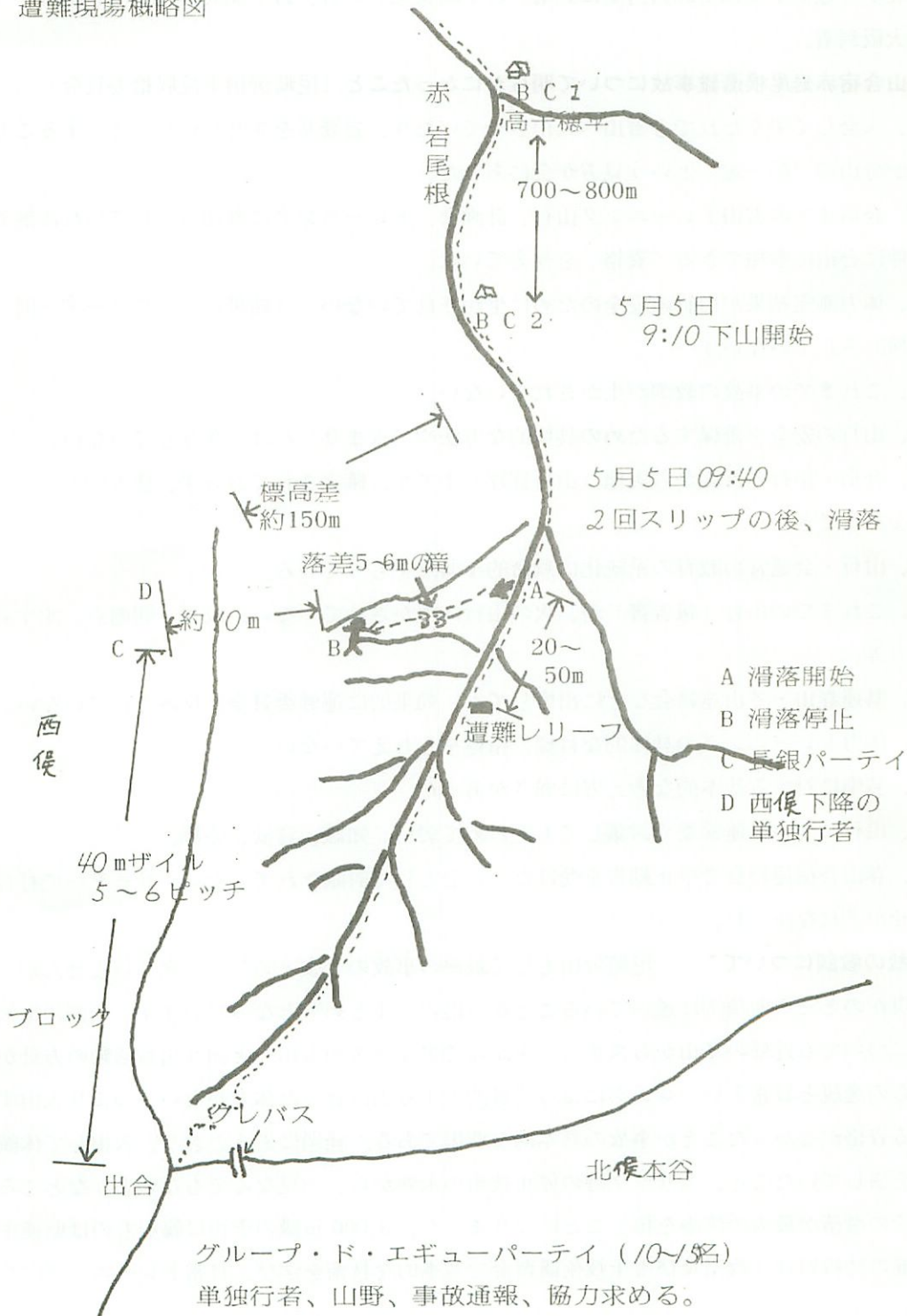
(7)春山合宿赤岩尾根遭難事故について明らかになったこと（尼崎労山事故収拾委員会）

- 1、入会してすぐだれでも雪山へ入山させていたり、岩登りをさせていた。そうすることが労山の“第一線”という見方が会にあった。
- 2、合宿までの雪山トレーニング山行、計画会、トレーニングに参加さえしていれば無条件に合宿に参加できる“資格”を与えていた。
- 3、体力測定結果が山行の安全のために生かされていない。（結果についてリーダー間で検討されていない。）
- 4、これまでの事故の教訓が生かされていない。
- 5、山行の安全を確保するための具体的な方法や“きまり”がはっきりしていない。
- 6、合宿・山行の計画から実施（山行管理）までが、確立されておらず、個人的な力でこなわれてきた。
- 7、山行・会運営の教育の系統化に致命的な弱点をもっている。
- 8、これまでの山行（報告書）が、次の山行に生かされていない。成果、問題点、おすすめ方等。
- 9、県連春山・冬山連絡会などに出席しても、効果的に運営委員会に反映されていない。
- 10、体力トレーニングの具体的な目標、指標をもちえていない。
- 11、装備に対する基本的な考え方に弱さがあった。
- 12、山行について運営委で討議してもきわめて弱い。知識、意欲、姿勢。
- 13、春山合宿連絡会で中止勧告を受けたが、会として討議されていない。リーダーで打合せがされなかった。

(8)事故の教訓について 尼崎労山として最終の事故の“まとめ”は出来ていませんが、現在のところ前項(7)に述べていることが一応の“まとめ”となっています。今回の事故についても近郊の冬山からステップをふんでアルプスの雪山へと向う山行活動の方針からの逸脱と日常トレーニングによって目的とする山に合った体力がない、つまり入山する資格がなかったことが事故の基本的な要因である。経過にあるとおり、入山して体調を崩していたこと、スリップ時の停止技術の未熟から、一見なんでもないようなところでの滑落が最大の惨事を招くことになりました。3,000 m級の雪山に臨むものは県連主催の初級岩登り教室及び雪上技術講習会で基本的な技術を学び、日常トレーニングに励

むことによって確実に安全に余裕をもって自らの山行技術水準を向上させることができるということを上田さんの事故から今日においても教訓とすることができます。

遭難現場概略図



八ヶ岳遭難事故

(八ヶ岳遭難者追悼集会の資料による)

I 事故の概要

1. 事故発生日時

1982年3月21日 午前9時35分頃

2. 場所

八ヶ岳連峰阿弥陀岳中岳沢 (阿弥陀岳と中岳の科尔直下150m付近)

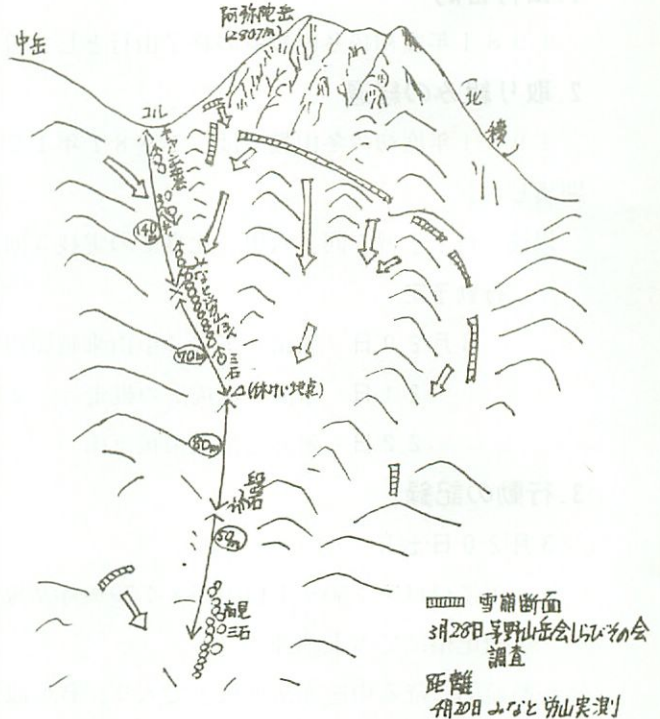
3. 雪崩遭遇時の状況

雪崩発生時、中岳沢には上部からキャノン山岳会 (2名登高中)、所属氏名不詳パーティ (2名下降中)、当会 (13名登高中)、単独行者 (登行中) の順に18名が行動中であつた (中岳と阿弥陀岳との科尔直下数10mから約200mの地点に集中)。

当会パーティは、科尔直下約150m地点を登高中、中岳側・阿弥陀岳側それぞれにほぼ同時に発生した2本の雪崩の直撃を受け、沢筋を約200m流された。

(最上部にいたキャノン山岳会2名は難を逃がれ、下降中の2名パーティのうち1名は数10m流されたもの下半身埋没のみで事なきを得た。当会パーティ13名と単独行者は沢筋を約200m流され約50cmから約4mの深さに埋没)

位置関係図



4. 事故内容 (当会関係)

死亡 11名 (死因 窒息死)

新井 良	当時62才	久保百合子	当時31才
橋田 孝弘	" 42	権藤美恵子	" 28
安田 憲市	" 32	問田 幸治	" 28

柳 静子 当時27才

田丸 敦子 当時24才

杉本 悦子 " 25

沢田 和史 " 21

田中かおる " 24

救出 2名

高見 正幸 当時32才(顔面挫創、全治3週間)

松本 智子 " 26

(当会の他に死亡1名・救出1名)

II 事故の経過

1. 山行目的

1981年度初級冬山教室の終了山行として雪上技術・雪上生活を実践する。

2. 取り組みの経過

1981年度初級冬山教室は、1981年12月に実施計画を決定し、翌年1月19日に開講した。

以後、机上学習5回、六甲、比良での実技3回を経て、3月八ヶ岳での終了山行となった。

行動予定

3月20日 入山 午後、中山乗越周辺で雪上訓練

21日 赤岳～硫黄岳の縦走 (2班による交差縦走)

22日 阿弥陀岳登頂後下山

3. 行動の記録

3月20日(出雪)

美濃(117:50)～小松山荘(8:50)～赤岳鉱泉(11:10)(BC設営)。13:00～15:00中山尾根にて雪上訓練

雪が断続的に降る中を赤岳鉱泉まで入り、BC設営。午後、中山尾根北側斜面で雪上訓練(主として、アイゼンワーク、ヒッケルワーク、雪崩実験を行う)。夜、テントでミーティング。翌日は、悪天候の場合、縦走を中止する旨確認して就寝。

3月21日(旧雪)

BC(8:00)～行者小屋(8:50)～文三郎道との分岐～小休止(9:20～9:30)～9:35頃中岳沢にて雪崩に遭遇。

午前4時起床、出発準備を整えるが雪のため縦走を中止。しばらく天気待ちをした後、7時過ぎ阿弥陀岳を往復することに計画変更。8時にテントを出る。行者小屋を経て中岳沢に入り、

途中10分間休憩。中岳と阿弥陀岳のコル直下150m付近で雪崩に遭遇する。

4. 救助活動

3月21日(日)

- 9:35頃 雪崩発生
- 9:50頃 松本智子救助される。(彦根キャラバン会の手による)
- 10:00頃 高見正幸救助される。(キャノン山岳会外の手による)
- 登下降中の登山者、山小屋関係者、小屋及び周辺で停滞中の登山者により捜索活動が開始される。
- 11:00 赤岳鉱泉小屋を通じて会留守宅、警察へ連絡。
- 11:20 長野県警山岳救助隊、長野県諏訪地区山岳遭難防止対策協会への救助依頼。出動、捜索開始。
- 11:45迄に 7名の遺体発見。
- 12:15迄に 3名の遺体発見。
- 14:10 第1次救助隊(曾宮章、中岡清貴、福嶋実)長野県へ向けて出発。
- 14:30 神戸みなと勤労者山岳会八ヶ岳遭難対策本部設置。(会事務所)
- 17:00 第2次救助隊(久米孝次、氏平晴美、柿本敏幸、小松和彦)長野県へ向けて出発。
- 17:00 吹雪のため、安田憲市、田中かおる2名の行方不明者を残したまま捜索活動を中断。
- 10名の遺体を赤岳鉱泉から諏訪警察署へ搬出する。
- 20:45 第1次救助隊、諏訪署着。
- 22:15 遭難者家族、兵庫県勤労者山岳連盟救助隊、神戸出発。

3月22日(月)

- 4:50 遭難者家族、諏訪署着。
- 9:30 捜索活動再開。
- 10:20 県連救助隊(みなと労山4名、県連46名)捜索隊に合流。
- 14:47 田中かおる、遺体で発見。
- 15:13 安田憲市、遺体で発見。

Ⅲ 事故原因の分析

1. 直接原因

(1) 事故発生原因

イ) 春先の二つ玉低気圧の通過に伴う降雪と気温上昇により自然発生した表層雪崩にまき込まれた典型的な気象遭難である。

ロ) 事故現場通過時、雪崩への注意が不足していたため事故に遭遇し、雪崩の危険に対する基本的な措置をとらなかったことが大量遭難につながった。

(2) 事故の特徴

イ) 3000m級の急峻な山塊でありながら、冬山のゲレンデといった感じにとらえられている八ヶ岳のしかも冬山入門コースとして知られている阿弥陀岳への冬期一般ルートであり、毎冬初心者を含む、多数の登山者が登下降する中岳沢で起こった事故である。

ロ) 事故当時、多くの登山者が行動しており（現場付近では5パーティ21名が行動していた）、3パーティ15名が雪崩の直撃を受け、うち12名が死亡するという大量遭難事故となった。

ハ) 積雪が多量の水分を含んでいたこと、雪崩が沢筋に集中し相当深く埋没したことにより事故の発見が早かったにもかかわらず、生存者は3名と非常に少なかった。

(3) 気象状況

イ) 積雪状況

20日午後、雪上訓練での雪崩実験で表面から10cm位のところに弱層のあることが確認されており積雪は不安定となっていた。21日の中岳沢では降り続いた湿雪と気温上昇により積雪はさらに不安定となっていた。

ロ) 天候状況

21日午前9時頃、赤岳鉱泉では気温2℃とかなり高温であった。八ヶ岳周辺は、山麓はかなりの雨・標高2000m付近ではみぞれ・稜線では雪と、いわゆる三段降りの悪天となっていた。行動開始時（21日午前8時）の天候は小雪で稜線も見えかくれする程で視界もかなりあった。また事故現場付近（中岳沢）では小雪、視界200m程であった。

(4) 問題点

イ) 気象判断

天気図による天候判断は3月20日12時の天気図が最新情報となっており、その後の判断は、その時々、その場所での天候によっている。山域全体の天候やその後の変化につ

いて、正確な情報に基づいての予測はしていなかった。

21日朝、赤岳鉱泉から行者小屋、中岳沢にかけては、局地的に高圧部があったこと（局地天気図による）や、地形から、風もなく、小雪の舞う程度の天候となっていたが、実際には、前述の三段降りという悪天の最中にありこれを見抜くことが出来なかった。

天候が不安定な場合、常に最新の正確な情報を得るよう心がけ、慎重な行動判断を下さなければならない。

ロ) 雪崩の認識

雪崩による事故が少ないと言われている八ヶ岳においても、雪崩の危険があることは、これまでの経験、知識から認識していた。

また当日、ジョウゴ沢への氷瀑見学の話が出たが『雪崩の巣に行くようなもの』と一蹴したことや、前日の雪崩実験の結果からも雪崩に対する認識はあったと思われる。

ハ) コースに対する認識

「阿弥陀岳への登頂」の決定後、注意は中岳のコルから阿弥陀岳山頂までの転滑落にむけられてしまい、雪崩の最も危険な沢筋をとるコースを含んでいるにもかかわらず、冬山初心者でも容易に登れるルートという先入観から、当日の積雪状況やコース上の諸条件の比較検討がおろそかにされている。

また早朝からかなりの登山者が行動し、中岳沢にもはっきりしたトレールがついていたことも、雪崩への注意をおこたらせた一因となっている。

二) 行動決定について

3月20日夜、ミーティング時、予想される翌日の悪天に対処し、赤岳～横岳の縦走は好天の時のみと確認したこと、又、21日朝、縦走を即座に中止したことは、天候状況とメンバーの力量からみて正しい判断であった。

予定を変更して、阿弥陀岳登頂に決定したのは、次のことからと思われる。

- ・天候も小康状態となり、回復への期待ももたれた。
- ・周囲のパーティも行動を起こしている。
- ・メンバーからも行動を起こしたいという旨の発言があり、「せっかく来たんだから」という気持ちがあった。
- ・予定コースから稜線は吹雪であっても、スリップさえ注意すれば冬山の厳しさを味わう機会ともなる。

(5)まとめ

以上のように当日の気象（積雪）条件は非常に不安定となっていたが、現場の状況、ルートからの状況から雪崩の危険を事前に察知することは、非常に難しかったと考えられる。まさか

と思われる場所で思いもしない雪崩に遭遇したことは不運な面も多いといえる。

しかし冷静に行動の結果を振り返るとき、指適される問題点も多い。いついかなる時に危険にさらされるかわからない冬山の厳しさを常に認識しておれば、どんなところでも、基本に忠実な行動がとれるはずである。

一歩山に入れば、常に危険はつきまとうという自然の厳しさをあらためて知らしめた事故である。

2. 間接原因

(1) 初級冬山教室の取り組みと問題点

イ) 初級冬山教室の位置づけと経過

当会の初級冬山教室は、無積雪期の登山技術、知識、経験を有する会員を対象にして、雪山登山の基礎知識、技術を習得し、春山から冬山へのステップとする雪山登山の入門として位置付けられ、例年1月～3月に机上学習6回から7回(約15時間)、実技4回(6日間程度)、体力測定を行なった後比良山、氷ノ山等での合宿をもって修了とする内容となっていた。

1981年度初級冬山教室は、1981年7月5日第11回総会で教育体系に基づき年間行事として決定された。

そして12月7日から教育部会で、具体的に内容が検討され、12月16日の運営委員会において、教室の目的や実施計画(案)について検討された後に、新年1月6日の運営委員会で最終的に決定された。

〈教室の内容〉

受講生	14名
テキスト	「山と仲間」の冬山特集を再編集して作成
内容	第1課 冬山入門
	" 2 " 冬山気象
	" 3 " 装備と食料
	" 4 " 雪上技術と生活
	" 5 " 医療

ロ) 取り組み上の問題点

a、終了山行の目的地を南八ヶ岳にしたことについて

会の教育体系、第11回総会決定、ひいては県連盟山行活動強化の方針では冬山初心者はずまず雪になじむことを重点に、その入山対象は、比良山、氷ノ山等の近畿圏低山となっている。

しかし、これに反し

⑦ 3000m級の山岳でありながら、アプローチが短い。

⑧ 通年営業の山小屋が多い。

⑨ 会としても過去夏冬を問わずよく入山している（3月にも2回入山したことがある）。

等を理由に終了山行が八ヶ岳に決定された。

これは会の指導者に初級冬山教室の目的と八ヶ岳に対する認識の甘さがあったことに起因しており、きびしく指摘される場所である。

b、教室の内容について

テキストに基づき、予定の日程により実施された教室は、冬山初心者対象のものとして内容のあるものであった。ただ、雪崩については、第1課「冬山入門」で冬山の危険な要因としてとりあげその発生原因、対策等の概略説明を行ったのみに終わっており、冬山気象で詳しく取り上げる予定のところ、時間的な都合で不十分に終わった点が反省しなければならないところである。

c、受講状況について

受講生14名のうち、受講状況が良かった者は半数しかいない。中には、自学によって受講できない分をカバーする者もいたが、参加状況は不十分であった。

(2)八ヶ岳修了山行の取組みと問題点

イ) 日常トレーニングについて

日常トレーニングの重要性は教室の中だけでなく、日常から強調されていたが、継続的に実施している者は少なく、全会員にまでは定着していなかった。

こういう状況の下で、受講生については座学開始前の1時間の合同トレーニング、（2月末からは週2回）を実施したが、参加状況は悪かった。

ロ) 入山前体力評価について

兵庫県連盟の基準が示されており、会合宿前等には実施していたが、参加状況は悪く、徹底されないまま今回の初級冬山教室に至った。教室では、7分間体操での測定がなされたにすぎない。

ハ) 任務分担について

通常山行と同様の任務分担がなされていたが、次の問題点が指摘される。

a、サブリーダー

登山教室の世話役という意味で、教育部員がこれにあたったが、講師2名をサブリーダーとして位置け、その任務を明確にし、13名の大会パーティへの対応をしておくべきであっ

た。

b、補助者

初心者が多いため、コーチ格、先輩格として一定の冬山経験者の参加を求めたが任務があいまいにされていた。(本人達にも自覚されていなかった。)

c、受講生による任務分担

パーティでの任務分担は、学んだ冬山の知識を実践し、より確実なものとするために受講生に割り当てたが、特にリーダー判断の重要な資料となる気象係を受講生一人のみに定めたことは問題であった。受講生を指導する意味からも、任務の確実な遂行を期するためにも、講師・補助者にも任務分担をすべきであった。

二) 山岳保険について

例年、総会で万一の事故に備えるべく保険への加入義務が確認されている。

しかし、実際には岩登りや冬山登山をする者に対して、加入の指導がなされているのみで、山岳保険の加入を、山行参加への絶対条件とするまでにはいたっていなかった。

(3)まとめ

以上のようにこの山行の取組段階においても多くの問題が指摘される。これは口では「安全な登山を」といいながら、一歩間違えば死につながる危険をも内在した登山を行う山岳会の指導責任者のあいまいさに起因している。真に仲間を大切にす姿勢が貫ぬかれていたなら、登山の計画と準備という最も重要な段階で少しのあいまいさも残さない指導ができたはずである。真の友情はいいかげんさや甘さを捨てた肝心な時の厳しさである。これは日常の中で意識的に追及されていかなければならない。

IV 教訓を生かして

今回の事故は単に遭難者数だけをとっても非常に大きなものであり、マスコミもセンセーショナルにとり上げた。

かけがえのない肉親を奪われた遺族の悲しみ、怒りは、私達の想像も及ぶところではないが、会にとっても、中心となって活動してきた会員を11名も失った打撃ははかり知れないものであった。

また、登山を働く者の権利としてとらえ、その創造的發展を目差す労山運動にとっても営々と築き上げた社会的信頼に少なくない影響を与えた。

このようにあまりにも大きすぎた事故によって、全てを失ったとしか思えなかった私達にも、

事故を振り返る中で大きな教訓を得ることができた。

まず第一に、私達は、直接的な原因から、登山の基本の重要性和、自然に対してはどこまでも謙虚でなければならないということを身にしみて学んだ。

第二には、亡き仲間の足跡を追うことによって得られた「生命の尊さ」である。ともすれば生命さえ軽視されがちな社会風潮の中で、平凡な日常であっても生きてゆくことがいかに大切なものであるかを学んだ。

第三は、仲間のすばらしさである。「同じ仲間だから」というだけで、我が身の危険をかえりみず、救助にあたってくれた山仲間、また支援にかけつけてくれた多くの人達から、仲間のすばらしさを学んだ。

我々の前途は厳しいものであろうとも、これらの大きな糧を胸にゆるぎない勤労者山岳会を築いていく事を誓う。

五竜岳遠見尾根遭難事故

西宮勤労者山岳会は1963年9月に創立され、今年で20周年を迎えました。これを記念して北アルプスの全ルートを走破する計画が総会、運営委員会で決定されました。今年の夏山では8パーティ（25名）を北アルプスへ送り出しました。本パーティもこれらの取組みの一環として計画されたものであり、計画書によれば目的を「体力と技術の向上」とし8月12日夜大阪発、13日猿倉～白馬テント場、14日テント場～五竜山荘テント場、15日テント場～キレット～種池テント場、16日テント場～針ノ木テント場、17日テント場～蓮華岳ピストン～扇沢～大町～大阪着といういわゆる後立山幕営縦走であった。メンバーはCL、村野健、SL辻宗郎、北丸和美、森田実の4名であった。

(1)事故発生年月日 1983年8月15日午前07時55分

(2)事故発生場所 五竜岳遠見尾根の大遠見と中遠見の中間地点を下山中

(3)事故者 辻 宗郎 享年45才

(4)事故内容 滑落の後、約100m転落し全身打撲により14時30分死亡

(5)事故発生までの行動概要 8月12日 西宮を21：40に神戸労山のバスに同乗して出発。

13日松本駅に4：40着。5：01発の急行「くろよん」にて白馬駅に。タクシーにて猿倉7：

00着。朝食を取り7：30出発。白馬尻小屋8：25着。白馬のテント場に12：10着。

白馬大雪溪の上りは、前夜の睡眠不足もあり、十分に休憩を取りながらゆっくりと歩く。

テント設営後（13：20）空身にて白馬岳山頂に登る。15：00に帰着。夕食後ミーティング。

18時ごろ就寝。当日の天候は晴れ。

14日 2：10起床。外は満天の星空。朝食後4：00出発。丸山の稜線にて30分間位日の出を

見る。天狗山荘に6：25着。不帰のキレットも案外スムーズに通過し、唐松岳に10：10着

く。天候も良く時間の余裕もあるので、五竜山荘テント場まで休憩を多く取り13：05着。

テント設営後全員昼寝。夕食後ミーティング19：00就寝。

本日は全員の体調もすこぶる良好。19：30ごろより夜半にかけて雨が降る。ミーティングの時にはガスがかかっており、明日の天候が危ぶまれたが、16：00の天気図では希望が持てそうだったので明朝起きてから、明日の行動を決めることとする。

15日 2：20一度起きるが濃いガスのため視界が悪く、4時ごろまで寝ることとする。4：

30起床、ガスも消えずまた風が強く吹いており、ラジオニュースで台風6号の急接近を知り、

天候の回復は望めそうにないので鹿島槍ヶ岳への縦走は無理と判断し、遠見尾根からの下山と決める。朝食後テント6：45出発。少し下ると15～20m位の強風も当らなくなったので雨具を脱ぎ少し休む（07：20）。村野、辻、北丸、森田の順で、大遠見を下った所

のザレ場に出る。登山道の中は80cm位で、中央部は窪んでいた。辻さんは歩きやすそうな平川側（左）を通ろうとして体のバランスを崩し立て直そうとしてスリップ滑落する。7：55であった。この時天気はくもりで無風、本人のザックは12kg位であった。

(6)事故発生後の行動概要 8：00応答確認してから森田は救助連絡のためテレキャビン山上駅に走る。8：50着きすぐ救助要請する。留守宅本部にも連絡10：45救助隊2名と森田、北丸出発。村野連絡等のため山上駅へ。救助隊は12：20現場到着。丁度通りかかった五竜小屋の人とあとからかけつけた隊員を加えて5名にて12：30より救出開始する。この時には腰と足が痛いという返答があった。13：00ごろ救助隊1名が本人の所に降りるが1人ではどうすることもできず落石もあり危険なため続けて2名降りる。このころには声も弱まっており、うめきだけであった。13：40引上げ開始。場所も悪く、雨も降りだし救出作業は困難になってくる。約20m引上げた14：30救助隊員が死亡確認。15：30登山道に上げる。16時下山開始。18：00テレキャビン山上駅。白馬村の遭難対策センターに19：00到着し検死後安置する。

16日 0時すぎ大阪より遺族、佐藤会長、井本事務局長が到着。朝、遺体は車で大阪に向かい、夕刻実家に帰着。同日夜、仮通夜で西宮労山会員33名、県連関係57名が参列。

17日 夜は本通夜が執り行なわれ、西宮労山会員24名、県連関係27名が参列。

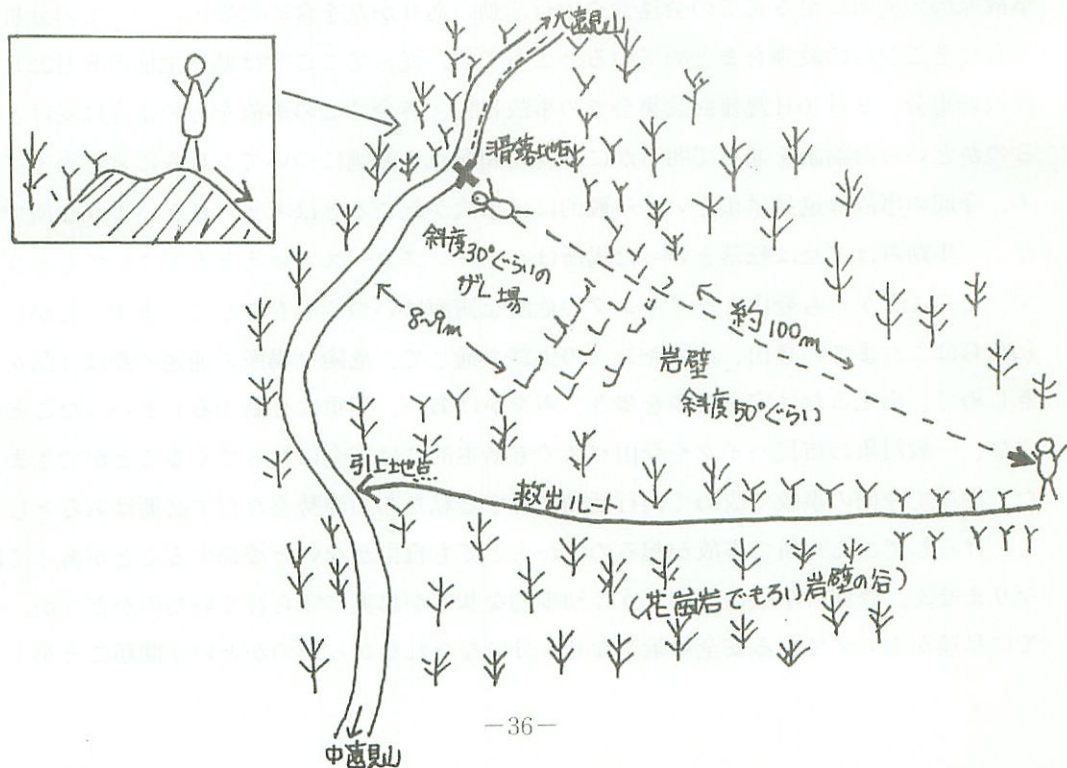
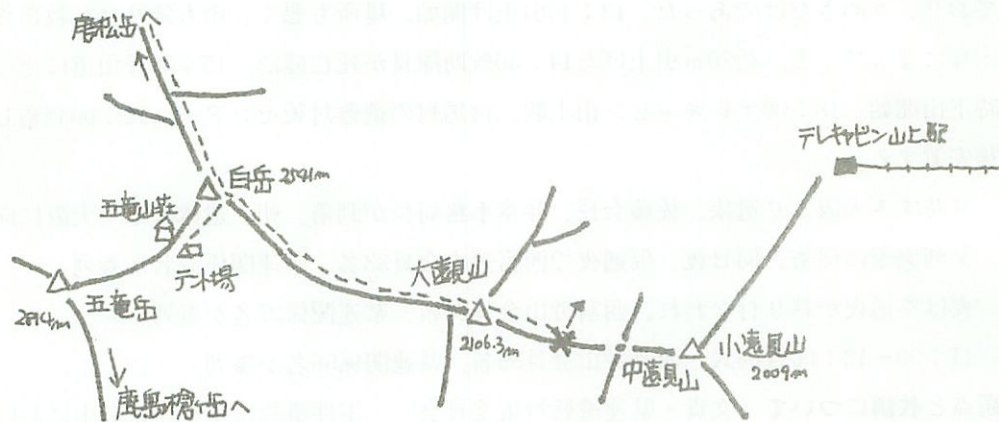
18日 11：00～12：00告別式。西宮労山会員39名、県連関係56名が参列。

(7)問題点と教訓について（文責・県連遭難対策委員会） 本件事故は現在西宮労山において、事故原因の究明に至るまでの会運営や山行活動のありかたを含めた要因についての分析、さらにそこからの教訓をまとめているところです。従ってここでは県連主催の8月22日事故報告集会、9月10日遭難討論集会での事故報告、各会でのこの事故をどのように受けとめるのかといった論議を通じて明らかにされた問題点や教訓についてふれるにとどめます。

1、今回の事故は遠見尾根という一般的には事故が起こるとは考えられないような所でした。一步踏みはずせば転落といった場所はハイキングコースといえどもどこにでもあります。このことから登山、ハイキングの危険な側面はいつでも存在しています。しかし、私たちはこれまでの登山、ハイキングの実践を通じて、危険な場所の通過の際は「気をひきしめて、出来るだけ安全な側を歩き、声をかけあい、慎重に行動する」といったことを学び、一般対象の市民ハイクや登山バスでも基本的には安全に行ってくることができました。従って今回の事故で改めて山行活動に対する私たちの姿勢をただす必要はあるとしても、けっしてこんな所で事故が起るのだからとても自信がないと委縮することがあってはなりません。今回の事故はこのような初歩的な基本が忠実に守られていたのかどうか。すでに私達がもちえている安全対策がなぜ十分になされなかったのかという問題こそ第1に

究明しなければなりません。

2、この事故を個人のミスとしてのみ受けとめるべきではありません。これまでの多くの事故の教訓から事故に至る山行の過程、山行管理、会での山行活動や会運営に事故につながる要因が存在していることを学びました。今回の事故について考えると(1)辻さんは1982年2月入会され、例会山行によく参加されていましたが、アルプス方面は初めてであり特に後立山縦走という一般的には厳しいコースとされている山行で相当緊張して参加し行動されたのにちがいない。台風で下山となり、この時点で荷物のふり分けもあり緊張感がゆるんだのであろう。ここでリーダーが最後「下山を終える」まで気をひきしめさせ、安全な側を歩くよう注意し声をかけあうといったことがされていたらと悔まれてならない。



(2)辻さんはサブリーダーの任務だが、今回の行動を通じてその任務は果していなく、パーティとしても実際にはそうさせていなかった。辻さんはこれまでの山行ではリーダーの経験がなく、西宮労山のリーダー養成、パーティの任務配置に誤まりがあるといえます。(3)このパーティは今夏8パーティで一番力のあるパーティであり、会として問題があると指摘していませんでした。しかし、辻さんといういわば新人ともいうべき人が含まれているにもかかわらずなら指導していないことは山岳会としての責任の放棄でもあります。率直に言えば辻さんは近郊でリーダー経験をつみ、アルプス縦走はもっと容易なコースから参加させるべく会として指導するべきであったと考えます。(3)このパーティで問題はなかったとリーダーが言われていましたが、このことが言わねばならないことを結果として言わないということになったのではないか。気ごろの合ったパーティこそリーダーはリーダーシップを発揮しなければならない。

3、西宮労山としてこれまでの事故の教訓（特に1983年5月のホェーブスによるテント損傷事故）が活かされていない。「八ヶ岳遭難のまとめ」が実践されていたのかどうか。

4、岩場やガレ場の歩き方をはじめ確実な歩行技術の習得、万一の滑落を止める停止技術の習得（ガレ場、雪山など）が今後改めて重視されねばならない。又、リーダーとしてメンバーのそれらを識別する力と指導力が要請されてきます。又、日常トレーニングを基本とする山行管理が会の責任において行なわれなければなりません。

5、ルート研究について、ともすれば予定コースの研究のみに終わりますが、エスケープについても怠ってはいけません。遠見尾根は一般的に安全とも見られていましたが、事故現場のように転落すれば死亡という場所もあるわけです。リーダーはこういった地点の通過には特に気をくばり適宜、指示をし対策を講じながら計画を進めねばなりません。

6、会運営の問題について、西宮労山は会員数が1982年6月98名から1983年8月64名と激減しています。趣意書の実現をめざす観点から、血の通った会運営、一人ひとりがその人となりをよく知りあうという柳楽さんの事故の教訓が活かされていたのだろうか。労山は山以外にやらねばならないことがあります。だがそのことを理由として結果として山行活動に責任をとらないという態度は絶対に許されません。

7、単に会員を失ったというのではなく、労山運動の働き手を失った、失われたということ認識する必要があります。辻さんは六甲山からゴミを一掃する運動をはじめ会活動にもよく参加されたと聞いています。これから山へもどんどん登り、労山の仲間としていわば第2の人生を生きようとしていた矢先だけに無念でなりません。辻さんの労山にかけていた期待に私たちは応えるために労山を大きくし、生き生きとした会運営を実現することが残された私たちの責務と考えます。

事故及び事故未遂一覧表

(1966年～1979年)

遭難対策委員会

年月日	山岳会	山域名	リーダー	事故者名	事故内容、傷病程度	原因、処置、その他
67.7.29	神戸	剣岳	木藤正昭	藤田敏宏	約80M滑、転落 前頭額擦過傷、右脚副 じん筋肉断烈	チンネ、ジャンダルム間のクーロアールをピッ ケル、アイゼンなしで下降中スリップし、シュ ルンドにおちる
68.	宝塚	六甲山	小西両蔵	小西両蔵	約8m墜落、骨髄骨折 左手 複指骨折	仁川、三段岩をトップで登降中、カガミまで
68.8.	西宮	剣岳			ホエーブスの発火で テント一部焼失	剣沢幕営中
68.6.	芦屋	六甲山		広瀬昇	5M 墜落、左足くるぶ し骨折	妙号岩でトップ登はん中、ハーケンが抜ける
69.9.14	神戸	六甲山	玉井進吾郎	山本豊敏	約25M 墜落、確保者 の両手平、右上腕、首 の後部をザイルで火傷	百丈岩中央稜右ルートに登はん中、ザックが 重く(25KG)、カラビナ不足。確保者はTシ ャツ、手袋なし
71.5.5	神戸	剣岳	北村昌三	岩田晴美	転倒、右胸ひ骨々折	雷鳥沢を下降中。スリップした者を止めようと かけよりアイゼンを引っかけた。アイスバーン状
6.	芦屋	六甲山	鈴木隆男	長谷川三江子	7M 転落、右足くるぶ し骨折	芦屋高座谷第1～2エン堤間の岩場をトラバ ース中。降雨中でカサをさしていた

年月日	山岳会	山域名	リーダー	事故者名	事故内容、傷病程度	原因、処置、その他
71.7.1	神戸	六甲山	槍本孝	本部 肇	5m 墜落、右脚ひ骨々折	保塁岩中央稜上部西側のルートをトップで登はん中、ボルトが抜けた
8.	芦屋	剣岳	田淵常雄	北西利子	約30m 滑落。アゴ、左ひじ列傷	長次郎雪渓左マタ上部トラバース中、スリップしガラ場に突っ込み停止
72.7.	芦屋	六甲山		田淵常雄	約5m 墜落。腰つい第二骨圧迫骨折	ロックガーデンB岩をトップで登はん中、腕力を消耗し飛び降りた
101	神戸	六甲山	藤田敏宏	坪井佐知子	胸部ネンザ	神戸の中級登山学校で遭対救助訓練中。人を背負って岩垂下降中、バランスを崩し横転した
73.3.1	神戸	六甲山		大浜	3m 墜落、足首ネンザ	神戸の中級登山学校。妙号岩前の壁を登はん中
5.3	伊丹	剣岳	住田末則	川淵治之	左大タイ部刺傷	滑落停止訓練中、ピッケルで
8.6	六甲	剣岳	角谷孝生	松尾・・・ 岩崎・・・ 山田・・・	左脚ひ骨々折、左胸打撲 左手甲擦過傷、腰打撲 左上腕、左手指擦過傷	源次郎尾根S字雪渓上部で足元のブロックが崩壊、松尾は雪渓下を1.2m滑落し、下半身が埋まった
10.8	県連	前穂高岳	玉井進吾郎	柳楽峰子 (神戸)	約150m転落、全身打撲 で死亡	県連岩登り合同合宿。北尾根4・5のコル上部で沢側へ
11.22	県連	富士山		山名 勝 (みなど)	右脚ひ骨々折	県連氷雪技術講習会。滑落停止訓練中、バケツのネットにアイゼンをひっかけた
74.1.15	六甲	比良山	根津富太郎	名原トシ子 大木本育子	雪崩で腰まで埋没、負傷 なし	正面谷の青ガレ手前、幅7m、厚70cm、長さ20mの雪崩
2.11	神戸	伊吹山		玉井進吾郎	転倒、左脚ひ骨々折	第一回神戸地区中級登山学校。道路のマンホール

発生日	山名	山域	リーダー名	事故者名	事故内容、傷病程度	原因、処置、その他
67.12.9	奥連	六甲山		三宅嘉孝	顔面火傷	ホエーズ爆発 保聖岩 (宝塚山) 県登山学校
72.9.10	宝塚	六甲山		橋上昭男	約12m墜落, ティン部打撲 踵保者は両手平火傷	新岩奥壁をトップ登攀中 ハーチンガさざれておちた。 踵保者は手袋なし
73.12.	宝塚	前穂高岳	倉内司郎		橋上・坂西 迫田の手の指, 指と凍傷, 坂西は捻挫	北尾根にて 尻セートの失敗
74.5.3	西神戸	竜王岳	山田恒男	山本豊教	転倒, 右足首骨折, 脱臼 内側じん帯切断	竜王岳、鬼岳のゴルヘ下降中、尻セートを止めようとしてアヒンを雪面に引っかけた
5.18	摩耶	氷ノ山		小林信博 (会外)	左大腿骨骨折	氷ノ山氷山の自然を守る会へ参加する登山バスの休憩時、飲酒し酔倒していた小林君が会員と口論し転倒した。(柏原モーター前)
7.15	甲山	槍沢	坪田充弘	星合淳一	約100m墜落, 擦過傷	槍沢雪渓を下山中。ガラク場に乗り上げて停止
7.21	芦屋	武庫川	田淵劍生	柴上博	水死 (急性心不全)	武庫川上流で渡渉訓練中
9.14	有志	屏風岩	倉内司郎	杉本晃一 (西宮)	墜落, 安全ベルト部分の打撲、擦過傷, 左手の打撲	東壁雲梯ルート、崩岩上のボサテラスからトップ登攀中、腕力を消耗しておちた
9.15	西神戸・鄭	氷ノ山	片岡義美	安達安信	約30m墜落, 腰の打撲	八木川左岸を2をトップ登攀中、足を滑らせた。水死後。
9.16	西宮	大杉谷	安田敬喜	安田敬喜	約3m墜落, 頸部左側10針裂傷	七釜付近の登山道でバックが岩に当りふらふら
9.29	西神戸	大甲山	山神みよ子	山神みよ子	手の甲4針裂傷	月見キャンプの酒ビンを履ふ時転んで切る。域越
11.10	芦屋	六甲山	塩坂浦三	竹中正樹	墜落, 右手首尺骨、橈骨骨折	宙づりの脱法訓練中、シミュレーションのテグズ結が目をぼけた テグズ結
11.10	伊丹	六甲山	住田末則	西島喜好	2~3m墜落, 右脚肉挫捻挫、血腫	ロックアップ A保で足を滑らせた。

発生日	山名	山域	リダー名	事故者名	事故内容、傷病程度	原因、処置、その他
74.11.25	県連	御岳	倉内司郎	高尾清 (西宮)	100m 滑落、胸部打撲、右手人差指裂傷	オチノ氷雪杖術講習会、玉滝頂上犬ノジギ側斜面でゲリセーに訓練中。
12.15	県連	六甲山	倉内司郎	坪田充弘 (甲山)	7m 墜落、脳出血、打撲	オチノ氷雪杖術講習会、ロックガーデン(黒岩をトップで登攀中、バランスを崩した。
12.31	W.U.六甲	八ヶ岳	西村昭二郎	榎原恭博	転倒、右足首捻挫	滑攀停止訓練中。アイゼンを引、かけた
75.3.16	尼崎	六甲山	山本圭子	沼田悦子	左肩を打撲	西山谷戸で他のパーティの落石を肩にうけた
7.13	県連	六甲山	玉井進郎	岩倉英志衛 (春風)	足首捻挫	菊水ルンゼ進行中、足をくねる。オチノ氷雪杖術学校
7.25	武庫	檜ヶ岳	谷岡正雄	岸本喜則	約9m 墜落、頸椎オチノ脱臼、圧迫骨折	北鎌尾根を登り頂上直下のクムニで浮石を踏んだ。入院1年8ヶ月。
8.2	県連	六甲山	玉井進吾郎	金増和男 (西神戸)	足首捻挫	市ヶ谷尾根登山中、倒木を乗り越し飛び降りてしまった。県連オチノ氷雪杖術学校
8.3	県連	六甲山	玉井進吾郎	玉井進吾郎 (庫耶)	約8m 墜落、腰椎オチノ脱臼骨折	オチノ氷雪杖術学校。保聖岩中央稜ピストンルート。左ハニグをトップ登攀中、腕力を消耗して
8.12	甲丹	笠ヶ岳	西嶋喜子	往田末則	約4m 墜落し滝ツボに落ち死体呼吸停止、外傷なし	アソケルンにて池を登って居時、バランスを失いスリップ。金平川に落ち出谷前がけ当落。人工呼吸で回復(約3分)
9.15	県連	奥秩父	倉内司郎	岡村康信 (六甲)	2~3m 墜落、右脚左腕部骨折	兵庫県連技術交歓会パーティ。西股沢朝日岳。右岩壁オチノ氷雪杖術学校ピストンルンで登攀中腕力を消耗して
76.1.	甲丹	阿部高岳			忘れ物	ゆかん、ロングスリーブ、ヘルメット等
1.	武庫	北岳	山本慎吾	山本慎吾	30~50m 墜落。歯2本折。右椎打撲	ピストンルート登山の準備を見せられて停止できず。

継年用	山名	山 域	リーダー名	事故者名	事故内容・傷病程度	原因、処置、その他
76.1.	甲 山	奥穂高岳	安留絃一		ホリタニクのガンソリに濡れ.	
1.	W.V六甲	御 岳	三宅静夫		6m滑落、負傷なし	雪上技術訓練中、アイゼンなしで
1.	西宮北口	西穂高岳	村西豊克		ホエーブスの故障	パッキン部からの濡れ、(新品)
3.19	県 連	奥穂高岳	安留絃一	安田 毅喜 (西宮)	…凍死 安留・平野・西島は両足約1/2切断 岩佐は手足の指一部切断、中村は軽傷、負傷なし。	オ3回リーダー学校、修ア山行。 ロボの耳通過中、転落等のアクシデントが重なり、ビバーク中。
5.	武 庫	大日岳	井上義行		2名が雪盲	まだガンソリをホリタニクで使用。保険2名加入せず。
5.	西 官	立 山	三山志知		ホエーブス故障	逆止弁故障、修理后使用
5.	北 神	鹿島槍岳	田淵創生		ゴレコ故障	ゴレマンコンロ パッキン油切れ。 ホエーブス バレブ鉛パッキンガンソリに濡れ。修理后使用。
5.	摩 耶	大 山	本部 肇		ホエーブス故障	タンクノズル連結部よりガンソリに濡れ、(新品、点検なし)
5.	W.V六甲	常念岳	岩本若三		ホエーブス故障	ノズル部より火を噴く(新品)、ヒール アイゼンを接続せず 登頂断念
7.	みなと	蝶ヶ岳	露口文子		貧 血	
7.	摩 耶	剣 岳	宮前多津	宮前多津	40m滑落。前額部1cm, 右脇腹10cm裂傷	長次郎雪溪 岩付近にてスリップ。
7.	甲 山	大峰山	山崎勝治	瀧上勝之	てんかん	30分程で回復。 神童寺谷にて
7.	神 戸	大雪山	余頃達久		ホエーブスの故障	
7.	神 戸	雲ノ平	嶺本正文		ホエーブスの故障	パッキン ガソリに濡れ。
7.	摩 耶	穂高岳	片岡義美		ルートと間違え	
7.	摩 耶	立 山	延本啓二		ラジオ紛失	立山〜 野ヶ岳 継走中。

発生日	山名	山域	リーダー名	事故者名	事故内容、傷者程度	原因、処置、その他
7.7.	摩耶	南阿久	尾崎市郎		ホエーブス故障	バルブから火を噴く。使用不能
7.	豊水	榎海新道	横山真帆子		ホエーブス故障	
8.	泉連	剣岳	倉内司郎	田沢常雄 (東灘)	川で20m流され、足、手、腰の打撲	三ッ窓合宿の下山中、自暴りで、発作的に安全措置なく増水の中川に飛び込む。安静2時間
8.	尾崎	白馬岳	今西啓雄		雨具不備	
8.	西宮	槍ヶ岳	佐藤伸二郎		ホエーブス故障	
8.	東灘	京都北山	田沢常雄	出田幸男	5m転落	高まき中、スリッパ
8.	東灘	槍ヶ岳	山崎文夫		忘れ物	徳沢でゼルトのワイを忘れる
8.	みどり	大山	柿本敏幸		ホエーブス故障	安全弁より火を噴く
8.	西神戸	北岳	坂東弘美		ホエーブス故障	パッキン不良、使用可
8.	飛越り	後立山	石谷 要		ゴロの燃料入川間違ひ	石油ゴロにガソリンを入れた
8.	伊丹	蝶ヶ岳			ホエーブス故障	小屋の内で、半夜後、パッキンを削り、引出し火柱が出た 外へ取り出す
8.	神戸	南阿久	黒村敏行		ホエーブス故障	甲斐駒～北岳、縦走中
9.	伊丹	尾瀬	藤田力	谷世敏枝	転倒、手首骨折	登山バス、帰ってからの判明
77.1.2	甲山	槍ヶ岳	中村邦興	前田雅人	アゼン(7=12本丸)の登山杖破損	白土沢から穂高平へ向途中、登山杖の不具合部分

年月日	山岳会名	山域名	リーダー	事故者名	事故内容、傷病程度	原因、処置、その他
77.1.2	甲山労山	槍ヶ岳	中村邦興	野田 栄二	大倉岳西尾根下降中、転倒し 肩を打撲	コブを越え、ふまたまりに足をとられる。
1.2	摩耶山友会	"	荘司徹男		9人全員凍傷、臼井、池田は足指切断	大倉岳西尾根を登り、セーフリングアットリングをおこし、中倉付近で ピストン、凍傷についての無知、自力下山、2名が入院
1.3	神戸労山	八ヶ岳	竜岩優次	井上徳治	地蔵尾根下降中15mスリッパ	
1.15	W.V.六甲	氷ノ山	岩佐正敏	西川、林	足に火傷2度	コブをしかべれ、沸騰した湯を浴びる
2.26	垂水労山	比良山	森川正章		スリッパ	
3.21	摩耶山友会	白馬乗鞍岳		足立 年男	7m滑落、右膝面擦傷 左スキー折損	角小屋峠付近でスキー滑降中、急斜面で転倒し滑落する。
5.4	かじか	剣山	野津秋雄		コースまちがい、装備不備。	
5.5	尾崎山	鹿島槍ヶ岳	高多 弘	上田 孝男	死亡	赤岩尾根下山中、スリッパを西保ハツク沢へ転落
5.	春風労山	加越国境	岩倉与志衛		コースまちがい	
5.4	甲山労山	剣岳	野田栄二		木ヒズメ ⁷²⁵ 、ガソリン注入口からモロ 少く火を噴き、使用中止	新品は20分 使用交換を行なう。
5.	摩耶山友会	槍ヶ岳	荘司徹男	今出 町子	奥丸山から槍平へ下山中、雪面を 120m滑落	気のゆるみ、技術不足
5.	みなと	槍ヶ岳(新)	神原俊一		滑落停止訓練中、ヒズメに打撲傷	

年月日	山岳会	山域名	リーダー	事故者名	事故内容、傷病程度	原因、処置、その他
5.	W.V.六甲	鹿島槍ヶ岳	岩佐正敏	岩佐正敏	雪盲	ゴグルをかけていなかった。信濃大町で眼科へ
5.	神戸労山	"	菴岩優次		ホエアス#625.左のカクシンモホ	5年くらい使用、腐食穴がみく
5.	かたせり	穂高岳	河島美紀子	羽尻加代子	足首火傷2度、マツ箱大	
5.22	ナグテビ隊	氷ノ山		加納基嗣	1本足F2登山中3m転落 右膝関節骨折	わらじの結び方が悪い(2ヶ月入院)
8.21	かたせり	六甲山 ロックガーデン	石谷 要	羽尻加代子	転倒、右膝関節脱臼、右肘関節脱臼 右膝関節脱臼、打撲	中央横より地獄谷へ降りる時、水道管をまたぎ、ガックの重さで足は バランスをなくした。
9.	ナグテビ隊	ナグテビ	倉内司郎	村西豊克	右 前額部2cmガキ状に裂傷	ナグテビの北西壁よりカクシンで落石をうける (C1~C2間)
10.	神戸労山	六甲山		桐原 忠	百丈岩、下部岩壁 登山(トッポ)中 4m墜落	足をふみおとしたため、トレーニング不足、基礎技術修得の不足
11.27	みなと	"	山尾繁美	高見正幸	保皇岩、東麓トッポを登山中 転落11m	トレーニングが正月山行の目的に合致していない
12.25	甲山労山	"	中村邦興	中村邦興	ロックガーデン地獄谷中村トッポを トッポを登山中6m転落	トレーニング山行が正月山行の目的に合致していない (20kgを担いで登山)
78.1.2	本山山岳会	槍ヶ岳	荘司徹男	萩原 育	槍の穂先を懸垂下降中、転倒	懸垂用グリップを単独行者がつかみふれる。自力下山。下山10日後 診断の結果、肋骨骨折(全治3ヶ月)通院
4.29	垂木労山	木山坂谷林道	森川正幸		ホエアス#625.1スリより全カクシンが出 たものに火付、火を喰く	ホエアスをテント外に放り出す。

年月日	山岳会	山域名	リーダー	事故者名	事故内容、傷病程度	原因、処置、その他
78.5.5	六甲登山	権島槍ヶ岳	西岡直幸	吉川	滑落、負傷なし	西沢上部下山中、スリップ、赤にいた着が止まらなと止むが止まらな
"	"	"	"	西岡直幸	ブドウ雪崩の破片が右耳部にあた るも、負傷なし	西沢上部下山中、巾30m、長さ200mのブドウ雪崩が発生
"	垂水登山	"	高岡悦夫		ホーフ [※] 25の燃料注入口より引火し 火を噴く、6人用テント出入口を焼く	太倉沢BCにて、赤夜、カマリン注入時、注入口の締め方が不 完全でカマリンがもれ、引火
7.9	甲山登山	六甲山 蓬来峡	淵上勝之	大久保敏雄	セカイを確保していたツルが、セカイ が2~3m壁を越え、折れ、折れは火傷	小瀬風岩、折れ、折れで争点を着用せず確保していた。 技術的に問題。
9	かたむね	剣岳	木阪正勝	藤井正文 坂井4次子 会費外	下降中転落(別山尾根) 藤井 - 腰椎圧迫骨折 坂井 - 口腔内裂傷 会費外 - 捻挫	つまづいて転落 (登山ハズ中)
12.31	垂水登山	ハケ岳	藤原昇司	溝口仁己	大天狗岩直下岩稜帯を3m滑落 ザイン確保で停止、軽打撲	本山下降中、基部をトクニズク、大天狗をまく、 総合的技術の不足
79.1.2	須藤登山	仙丈岳	吉本満	林克孝	新雪がくずれ滑落、クサツした 雪面を約40m滑落し、自然停止 負傷なし。(仙丈小屋上部)	スリップ 雪土訓練に入る赤に立っていて、
3.	"	酒造面鏡根	岩佐正敏	立山道行	白出沢側へ約80m滑落し、本人が 制動して停止、負傷なし。	下山中、軟雪にて足踏を崩したため
1.	奥連合同	屏風岩東壁	倉内司郎	赤田正	雲霧下、崩落する赤のセクをアセン が両方完成	アセンセーリングがワザヤーになっているから、

年月日	山岳会	山域名	リーダー	事故者名	事故内容、傷病程度	原因、処置、その他
79 2.3	東灘登山	六甲山		田淵常雄	4m 墜落、左足首捻挫	妙岩中の壁をヒトツツアで登る中、アヒコのツツアが岩から外れた
2.13	有志	屏風岩東壁	本部 肇	〃	左手小指第一指骨折	雲稜ヒトツツアを登る中、埋込木ハ用糸 ^{ロープ} 中、ハンマーで打った
5.3	芦屋登山	明神岳北峰	加納基嗣	谷口千秋	左大腿骨骨折、骨盤骨折	岳頂側斜面でスリップし、約300m 雪面を滑落、木を踏んで止まる、 松本、森森病院へ入院、次に玉津リハビリセンターへ転院
5.4	沙瀬川登山	鹿島槍ヶ岳	西川 渉	森本千鶴	約20m 滑落、負傷なし	アヒコ、未だ尾根高千穂下方の急斜面を下山中、軟雪を足場とくして滑落、リーダーが止めに走るも、リーダーも約10m 滑落。
5.4	足崎登山	立山	横山泰士	落田 恵美子	下山3日後、病院で「尾蓋骨骨折 で1週間の安静」の診断	入山日にミヅリが池付近で片足を滑らせ、尻をついた時に折れたか はなしか。
5.4	かたつむり	中知の沢梅登山	石谷 要	伊井正一	5m 滑落、樹林と撞いて停止	倉本へ下山中、木當殿越えハシコース

[表] 原因別件数

原因	崖登り中		縦走路	その他		雪崩	道に迷う	病	凍死凍傷	徒歩失敬、突進	ホエ、大事故	その他	合計					
	小ツツア等板け	スリップ		腕力消耗 その他	つまづき									踏みはずし その他				
件数	3	11	6	3	7	7	18	6	4	3	2	4	2	2	23	8	111	
死亡者					1	1								1	1		4	
重傷(錯)		2	4		1	1	4		1				2	3			18	
軽傷	4	7	2	2	8	4	6	5	3	3	2	5	2	4	1	3	1	67
負傷なし		3	1	1		1	7	1		3	2							19

[注] この一覧表は連盟結成以来の事故及び事故未遂で連盟豊対委員会が把握してりるものです。過去発表したものを再録してります。なおこの表以外に該当事例があれば、豊対委員会まで御連絡下さい。

事故及び事故未遂一覧表

1979年7月～1980年6月
連継文探委員会

月日	山名	山域・場所	リーダー名	事故者名	事故内容	原因、処置他
1979 7.21	山名会カバ	槍ヶ岳	山川歳明	藤原利江	食中毒	差入弁当が原因か? 槍ヶ岳登山 中止し、22日雨で決り下山
7.28	芦原登山	五色嶽	土井真智子		増水した沢の急流で他の	補助がバカ等なし 男性パーティに助けをもらい帰る
7.29	阿久川川	大郎平より 葉師沢と下山中	守留敏一	中川志津子	転倒し水没だが自力 脱出	増水した沢を飛石伝いに渡渉 中あった。バレル7、7ス等の甲あり
8.13	神戸登山	前穂高岳奥又谷 B沢上部雪渓	馬川和典	森孝司 南山彦啓	20m 滑落 森氏は左首、両脚擦 過傷、南山氏は左脚 大腿部擦過傷と膝打撲	雪渓を登行中、森氏がバレル7、5m下 の南山氏をまさこみ、20m下のバレル 場で止まる。アゲン、ヒールなし クムターシューズとうんどうくつ 手当り登攀
8.5	須磨登山	塩見岳	三宅静夫	原利男	落石で右脚に擦過傷	岩塊の下りで後継者落石
8.10	三宅合宿	倉岳池谷取付	小林孝雄	近藤基夫 (又又登山)	3m スリッパし右膝擦過傷	トランクス中バグがあたり 安定を失って
8.18	甲山登山	大峰山 神壁谷	山崎勝治	小林7サエ	スリッパし左目に打撲	沢又で枯木をつかみ
10.2	須磨登山	栗鐘山のアノチ 黒部川右岸	倉内司郎 (阿久川)	岩佐正敏	崖壁落、左肘骨折	トランクス中持った木が折れた。 ホルドに使う木の確認不足注意
12.28	垂水登山	屏風岩、東壁	前田正	溝口仁己	40m 滑落、バレルで 確保して停止	T4からT3へトランクス中、バレル バレルとバレルの擦傷で下山
1980 1.1	神戸登山	小赤石岳	馬川和典	森孝司	80m 滑落し自然停止 軽い打撲	頂上直下で浮石を踏み、足場が 崩れ、ヒールを失くし、中止して下山
1.1	逆襲山	瀬沢岳 西段根	橋上昭男	武田祥江	40m 滑落、自然停止	バレル下山中、崖に固執し踏み、軽傷 吹かされで停止
1.3	山歩	南岳西段根 平一岩峰	奈木昌彦	奈木昌彦 坂本睦子	3m 調整	下降中、アゲントに雪がたまり、氷に くっつきスリッパし直前の坂本の足 をすく、坂本が3m 滑落し、山 前にいた山下が止めた
	99期RCS	六甲山、Dのバレル		青篠茂樹	2m 墜落、打撲	逆くの字横断4mにて、 リーダー無復の行動
2.3	99期RCS	六甲山、Dのバレル	栢正頼	中橋ゆき子	2m 墜落、右足甲が バレル骨折、右脚屈曲 の捻挫(全治1ヶ月)	中央復た340' 登山入降りに途中 事故後も果て下降の訓練をして 痛むを感じて中止
2.3	99期RCS	六甲山、Dのバレル	井上幸隆	山本晴代	3m 墜落、右足首 にヒビ。(全治35日)	黒ネコの右ルートに単独1バレル で登っていて
2.10	六甲登山	六甲山、不動岩	立花早知子	立花早知子	1m 墜落 膝、胸腹を打撲	大凹角に上り登攀中、岩面バレル が板けて
2.10	須磨登山	氷川山	岡村麻哉	鏑木修	3m スリッパ	
2.11	六甲登山	大峰山、ワセ谷	知名盛夫		ビバークで下山遅れる	下山が一遅れ、衣服の濡れ 下着が綿装であった
3.2	須磨登山	氷川山	狩野科文	入江吉仁	板付こぼれ	

月・日	山岳会	山域・場所	川名	事故者名	事故内容	原因、処置、等
3.22	須磨常山	洞鑿西尾根	近藤義夫		表層雪崩で1/2身埋る	森林限界テント場で設営後場所の判断が悪かった
4.27	須磨常山	横尾本谷	狩野俊	入江吉仁	3m スリッパ	軟雪に足をとられて
4.30	西宮常山	別山	元西裕	元西裕 佐藤伸二 西田茂	雪崩で30m 流2413 元西は右中指薬指 佐藤は指1本、左脚 の腰捻挫	別山で風雪に遭遇しアザレ して、別山南トカーズに雪崩 で流され、手袋流失、予備の ヒールとなる
5.2	須磨常山	北鎌尾根	原利男	岡村敏哉	2m スリッパ	P2直下にて
5.2	西宮常山	剣沢	森田実		杖の引火	BCのテント内で、2人が 不十分
5.3	須磨常山	雪倉岳	三宅静夫	竹村美子	滑落30m	スキによる
5.3	豊田 中級登山会	硫黄尾根	西江博司	吉本満	10m 転落 右手中指、薬指擦過傷	白樺台地内にて、11マンに 足をとられて
5.3	西神山会	西穂 独標	長野慎一	中西誠	アイゼンの折損	北鎌から縦走中、カウ場にて 「クソ」のアシスト部分が折れた
5.3	芦屋常山	剣沢	蛸子未雄	蛸子未雄	雪盲	
5.3	西宮常山	剣沢	小瀬勲	小瀬勲	雪盲	ゴキウを忘れた
5.4	神戸登山会	奥穂高岳 修行 カブ	辰巳洋行		雪崩	休憩中、逃げたが、バック等を 流失
5.4	芦屋常山	剣岳、池谷	加納基嗣	加納基嗣	アイゼンの折損	ゴキウで下降中、雪上にて 「クソ」のシグナルが折れた。
5.4	須磨常山	北鎌尾根	原利男	吉谷隆男	雪盲	サングラスを、もてなかった
5.2	東灘常山	奥穂高岳	田村常雄	中原慶男	7.8m スリッパ	自出コ上り部鉄梯子の上で トレスの1軒雪上、ヒール制動 で停止
5.4	東灘常山	奥穂高岳	木村章長	山下義行	落石さうけ	自出コ上り部鉄梯子の上 こぼした石がヘルムに当たる
5.4	芦屋常山	剣岳、平蔵コ	蛸子未雄	渡辺ヒロ子	2m スリッパ	浅原が止めた。
5.4	山会が6分	奥穂高岳	菅根全規	山川歳明	雪盲	行動中、ゴーグル使用せず
5.4	神戸登山会	穂高、洞沢	辰巳洋行	坂俊明 杉原晋人	雪盲 ---	ゴーグル使用せず
5.5	甲斐常山	剣沢	赤鹿克明	砂川孝範	雪盲	ゴーグルをはずしていた
5.18	須磨常山	雪彦山	近藤義夫	近藤義夫	1.5m 墜落	アイゼンをアブミで登攀中、 ポイントが折れて
5.18	---	---	---	中尾康彦	5m 墜落	北麓岳正面ダレ外ルート 1P目にて
6.29	淡路常山	六甲山、地獄谷	新野己	遠山三津子	8m 転落 左脚膝裂傷、打撲 10日入院	F8左岸登攀中、スリッパに滑つ ぽへ、リターンで凍結し滑り 救急隊が救助

事故及び事故未遂 一覧表 (1980年7月~1981年6月) 遊難対策委員会

発生日	山岳会名	山城・山石	小字名	事故者	事故内容	原因・処置
1980	甲山登山	六甲・不動岩 東壁	河野誠一	由良善次	7m 墜落	トツで登攀中、ホシガ板 けり、この後鏡登
8.24	尾崎登山	比良山 口・深谷300m	仲安根角	横山森士	1.5m 転落	3段(0m)境上り脚起りに失敗、 脚部打撲
9.21	摩耶山会	雪彦山	河野隆一	(山内) 牧野	転倒し左足首の骨折 と脱臼	前腕ハキテ、砂利道で下山中 64日入院。(68日)
	春風山会	六甲山、R.G 491m リッジ	足羽直	河江勝	5m 墜落 背骨打撲、割傷	トツで登攀中下降中スリッパ 破損が手袋着用スリッパを踏可
10.10	摩耶山会	六甲山 修治ヶ原		西学榮子	転落し脚部打撲	トツハキテ、この日の午後6時 に入院、皮ヲ移植
11.24	果連	六甲山、不動岩 正面川河内山	岩佐正敏	足立寿子	5m 墜落	トツで登攀中11ヶ所折損、 前腕部脱臼、右膝皿上腕部打撲
12.29	みほと	六甲山、聖岳 西沢渡	高見正幸	矢田久美	5m スリッパ	
12.31	春風山会	六甲山、R.G 50m下	足羽直	植原恭子	10m スリッパ	トツにトツがトツで停止
1981	武庫登山					
3.8	果連 利期 RCS	六甲山 R.G	河野誠一	酒井敏美	足をねじる	トツハキテ脚部打撲 足首捻挫
3.8	東灘登山	六甲山 東甲	長井友若	小林育樹	転倒し肋骨骨折 (肋骨)	転倒時足は足を踏 (木履) 14日入院
3.22	みほと	氷山 小代越	久末高次	山本美子	5m スリッパ	初級登山教室 左足首ヒビ
3.28	神平登山	日名倉山山麓	余岡洋子	杉田由世	懸崖で右足甲を 火傷	トツ内、トツが倒れトツハ の懸崖がわたり、入院
4.26	山歩流	六甲山 住吉道	坂西美和子	北山由美	石の上にて足に 滑り	右足親指 軟骨骨折
4.26	遊難劇	雪彦山	中川幸雄	木村一正	つかれた木が折れ	右肩脱臼 15日
5.3	尾川HC	北ア 徳林峠	平井武	松皮 実	20m スリッパ	明神の下の下り尾セオに失敗 転倒スリッパ、自覚停止
5.3	六甲登山	鹿島槍岳 鎌尾沢	立花真知子	竹内真博	5m スリッパ	下山中、 自覚した時に倒れ停止
5.2	笠原登山	果徳峠 新沢	浅原悟	蛸子泰子	3m スリッパ	下山中、トツ踏 自覚停止
5.4	山歩流	大峰山上部	中原俊作	立木喜美子	転倒	ア代ハキテにア代ハキ ズカケ
"	"	七喰岳	"	中原俊作	ア代ハキ折損	転倒のFで、
"	河内登山	駒形前 取立山	松田貞二	小橋芳彦	5m スリッパ	谷峠への下り 氷に滑り倒れ
6.6	明照山会	浅向山	石野	岡田重治	転倒	石につかり、 左足の横を懸架、3針縫

事故及び事故未遂並びに事故につながらる要因 一覧表 (1981年6月～1982年5月) 遭難対策委員会

年月日	山岳会	発生場所	山名	リーダー(年令)	事故者(年令)	事故内容、傷病程度	発生原因、事後処理、教訓
1981 6.6 (土)	西宮登山 芦屋登山	赤良山系、こうべり谷		蛭子求雄(33才) (芦屋登山)	佐藤伸二郎(24) (西宮登山)	右岸ハングルートをトップで登攀中、 7m 墜落、セカンドの確保で停止。	夏山(北岳バートルス)のトレーニング。この日3本目のトレイル。腕力の消耗で、トレーニングの強化と岩登中のトレーニングビレーを適度にとこまごこし。目的と岩山のトレーニングとでこまごまかすのか。
6.7 (日)	西宮登山	六甲山、草屋口、 ガーデン、地の獄谷		元西 裕(27)	元西 英治(27)	地獄谷を降りた右側のハングで ハーケンがぬけ3m程墜落	清掃終了後、夏山(屏風岩)のトレーニングで人工登攀の訓練中、自分が打たハーケンがぬけた。けがなし、 ハーケンチェンジのおこたひ
7.18	神戸中央山	比良山系 口、深谷		高橋誠二(26)	中島文雄(24)	沢を下降中、ザイルをミスして通過後、息垂下降のザイルの末端処理をしないまま下降しおとし、ハーケンが中止させた。	リーダーの指示の不徹底、息垂下降の安全確保について指導教育が有ること。
7.19	甲山登山	比良山系 口、深谷		前田雅人(28)	村松均郎(53)	4mのスタプル状の沢を乗り越す時、 墜落、右足を岩にひかす、右足首の骨折。	水丸があり、歩がずばった。体重が重い。足首を固定し、 背負ったり、ザイル確保で沢を下降。入院2ヶ月、自宅療養4ヶ月。沢登りをする者は早稲岩登教室を修了すること。
7.23 ~26	神戸中央山	北沢72 雲ノ平		鈴木修(21)	鈴木修(21)	スキーで雪道をわたり、濡らし てしまう。	遭難会で今年まで我々が多いた指摘していたが、自分も 多くは判断した。装備チェンジ、遭難会の申し合せ は守るべくのこと。
7.24 ~25	須磨登山	白山		瀬山 悟		スキー。	残雪が多く履物の注意を心がけ、運動心づいで最初が 者だった。登山パス。装備の再チェック
7.25	一一一	剣岳		青龍茂樹	横山京子	池平小屋から小屋雪梁の水平道 入口付近で、2m雪面を滑落、 右肘が擦過傷。	先頭を歩いており、隔った足もとの雪が積れた。 自然停止、リーダーの適切なルート判断を

年月日	山岳会	発生場所 山名	リーダー(年令)	事故者(年令)	事故内容、傷病程度	発生原因、事後処理、教訓
1981 7.25	須磨登山	剣岳	斎藤茂樹	三宅永子	池ノ平山から小窓雪架への水平道の出口付近のガレ場で2m滑落 けがなし。	道がくずれていた。リターンが停止するよう指示したのに不意に行動した。リーダーの指示を守ること。ガレ場での歩行に注意すること。
7.25	西宮登山	剣岳	佐藤伸二郎 (39)	野入幸子(48)	池ノ平山から池ノ平小屋への下りの雪架で10mスリップ。	例年ならお花畑だが残雪多し、アイゼンピッケルを携行していたが、疲労が原因、自然停止。残雪が多いため連絡会で指道し、アイゼンピッケルを携行させたが、このコースは一般募集として入るべきでない。
7.27	但馬登山	北アノズ。白馬金巻岳 から猿倉への下山路	楠木 (会員外)	手首の擦傷	下りでスリップ。 手首の擦傷	下りで疲れていた。消毒し包帯をする。 脚力のトレーニング、 (登山バス)
7.30	尾崎登山	丹沢	横山 泰(32)	魚野正信(31)	ルートを見失い、沢のツメで 頭の傍ほどの浮石を落とす。(ガレ)	ルート判断のミス ガレ場は慎重な行動。
8.	西宮登山	北アノズ 樫沢岳	森田 貞	森田 貞	休憩後、一歩を30cm下のところに 降りた際、体重が外側に加わり すね足首が折れた様な状態に 右 首捻挫	気のゆるみ。湿布を張り、2日目には下山、通院で 全治2ヶ月。 慎重な行動を
8.10	神戸登山	北アノズ 黒部川上ノ瀬下 下の黒ビンガ付止	南山房啓(25)	橋本厚司(23)	右岸へつり中転落、水中の岩に 足がはまり、5分後自力脱出、 左脚大腿部擦傷	沢登りをする者は県連の岩登り教室を受け取ることで、 メンバーの力量、入山の資格がまたないのかもしれないが、 会としてのチェック体制を。
8.14	山歩楽山会	北アノズ 立山、真砂沢	栗林 潔(25)		ルートまちがい。	内蔵助平から真砂沢へ行くところを立山へ入り、ピバー7。 翌日引き返す。初歩的ミス、地図、ルートをよく読むこと。
8.13	-	北アノズ 槍ヶ岳、北鎌尾根	山下政美		ルートまちがい	北鎌尾根からコルへぬける途中、P7の尾根に入り、日没 ピバー7。翌朝のほりつめP7へ。地図、ルートをよく読むこと。
8.14	県連	剣岳、剣尾根R8 (三窓合同合宿)	西江博司	村上善則	先行110mの落石で左半身擦傷 のヒビ。	落石の多いところを慎重に登った。ルンゼで先行110mの いる時は原則として入らない。落石に対する注意が必要
8.14	六甲登山	剣岳	根津富太郎(31)		ルートのまちがい。	馬場島から入山し、小窓尾根の取付を通過し、小窓に 出る。小窓尾根を乗り越えて池ノ平、三窓へ入る予定だったが、 不注意、地図、コースの把握をすること。

年月日	山岳会	発生場所	山名	リーダー(年令)	事故者(年令)	事故内容、傷病程度	発生原因、事後処理、教訓
1981/8.9	伊豆登山	北アリアス 黒瀬五郎岳		田中博文		ガスコンロの不備。 老舊の不徹底	計色番がパーティーを全休にゆだねたでない。 このパーティーには反省会のやむを得ずと指示した。
8.15	—	北アリアス 榊新道		私田 順二		ルートをまちが	二本松峠で道標のいぼづらにより判断を誤る。 事前の研究、ルート判断
8.15	伊豆登山	北アリアス 木桶新道		平柳田 幸義		ゴツゴツを忘れた。	装備は出発時に確認しておくこと。装備チェックを
8.20	宝塚山の会	氷山、温泉町		佐藤良一(31)	佐藤良一(31)	アーマーを壊したゴツゴツを足の上へ乗し 膝が下をヤケドした。	ゴツゴツの把子ボンドが固まっているのを、食前前にパーティーが準備 と受けたが、忘れており、ゴツゴツの部分を落とす。 2日後病院にて治療、3週間で完治。注意喚起。
8.23	神戸H.C	六甲山系、鎌倉山		大学 肇	本島美佐子	右肩脱臼	小2の岩場を登る際、後の人を尻を押し上げため。 救急車で三田の外科病院へ
8.24	須磨登山	北アリアス 笠ヶ岳、笠新道		竹村 美子	伊田 ひろみ	登りで転倒、ケガなし	体力不足、荷物が増える。 生理中、リーダーは健康チェックを。
8.15	尾崎登山	大峰山		森宗時(32)	清く隆夫(24)	コンロの取扱不備により火点く。	点火ミス、テント外で操作、ケガなし コンロの正しい操作と整備を
8.29	須磨登山	南アリアス 甲斐駒ヶ岳 黄瀬谷石俣		古谷隆男(26)	長谷川義則(27)	ザイルを使用せよに登攀中に バランスを少し崩す。	メンバーの力量を合わせ積極的にザイルを使用しな かた。(安全の配慮)。入山に際し、この本力技術者が
8.30	—	鋸岳 船橋沢		吉谷隆男	吉本 祐(32)	ケガした足を下降中、後のメンバーの 崩したザイルを足首に当てる。擦傷 スリップし転倒、つま指で骨折	1列になって下降しては、休憩後下山す。 コールをかけて注意する。
8.25	甲斐登山	南アリアス 左河原、キタ山沢		村上隆一	納富達夫		このパーティーは台風がきてほろのとき知らず入山しコース変更、 百回洞より左河原へ途中渡渉、高巻き後コースに改 えがゆきんだ。台風が上陸するのが確認視され、時は山行 を中止すること。
9.15	神前山	比良山系 口深谷 F2		水野隆幸(29)	橋口幸男(32)	F2右岸スラッグ進行中、3人調整 右肩脱臼	本人は「なんでもいよいよ」で、帰って病院で 脱臼と判断、沢登りをする者は果敢の岩登教室を修了 すること。
9.13	みどり登山	比良山系 三鼻谷		曾官 尊(35)	向田幸治(27)	沢下降中、足を滑らせるの遺言 転落、ケガなし。右肩打撲	その子も続行。痛みが残り、通院、沢登りに必要は技術、 がなかったのか、特に下降は慎重な工程を要求した。

年月日	山岳会	発生場所 山名	リーダー(年齢)	事故者(年齢)	事故内容、傷病程度	発生原因、事後処理、教訓
1981 9.27	みなの山	比良山系 三舞谷 15m滝	柳 静子 (27)	矢島 進夫 (33)	先行者の落石をうけ、左手を裂傷 骨折。左手甲4cm(8針)、親指骨折	応急処置。初心者ガイドより、4ムニで行き寄り、 落石をおく。初級沢登り教室での出来ごと。沢登り 初心者には県道岩登り教室を修了したこと。11ヶ所のルート指示ス +「沢登り教室」のあり、併制。
10.9	須磨登山	戸隠山～笹ヶ峰の南 七曲付近	火置輝子 (22)		ルート まちがい。	(登山バス)、地図を読みまちがった。ルートの研究不足 初めての所は下見を
10.10	山の会がけ	八ヶ岳 横岳 (亀甲池から登る途中)	村上善則 (27)		ルート まちがい。	既に行っている登山道をおぼえ登り、踏み跡が消え、迷う。 北横岳ヒュッテより2名救助に2204 23:55 ヒュッテ着。 コース、ルートの研究と正しいルートを通ること。(登山バス)
10.10	但馬登山	八ヶ岳 権現岳	森田信吾 (27)	中尾 義男 (42)	下山中 大腿部のスジを切る	準備運動が不足、年令に合わせた山行(医師談) 帰って病院へ、トレーニング不足
10.11	須磨登山	妙高山～燕温泉	火置輝子 (22)	山本和男 (22)	右足直捻挫	道がぬかるんでいた。登山杖を履きまき指示して11kg運動 杖で歩いた。装備チェック。
10.24 ~25	大甲登山	大甲山系 のこぎり谷、小菅原谷	根津富太郎		下山が遅れる。	地獄谷のほうが難しいと判断し、力のある100メートルと地獄 谷へ。初級を小菅原谷と決めだが、結果は全く反対だった。 ルートと100メートル判断の誤り。 沢登り初心者には県道の初級岩登り教室を修了してトレーニングを
11.3	西宮登山	比良山系 白滝谷	中井 啓二	引口 慎一	滑って転倒し打撲 (右脚)	沢を歩いていてスリッパし水中へ。ワジがなじめないため 年休で2日休む。
11.3	神戸登山	大甲山 笹ヶ峰の南 高尾谷	松島佳子 (23)	林 真子 (20)	下山中、転倒、左足くるぶし捻挫	走って下山中 滑り石に乗って、全治3週間 下山後病院へ スポーツ安全協会の保険適用、岩登り。
11.15	垂水登山	大甲山 妙号岩	阿部 慎一郎 (42)	阿部 慎一郎	岩登中、1.5m 滑落、左膝打撲	中間ビレイで停止、自己の力量を過信し、困難なルート 登ろうとした。自力で下山、通院3週間、 日常トレーニングと段階を追った岩登りルートをめざすこと
12.31	但馬登山	氷川山 千本杉	足立和久 (33)	藤井 正 (23)	中耳炎	テント内で耳が変だと本人が訴え、翌朝 柳井本都と114発信し 下山後医師にゆく。沢和久味で入山、日頃の健康管理を
12.31	尾崎登山	北沢川 杓子岳 双子尾根	仲宗根 勇 (32)	益田カミ (31)	輪かんを落とす。	輪かんを不にひっかけ、回収不能、本人の不注意だが、 11月-CC 装備携行方法の再チェック。指導

年月日	山岳会	発生場所	山名	リーダー(姓)	事故者(姓)	事故内容、傷病程度	発生原因、事後処理、教訓
1982 1.1	尾崎登山	杵子岳 才1岩峰付近	樺平上 才1岩峰付近	仲宗根 勇	益田 カ三	10m 滑落、下に仆りかたで傷止 ケガなし	ハイ靴に足をとられた。アゼンのけり込み不十分。 雪上技術の基本を習得すること。
1.	芦屋登山	北アビス 瀧沢岳西尾根	北アビス 瀧沢岳西尾根	蛭子 未雄(33)		ホエーブスの不完全燃焼	点検不足による。ホエーブスの正しい取扱いと入山前の点検
1.3	山歩楽会	北アビス 南岳西尾根	北アビス 南岳西尾根	木村 晃一(36)	立本 善美恵(35)	南岳の下降中、西尾根念流点付近 にて5mスリップ。ケガなし	雪上歩行(特に下降の際)、反復練習と 技術の習得
1.4	後橋登山	大山 新山~三鈴峰	大山 新山~三鈴峰	吉谷 隆男(26)	内田 弘三(26)	第一岩峰より7mスロープを使用して下降中 2mスリップ。ポールシグで傷止 左肩打撲	トレーニングで脚力をつけた。
1.15	一〇一	御岳山 田原BC、奥道ルート	御岳山 田原BC、奥道ルート	吉谷 隆男	西田 弘三(23)	眼球の炎症(コンタクト以外がゆれ なくあった)	大山縦走中、ユートピアへの分岐点で、ガズで視界が 狭まる。途中で引返す。ルートの確認、研究を
"	一〇一	一〇一	一〇一	中尾 康彦	益田 有明	アゼンを忘れた	風でレンズが乾き、眼球の水分が少なくなった。ゴーグル を使用していた。下山後、洗面所で取り替える。視神経 病院で手当。ゴーグルの着用(通気調整係り山行 アゼンを忘らすに忘れ、装備のチェック
1.16	尾崎登山	八ヶ岳、中岳コノの部	八ヶ岳、中岳コノの部	仲宗根 勇	小倉 康彦	テント内でホエーブスの炎が赤く上がる	予熱不足で点灯しガリンガを燃やした。ゴッポロで79℃ 消火。ホエーブスの正しい操作法をマスターすること
1.16	一〇一	八ヶ岳、赤土鉱泉	八ヶ岳、赤土鉱泉	一〇一	益田 カ三	グレイド中にアゼンをひっかけ左足首 と軽く捻挫。(行動に支障なし)	初歩的技術なし、雪上技術の基本を反復練習すること。
1.17	春風山岳会	比良山系 正面谷、青ガシ	比良山系 正面谷、青ガシ	作田 祐斗	高田 ひとみ	ゴンドラを倒し、こぼれた雪で軽い 火傷	床の凹凸が大きく、歩行時のテントスツットのずれによる。 テントの整地、テント内の移動時はコンロを固定させてから
2.14	一〇一	比良山系 正面谷、林道	比良山系 正面谷、林道	松原 修一	小沢 克美	滑落。尻打撲、骨盤たひび	急斜面にてアゼンをつけていなくて下山中、尻を打撲、 傷定後医者へ、アゼンの着用と歩行技術の習得
"	尾崎登山	比良山系 川上比良	比良山系 川上比良	幸岡 均	森 津子 田中 紀子 幸岡 均	3m 滑落 ケガなし 急斜面の雪面を5m 滑落	足場確認不足。 アゼンを使用していない分は、アゼンの着用に雪上技術 の基本を反復習得すること。県連雪上講習会の受講を

年月日	山岳会	発生場所 山名	リーダー(年令)	事故者(年令)	事故内容、傷病程度	発生原因、事後処理、教訓
1982 2.28	県連	御岳山 (雪上技術講習会)	西江博司	西嶋喜好	頂上から山中、10m 滑落。 ケガなし	フラストした斜面でスリップ。アイゼンをつけさせる。 リーダーはメンバーの技術、体力をみてアイゼン等を使用させる。
3.14	山歩登山会	六甲山系、仁川	中原俊作(29)	野村国世(29)	持病の発作。	馬尻から仁川ピークセンターへ行く途中、発病し、救急車で入院。(六甲ゴミー掃帚一行当日) 既に靴の把握を!!
3.7	摩耶山岳会	六甲山系、菊林ルンゼ	本部肇 (30)	蓮井励子 川村悦子	ルンゼ取付で蓮井がスリップし、川村が止めおとして、蓮井のアイゼンで左大腿部を打撲	春山のトレーニングで、アイゼンホックをしては、トレーニング方法の見直しを要すること。
3.21	神戸山岳会	八ヶ岳、中岳沢	柳静子(27)	新井良(61) 橋田孝弘(42) 安田寛市(32) 久保百合子(32) 穂藤美穂子(48) 尚田幸治(28) 柳静子(27) 杉本悦子(25) 田中かおる(24) 田丸敦子(24) 沢田孝史(21) 高見正幸 松本智子	阿弥陀岳の登頂をめぐっていたが09:40、雪崩で埋没、高見と松本は救出されたが、11名は死亡。 高見は左大腿骨折、入院 松本はケガなし	新雪表層雪崩、前線通過で気温上昇、湿雪が30cm積っていた。 前後の登山者によって発見、救出されたが、9名の遺体発見、22日2名を遺体で発見、収容。 ・冬山登山教室の終了山行にしては八ヶ岳が決定したのか ・山行の体制が弱かった。 ・入山前の体力診断と日常トレーニングができていない。 ・計画書未提出。・リターン以外山岳保険未加入 (教訓)本格的に冬山をやる人は県連の岩登教室と雪上技術講習会を受講し修了すること。初級の冬山であれば近交のムリのない所を認定し、雪にはお見せすること。日常トレーニングの所行、雪崩はどこで起こることを認識すること。計画書の提出と山岳保険への加入(現在総務中のため未定)
3.21	神戸山岳会	八ヶ岳 赤岳	岡村欣哉(30)	山下恵美(22)	下山中、7-8m 滑落 ケガなし、自力で停止。	足場を崩して 前線通過で湿雪かつ軟雪のため 歩行技術を要された。これらの状態でこのコースが適当であったのか、雪上技術の基本を反復練習すること。 トレーニングで脚力を「おろし登山」と紙一重であった事を認識すべきである。
		阿弥陀岳 コルから200m上	"	金筒本修(22)	下山中、5m 滑落 ケガなし、自力で停止	足場を崩して
		阿弥陀岳 頂上直下	"	山下恵美(22)	他のメンバーがスリップし、アイゼンで手甲を刺した。刺傷	足場を崩して 救急医療品で処置。

年月日	山岳会	発生場所	山名	リーダー(輪)	事故者(令)	事故内容、傷病程度	発生原因、事後処理、教訓
1982 3.21	山の会 カジガ	氷山、東尾根 小屋横にて	氷山、東尾根 小屋横にて	村上善則 (29)	村上善則 (29)	ホエースの故障	安全弁が作動し、定針のガスに引火、火を消し去り、ガソリンが噴出し炎状にかかる。その後、使用しなくなった。ホエースの整備点検、正しい操作法を、こいまで
"	菅屋登山	比良山系 武奈峠 飯殿山	篠崎 知子 (24)			雨具を忘れた。	カサ、ヤットで行動、当日は前線通過で雨、装備チェックを徹底させた。
"	須磨登山	小陣鉢山 付近	斎藤 茂樹	加藤 健二		雪斜面下降中、2m 滑落 ケガなし	腐った雪でパラフラスを前し(5反切) 氷山から扇山へ 撤退中。
3.22	但馬登山	氷山 東尾根	宮垣由紀男			合流でモロビバフ	事前の研成不足、 ガスのレベルが正確に確認
4.18	神 H.C	雪彦山 頂上	大学 肇 (49)	大学 肇		ホエースの引火	流れ尾ルートと東尾根ルートと千本杉で合流予定だが、ハムの固液数の連絡ミス、翌日下山して合流
"	山歩登山	市原山系 菅谷川。	野村国也 (29)	渡辺 幸子 (29) (会外)		滑り転倒し 左脚膝蓋骨折 入院 14日	メタで予備中、ポンプで加圧し、ポンプからガソリンが引火、木の葉で消火、ホエースの整備、点検、 事故者は足が不自由であった。谷を渡す時石に足を乗せて滑った。菅谷川は小さくても深谷であり、誰でも入る所ではない。カサのレベルが正確に確認、 確認なエースコート着用と ゴミ一掃統一行動日、チニジミ袋を、 てた。
5.9	伊甲登山	六甲山、芦屋川、高尾	明尾 正昭 (31)	中村 逸		おたけ堤と奥高尾池の間で、スリッパで背中を打撲、翌日病院で「左新肋骨折」に比べ、全治3週間	氷山の自然石を登り下山会、全体集会后、アムトポイント登り越え。中川幸雄氏の軍心ハズレ病状へ。
5.23	西宮登山	氷山山系、福定		谷友宏 (9)		駐車中のアムトポイントから足を踏まれ、 2m 落ち、顔面数傷、骨折1箇所、 コメカミ2針縫う。	前がつかっていたため、コンキ岩を通過した。(後で知る) リーダーの不注意、登山大会であり、体力的に弱い人、経験のない人によるので、アムトは必ずアムトにと。
"	六甲登山	氷山山系	根津富太郎			中止されている「コンキ岩」を通過	下山は歩行困難、足が自由で、 通院。
1981. 9/3	春風山会	比良山系 興の深谷	作田 浩洋	大橋 清美		枯木をつかみ 2m 転落し 膝3強打。	アムトの判断をして、一先にはアムトに入ら

年月日	山岳協会	発生場所	山名	リーダー(令)	事故者(令)	事故内容、傷病程度	発生原因、事後処理、教訓
1981 1.22	神中登山	北良系 ～金蔵山	伊谷 ～金蔵山	安住みち子 (女)		道をまちがえる	イン谷～金蔵山方面を登る時、道をおぼえ、無理して 進み、危険な所へ出たので心元のコースへ引き返す。 コース、ルートをよく判別すること。
1982 1.2	甲子園登山	御岳山、	沢場	清水久雄	未登 迫子	田原から下山中、スキートの着け方 が正しくなく、右足が脱臼	スキー場がアイスバーンで(傾斜15°くらい)、転んだ時、右足を つけた。雪上歩行技術と回復に習得すること。アパレルの着用
1981 10.25	尾崎HC	丹生山系		奈良谷 弘		道をまちがえ、パーサーがバウバウに 落ちた	市民パークで、サリダーが道をまちがえる。下見は、しのみ コース、ルートの研究。特に赤いハイキングは下準備を、リフト とサグズのキルセをまちがえりしてよく
1982 3.14	尾崎HC	六甲山・仁川 ピリニャンパター		奈良谷 弘	奈良谷 弘	植込み入りポリ容器をふみぬく、足 が熱く、思動心つはポリポロ 足にケガがはる	ゴミ一掃統一行動日。ドラッグエーシオに捨てられた 不法投棄物を回収中のポリ容器。 くつ下と2枚はいたいで助かる。ゴミの種類の判定と 取扱いに注意する。
1982 4.18	尾崎HC	中山、廻河岳		森本 正春	小西 運哉(男)	谷をへって川に落ちる。ケガなし	他の者は高まり道を通っていた。 リーダーの指示を徹底させること
1982 3.21	尾崎HC	鈴鹿山系 金蔵山		山本 壬子	山本 壬子	堀いで根を高くしていたところ、根が 枯木が折れて転んだがすぐ下の木で 停った。ケガなし	ブッシュは、確認してからつかえ、又一気に加重しない 下の木が折れたら深へ転落していた。
原因別事故件数							
				清転落	岩登り	3件	
					沢登り	11件	
					その他	19件	
				雪	前	1件	
				落	石	4件	
				道に迷う		9件	
				病	気	2件	
				ホエーノース	の故障	6件	
				死亡者		11名	
				重傷者		6名	
				(全治/ヶ月以上)			
				軽傷者		28名	

(注) この一覧表は、1981年6月から1982年5月の1年間の
事故及び事故未遂並びに事故につながる要因について
東連遭対委員会が把握しているものです。各会におい
てこれらの事故の教訓を学び、今後の山行活動に活か
して二度と事故を起さないうため役立てて下さい。
なお、この表以外に該当事例があれば遭対委員会ま
でご連絡下さい。

事故一覽表 (1982年6月～1983年5月)

遭難対策委員会

年月日	山岳会	発生場所 山名	リーダー(年齢)	当事者(年齢)	(専科内容) 発生原因、傷病程度	事後処理、教訓
1982 7.31	神戸登山	大峰山系 池ノ郷支流小又谷	水野隆幸(30)	遠藤 豊(43)	岩物の隙をノサイルで登攀中、3mスリッ プし、滝ツボに落ちる。 腕に擦過傷	バンドエイドと手当後、行動。 技術不足、力量あるメンバーの参加
8.7	甲山登山	折立峠から30分後 薬師岳	石原三起夫 (28)	藤原辰春 (34)	夜行列車を食べた弁当(カマボコなど) が原因の食中毒。	30分、様子を見て下山し、病院へ。翌日回復 し帰阪。弁当の内容物と調理に注意。
8.14	神戸登山会	双六岳から三保山荘 へ至る手前の下り道	弘中達夫 (30)	山田明義 (41)	よそ見をしてつぼみ前へ転倒。 左手首上部の骨折(全治3週間)	擦過傷の消毒と荷物を軽減、下山後病院 で診察。注意して慎重に歩く。
8.16	西神戸山会	太郎平小屋付近	寺内早苗(26)	阿部まゆ(32)	下山途中、足をひねってネンサ	注意して歩行
9.4	東灘登山	芦屋ロックガーデン	田淵常雄 (34)	樋口静太郎 (35)	Aケンの岩場最下段でトラバース練習中、 約30cm落ちる。落ちた所が溝状で両 足かかどに加重となり、右足くるぶし骨折 (全治3週間)	自力下山、X線の結果、骨折と判明 高齢者に対する岩登りの指導(体の柔軟性か ない。)
10.10	—	白出沢出合から新 穂高へ下る穂高牧場 近道	田淵常雄 (34)	石崎清志 (66)	うす暗くなってキャップライトなしでカラ場を 下山中、他のメンバーが落した石で右手小指 第1関節裂傷、骨折(全治1ヶ月)	応急処置後、神戸銀山病院で縫合。帰神後 骨折判明。 キャップライトの持参、正規の林道を通らせること。
11.21	神戸中央山	石鏡山 大存子谷	山下恵美(23)	同 左	スリップし、右足を軽くネンサ	気のゆるみからであるか岩場での歩行注意
11.21	磨耶山会	鏡山系 坂下峠	河野隆一	川島甲子 (33)	峠から10分登って巻道をはざしが1場 を登行中、二番手の足元が崩れ、落石を 誘発し、20cm大の石が頭部へ当たった。 前頭部裂傷(2針縫合)、手に擦過傷	ハンカチで止血し、峠へ引返し、安静に、下山後 病院へ。帽子の着用、カ1場では間髪をとり 先行者に注意。
12.5	神戸登山	東甲 大谷尋越手前 の急坂		広畑郁夫	降雨のため片手に傘をさしており転倒 左手甲の薬指、中指骨折(全治1ヶ月) (和国回車(全治3ヶ月))	自力下山後、手当 発生場所は足元の不安定なところが予見できていた ので降雨の際、スリップに注意、両手が鈍るよう に傘をさめカッパの使用。
12.31	筑前山	華鞍高原第1リフト 手場中	古本 満 (33)	油井敏美 (24)	リフトに乗った時、ザック(8kg)にぶらえて 腕でぶら下る。(地上から1mの高さ) 腕をひねり、2-3日腫痛あり	リフトを止め係員に救出された。 リフト利用時はザックの背負い方、前傾姿勢 の工夫を

年月日	山岳会	発生場所 山名	リ-ター(年齢)	事故者(年齢)	(事故内容) 発生原因, 傷病程度	事後処理, 教訓
1989 1. 1	甲山岳会	大喰岳西尾根	前田雅人	氏平直行	西尾根を下行中、ハイマツに右足が引掛り10m転落。 右足首のネンザ	セルフをおとし、自力で下山。 強風が吹く所で気のゆるみがあった。救急もあり、怪力の増強と行動中は気力の充実させる。
2. 6	東灘岳会	六甲山系・保羅岩		藤浪 晃 (44)	15時頃、車で通りがかり、単独で岩登りをするために中央移上部から下降していた時、牛にした岩を前に引いて剥離させず、力がふるわれて5m墜落した。 ホ2要推斥迫置持。全治2ヶ月	現場にいた2パーティに救助され山上から救急車で病院へ。 岩登りに対する取組み、単独での岩登りは禁止、岩登りの基礎技術の反復練習。
3. 6	みなと岳会	比良山系・武奈ヶ岳	曾宮 章 (35)	作田佳子 (26)	滑落停止中、右肩の脱臼	過去、3回脱臼し、癖になっている。 自分の弱点をカバーし、トレーニングの必要。
3.	原 連	大甲山系・芦屋ロック ガーデン	近藤義夫 (26)	同 左	県立初級岩登り教室で講習中に1mほど飛び降りた際、ネンザした。	自力で下山。小さな岩場でも飛び降りとはならない。教室の講師は特に基本通り指導し、範を示すべきである。
5.	甲子園岳会	剣岳	赤鹿克明(37)	梶原勝博(33)	黄色のゴーグルを付用し、飛度の雪盲	
5. 1	西宮岳会	剣岳・三田平のテリ内	中井啓仁 (31)	辻宗郎 (45) 内金弘明 (28)	就寝準備中、ローソク点火時にホエース625に引火。消火のため缶をかぶせようとして圧力ポンプが抜け、火炎が大きくなりテントの吹流しと尾根を火免く。 2名が顔面に火傷(1度)	剣沢小屋で治療。雪の冷湿布の効果があった。 コンロの正しい取扱い。 火傷の処置はまず冷やすこと。
5. 1	東灘岳会	剣岳・剣沢	岡田 茂(31)	同 左	胃痛と吐気。十二指腸カイトウ	下山後入院。日常の健康管理。入山前に健康体力チェック
5. 2	武庫岳会	剣岳・剣沢	井上義行	小野英俊(29) 竹下みつ(33) 辰巳一郎(25)	午前中、雪上トレーニングの際、ゴーグルをつけなかったため曇っていたので軽い雪盲	雪で冷やす。習日は行戦可 春山では曇っていてもゴーグル使用のこと。
5. 3	東灘岳会	剣岳・剣沢	中原万亀男 (27)	植木孝司 (21)	曇天のためサングラスを着用しなかったため雪盲。雪盲になっても良い覚悟をしていた。	午後、テントで停滞し冷湿布。翌日回復。 リ-ターが遅れて入山するため事故者は実質的リ-ターであるにもかかわらず、基本を無視した行動で、そのため他のメンバーはリ-ター不慮の持行動し、スリップ事故を繰り返している。 リ-ターとしての覚悟が問われる。
5. 3	東灘岳会	剣岳・剣沢	中原万亀男 (27)	入江愛子 (32)	緩斜面でスリップし、手から離れたピッケルで額部裂傷	止血処置 雪上歩行の反復練習。ピッケルを離さない。

年月日	山岳会	発生場所・山名	リーダー(年令)	事故者(年令)	(事故内容) 発生原因、傷病程度	事後処理・教訓
1983 5. 3	須磨労山	爺ヶ岳・冷尾黒上部	吉谷隆男 (27)	加藤健二 (23)	クレパスを起える際、ヒョウケルのシャフト を持ちず、バンドを張って登ろうとし、ヒョウケル が抜けアレードで前額部を裂傷、 一針縫合、右目炎症。	バンソーコーを貼り行動、下山後大町で治療、 帰神後通院、 ヒョウケルの正しい持ち方、雪上訓練の内容を実践 的にする。
5. 3	山歩溪山岳会	槍ヶ岳・東鎌尾根	中原俊作 (29)	栗林潔 (27)	サングラスを破損し、そのお歩行して雪盲	冷湿布し、翌日回復。 エスキモー・ゴグルなども作る工夫を、取扱いの注意、
5. 5	神戸中央山	横尾茶谷	近藤義夫 (26)	栗田喜行 (22)	雪上技術(滑落停止)訓練中、ツマノの油 をまわっていたため、腕に擦過傷	訓練前にリーダーから服装についても指示し、徹底 させる。
5. 5	六甲労山	不動岩・正面壁	根津富太郎 (33)	栗屋幸夫 (49)	正面クラックレートの2P目ハングをトップで 登攀中、腕力が尽きて5m墜落し、制動 確保で停止した際、左足首骨折。 (全治3ヶ月)	直ちに搬出し、病院へ運び入院。 体力不足、県連初級岩登教室を受講していないた め岩登りに対する考えや、技術の誤り(例えばラン ニングビレーをハング直下でといていなかった) ※ 昨斗山行自粛の際、退会し、自粛解除後 再入会している。
5. 5	伊丹労山	京都北山・天ヶ岳	内藤ちかこ	一般	(市民ハイフの取組み) 下山中、木と岩に足をはさまれ、転倒 前額部擦過傷	打撲部を冷やす。自力で行 市民ハイフの実行側の体制強化。メンバーの把 握と個別の注意。
5. 5	尾崎労山	磨松岳・八方尾根 丸山ケレン付近	松川良衛	松川良衛	白馬岳から縦走し、5月4日体調不 良で磨松岳直下で停滞し、5日体調 不良のまま下山するが11:00歩行不可 能となる。 高山病と急性肺炎。6日入院1回腹	届かされた医師の判断によりヘリコプターを 要請し、救出され大町市の病院へ入院。 大学山岳部OBとしての山行で、会に計画書 未提出。山岳保険未加入のため、今回多大の 出費をした。
7. 3	甲山労山	尻尾岩東壁 ・雲後山の東壁にて	河野誠一 (25)	渡田元 (25)	雨の中夜間登攀でルートを見失ない ルを内でセバーク中、落石により、 膝を打撲し、内出血により膝が曲 らなくなった。	7月3日 夜明け後、ザイルミスし、渡田をひきあげ 尻尾の頭を至て瀕死に陥 7月4日 横尾から車で上高地へ。 雨の中夜間登攀は行わずに、ルを内でのセ バークも同様。岩登り教室を受講、もとステップを踏 んで余裕をもった岩登り。 あわや大怪事ともいえる事故である

年月日	山岳会	発生場所・山名	リーダー(年令)	事故者(年令)	(事故内容) 発生原因、傷病程度	事後処理、教訓
1983 7.22	伊丹登山	西鎌尾根を双六小屋方面へ向う途中	喜多伸行	喜多伸行	残雪の端を踏み割るうとして転倒し、左ふくらはぎ、右目下の擦傷。	安易に無理な行為はうけてない。
7.24	神戸登山	比良山系・八幡谷	南山房啓	上原圭太 (27歳)	3m程の滝の左壁を登っている時、落石があり、これを避けた瞬間、スリップし滝壺に落ちた。 左膝をねんざし、3週間安静を要す	そのまま登った。事故後リーダーに詳しい報告をしていなかったが、平直に報告すべきである。
8.7	神戸中央山	槍沢下り	西川則子		滑った時に手をつき、右手の甲にヒビ(下山後病院で判明)	本人が痛みを隠し、はれびるのをメンバーにかけていた。雪渓の歩行を注意する。転倒の際→所にかかぬかきないようにする。メンバーにケガは報告すること
8.14	県庁合宿	剣岳・剣尾根R8.	岩佐正敏	松井武勇	ルートを間違えて登攀中、右足を木の上に乗せ上体を上げた際に、フェイスシールドが当たって、右足がスリップし、3m墜落した。(ランニングシューズのソールが滑りやすかった) (尚、合宿では落石で4本の指が受傷している。左足が股関節打撲、腕の擦傷)	そのまま登攀を続行した。登攀には細心の注意が必要であり、力にまかせた登り方を改め、途中で気を抜かないこと。
8.15	西神山会	弓折岳・鏡平下り	池田一人		足に合わない運動靴を使用したため、土踏まずに「靴ズレ」を起こし、不自然な歩行から転倒し、軽い捻挫。	足に合った靴を使用すること。リーダーはメンバーの体調、歩行状況をかみ、適宜指示し指導すること。
8.15	西宮登山	五巻岳遠見尾根(大遠見山と中遠見山の中間)	村野健	辻宗郎 (45)	滑落し、約100m転落し、全身打撲によって6時間後に死亡	救助隊を要請したが、その救出中絶命。
10.9	神戸登山会	蝶ヶ岳山頂	藤井宗平	山田明美	写真を撮るつもりで移動中、転倒し、左脚膝下を裂傷。	本人はあまり痛みを感じていないで元気であった。稜尾まで自力で下山、稜尾から歩いたり、背負われて徳沢へ。徳沢から車で。上高地の診療所で9針縫合。右脚が冷えて、ひきつっていた。歩行は慎重に。

(1982年5月~1983年6月)

遭難対策委員会

事故未遂 並びに 事故につながる要因・問題点についての一覧表

年月日	山岳会	発生場所 山名	リーダー(年齢)	事故者(年齢)	(事故内容) 発生原因	事後処理、教訓
1982 7. 24	夙川H.C.	白山	富井美明		長崎豪雨と低気圧の通過時の登山 女性1名(56才)が足をひきつる。	天候が回復しない予想だったか甚しうハイペースで登山の判断を下す。下山時に風雨の中、 長崎豪雨あり豪雨を心配していた。参加メンバーの力量に合わせて、今回の場合中止すべきだった。
7. 31	垂水登山	鳥嶺別荘~三俣峠	中田越子	羽根田幸哉	高山病(吐き気)	三俣山荘まですぎたなおった。 毎回なるが今回は特にひどかった。健康管理
7. 31	夙川H.C.	南アルプス・奈良田	磯木茂徳 (会外)		北岳下山後、台風10号より奈良田で孤立 2日間帰宅が遅れた。	台風の進向に注意、接近中の場合、山行中止を
8. 5	但馬登山	御岳・三ノ池	宮垣由紀夫	豊田悟郎(68)	CL・SLか昼食場所をさかすため先行し、 道に迷った。	30分後合流 リーダーの適切な指示
8. 7	西宮北登山	宝剣岳 キャンプ地	熊田正 (40)	越智広子 (22)	テント内でホエーブスの異常燃焼(点火の タイミングがずれ、ガスが大量にみ出していた)	ホエーブスの使用法の指導(新人は特に)
8. 12	ホワイヒック	南アルプス・釜沢	岡田賢一 (39)		三伏峠をめぐしたが取付点を間違え bivac	翌日、元の道へ戻ったが、日数不足で計画変更、 南アルプス帯は台風10号で荒れていたが、地味な練習
8. 12~	神戸登山	朝日権峰	水野玲子		ホエーブスの燃料を間違え灯油を入れ使用 不能。	非常用の固型燃料(1人用)使用、他のパーティーに予備 ソリンをもらう。装備の管理点検(ガス缶(灯油)を 常備)
8. 13	武庫登山	島々谷の二俣から岩 原別荘の間で	井上義行 (24)	石井ひとみ (25)	登山道の路肩をぶみぬりて転倒した。 けがなし	悪天候が続いて路肩がゆるんでいたの道の状態 をよく見て歩く
8. 14	須磨登山	雨飾山縦走	吉本満(33)	清水慎一	右肘がった。両足爪先を痛める。	パチンコで湿布。行程の問題、トレーニング
8. 14	垂水登山	剣岳・別山雪渓	高田悦夫	釣順信	雪止訓練中、リーダーのザルで一人ずつ下降 せよとの指示を無視して下降中、10mズリ、	白刃で滑落停止。 リーダーの指示には従ふこと。リーダーの配置
8. 15	神戸中登山	白馬大地から蓮華島 泉の間で	高橋誠二 (27)	神尾守保 (23)	登山ナイフの付用後、刃を出したまま引 ひきかけて歩行していた。	リーダーが注意した。
8. 15	神戸老山会	スゴ乗越キャンプ場	寺内早苗 (26)	八木文子	テント内でメカネのツルを折る	テープとマチ棒の補強 メカネの予備 テント内の行動の注意

年月日	山岳会	発生場所 山名	リーダー(年令)	事故者(年令)	(事故内容) 発生原因	事後処理、教育
1982 11. 8	須磨労山	比良山 武奈ヶ岳	火置和子 (33)	山崎一恵 (28)	ホエ-アス725を2台使用中、1台が消えていたのを、コックもめめたために生カスが出て引火した。岳にて消火する。	前にとびわた着が、コックを左に回し、火を小さくしておりノズルが当たった状態にあった。 ホエ-アスの正しい取り扱いは方を指示する。
12. 30	神戸老山会	鹿島槍ヶ岳	藤井宗平		ホエ-アス725の安全弁がしばしば作動し、火	安全弁のバッキングパンを取り換えたが効果なし。 出発時予想されたので EPIエコーを待参してホエ-アス使用。ホエ-アス725の性能低下の問題について検討を要す。
12. 31	一ツ一	八ヶ岳	辰己洋行 (39)		トランジバーとスノーシューを待参するのを怠ら	出発時の装備チェックの徹底。
1983 1. /	但馬労山	中央アス 楯北岳	森岡信吾		雪上技術講習中、アゼンシンのジョイント部の破損	スノーシューにて修理。事前の点検と修理道具の持参
1. /	東灘労山	奥穂高岳の登り (白出コル上柳)	長井友若 (30)	藤江伝三 (50)	右足のアゼンシンのジョイント部が脱れる。(アゼンシンのジョイント部がゆるんたまま歩いていた。)	水履き直した。アゼンシンの確保も残者の習得とリ-ダー及び相互のチェック。
1. /	神戸老山会	八ヶ岳 赤岳 釜屋がら赤岩の頭への登り	辰己洋行 (29)	水郷和子 (30)	アゼン(9ニ)10本爪アゼンシンのジョイント部折損	ジョイントの平癒使用。 ジョイントのスペア-持参。メ-カの養生の点及
1. 3	東灘労山	奥穂高岳の登り	長井友若 (30)	植才孝司 (21)	自分の安全ベルトにつけたシュリ-クを自分のアゼンシンの爪でぎゅぎゅと握りつけた。	シュリ-クは短く処理して装着する。 リ-ダーと相互にチェックしあう。
1. 3	神戸カワムジの会	箱ヶ岳 南峰	石佐要 (38)	金得直村 (28)	積雪量上で用意したよつと1時、片足のアゼンバンドを他のアゼンシンの爪を引掛けた。	ピッケルのピッケルを打ち込み停止。 母屋した場所の選定。
1. 5	宝塚山の会	槍ヶ岳 ヒダ沢	柏正頼		前日に当日新雪が約30cmあり、雪崩の危険があった。	降雪中、降雪直後は厚氷として足筋は通らない
2. 19	須磨労山	洞ヶ岳 北尾根 根之(50m)地点	古谷隆男 (27)	同 左	ピッケル地点でピッケルを雪斜面にて滑落させ給失。	ピッケルカバ-で寝る。 雪斜面に不用意に物を置かないこと。
3. 20	尾崎労山	御山岳 剣ヶ峰斜面	寺岡均 (33)		アゼンシンのジョイント部分が折損	針金にて修理し、使用。
3. 21	ホウトビノ	氷ノ山	矢田ス美 (32)		道迷い。 頂上から下山の際、流氷尾根へ下りかけた。	引返し、1時間のロス 地形と地形の把握、踏み跡に頼らない。
3. 21	みびの山	八ヶ岳 小本山 庄から下りの杯道	曾宮 章 (36)	高田直子 (24)	スリップ。 雪上歩行未熟で傘さしていた。	雨具をつけ、ピッケル等をもたず。 雪上歩行の反復練習とトレーニングによる脱力感化。

年月日	山岳会	発生地	山名	リーダー(年齢)	事故者(年齢)	(事故内容) 発生原因	事後処理、教訓
1983 4. 29	鹿野山会	立山	立山	足立年男 (30)		空室から雷鳥沢を登り、又へ向かう途中、カズノの道の道志がえりの崖へ。	引き返さず、その日は雄山を経て剣沢へ。動いていないか、カズノの中へは慎重に歩行を指示する。 針先、引返し予定の行動をとること。 自分か、力をかけられる方向を確認し、足を置く。
4. 30	須磨岳山	鹿島嶺(岳) 第一岩峰	東原型	吉谷隆男 (27)	長谷川義則 (28)	落石(約100m)を誘発、下に登山道がいたか途中、岩に当りおれる。	自己停止、トリエングにより、能力強化して歩行時の注意を促す。
4. 30	〃	鹿島嶺(岳) 第二岩峰	鏡岩型	吉谷隆男 (27)	長谷川義則 (28)	疲弱と雪かき、さびの約3m、滑り、アゼンは使用してなかった。	自己停止、トリエングにより、能力強化して歩行時の注意を促す。
5. 1	伸太郎山会	高嶺川・千代谷付道		藤井泉平 (30)		北鎌沢へ登る予定が、先登走の跡を、針先で確認し、引返し、自分で判断する。	地形、根柢を把握し、自分で判断する。
5. 2	武庫坊山	剣岳・剣沢		井上義行 (35)		アゼンの損壊(事件) 、シャルドレ・モアランのゴット部折指(4年使用)、サレワのバンド・リンクが破損(新品)	針先で応急処置して使用 事前の点検とメカへの注意を促す
5. 4	西宮坊山	剣岳・千代谷		西田 茂 (33)	同 左	休憩時、ヘルメットを雪面で、脱落させる	回収、雪半面に不甲冑にあわれないこと。
5. 4	須磨坊山	剣岳・冷尾根 西沢		吉谷隆男 (27)	原 利男 (29)	休憩時、雪斜面でザックを約200m滑落させる。	回収。 雪斜面ではザックをピッケルで止める習慣を、
5. 4	神戸坊山	剣岳・剣沢		広畑都夫		6人パーティ中の4人用のテント持ち出し、出発前に点検している。	2人はリフトで降り、 装備の点検、型式・サイズ等の表示
	大甲坊山					渡渉中、転倒	
	甲山坊山			渡田 元 (男)		軽い高山病	
7. 30	須磨坊山	赤木沢		原 利男		水の飲み過ぎによる腹痛と体力不足でバテる。雨で寒さもかなり悪寒が止まらず、お湯を飲めず、全部は残す	翌朝は体力回復する 生水を飲み過ぎない。 身体の保温に注意。
7. 30	〃	北尾・ムクウ山		吉本 浩		山頂付近で、驟雨中、メンバーが30分彷徨する	翌朝はその行動がメンバーの指示に従う。
8. 1	宝塚山会	針木岳(下)		竹本 武久		カズのため(視界5~10m)10分間、リングワンテリング	全員ヘルメットの確認に心がける。目的まで けて判断する。

年月日	山名	発生場所	山名	リーダー(年令)	事故者(年令)	(事故内容) 発生原因	事後処理, 教訓
1983 8.12	神戸城山	南ア・広河原	岡村欣哉	高橋誠二		6m巾の小波川を膝位の木位で渡渉中、足を踏みはずし、転倒し流される。	慎重に行動すること。場合によっては、バックサインを使用するなど、安全措置をとること。 9シザイルの心構え。
8.14	西宮北の嶽	南ア・三伏峠	熊田 正			強風に飛ばされ、テントが倒れ、支柱が折れた。	カケの肩で代用した。 強風時のテント設置時の注意、テント内にザック等を重く入れとく。
8.13	但馬弁山	剣岳「カニのたてはし」 最上部	森岡信吾			小田垣道代が、落石を起すが、幸い誰にもあたらずに落ちた。	「落」と叫び、下に警告。 最上部の安全地帯と思われた場所につき、木と一息ついた直前の気のゆるみが原因。 岩場では落石に細心の注意を要する。
8.14	箕本芳山	剣岳・前剣	鎌田			前剣のがけの登り、田村隆文が、落ちた石が、後続の鎌田八重子にあたる。	岩稜も、がけ場では、絶対に石を落とさないように歩行に注意する。
8.27	須磨弁山	南ア・赤石沢 大滝巻道	吉谷 隆男	斉藤 茂樹		大滝を高さ5m、草の上のスリッパがくずれ、1m弱スリップ。	後続者により停止。そのまま登り、正しいルートをとる。 ルートファインディングを確実に行う。
8.29	〃	槍ヶ岳・ 肩のサコシノ場	永峯 奈美子	亀田 隆夫		テント内で木エクスを予熱中、コックの締めまちが、右回りを左回した(左)にお、ガツリンがそれぞれ、燃え尽きた。	テントの外へ放り出す。 薪火おぼいほ、扱いは、未熟なものに事前にコンロの扱い方を徹底させる。

兵庫県連遭難対策年表

1966. 4 .16 兵庫県勤労者山岳連盟結成（西宮・尼崎・宝塚・神戸の4 労山 200名）
1967. 7 .29 剣岳の雪溪で藤田敏宏氏（神戸労山）が滑落し重傷事故。
1969. 6 .22 第4 回県連総会で「兵庫県連遭難対策規程」を決定。
- 1970.10. 「県連遭難対策規程」が各会で批准される。
- 10.25 遭難救助訓練（第3 回県連登山学校として）を蓬来峡で実施（32名）
- 12.18 冬山山行対策会議を初めて開催。（以後、山行の集中する正月、5 月連休、夏山の前に「連絡会」を開き、計画書の検討と情報交換を行っている。終了後は「反省会」を開き1、山行の目的が達せられたか（総括）、2、山行の問題点、今後の山行に活かすべき教訓と課題。3、山行記録。4、事故・事故未遂及び事故につながる要因についてまとめ教訓を全体のものとしている。県連として留守本部をこの期間設置し、下山連絡を徹底させてきた。）
1971. 5 . 7 各会代表者会議で1、兵庫県の山岳自然破壊の総点検。2、六甲山全水系の水質調査を取組むことを決定。
- 7 .11~12 第3 回全国登山研究集会在兵庫県連主管で西宮市において開催（23都道府県 372名）
1972. 3 .20 富士山で清水労山が大量遭難（12名中11名が死亡）
- 3 .23 県連常任理事田淵常雄氏を静岡へ派遣し、清水労山の捜索活動に従事させる（~28日）。清水労山支援のカンパを訴える。
- 3 .26 富士山遭難の捜索活動に6 労山29名を派遣。
- 4 . 9 " 3 労山4 名を派遣。
- 5 . 前穂高北尾根6 峰から徳島・小松島山の会の3 名が滑落死亡。
- 6 .15 遭難対策討論集会①6 労山29名。6 .22 ②7 労山30名と小松島から3 名、6 .29 ③7 労山35名。富士山遭難、5 月連休遭難で17名の労山の仲間が死亡したことを自分たちの問題として受けとめ、仲間の尊い生命を今後の私達の活動に活かしてゆく方向で、日々の活動をふり返り、「あいまいさ」を残していることを徹底的に明らかにし、二度と遭難を起してはならない、あってはならないという立場を明らかにし意志統一の場としました。「山に登ることを大切にすることと同じく、山に登る前を大切に、山に登ったあとをさらに大切にすることの全てが我々のする山行だと思う。山に登る前

- と後を除いて、私たち労山の山登りはありえない」
- 7 . ロックガーデンB県垂岩で田淵(常)氏が転落し腰椎第2骨圧迫骨折の重傷。
- 10.30 氷ノ山・大幹線林道建設中止請願署名運動に取り組む。
1973. 7. 1 遭対救助訓練 11労山81名
10. 8 前穂高北尾根で柳楽峰子さん(神戸労山)が転落死亡。
- 10.26 柳楽峰子さん遭難報告集会。
- 11.19 故柳楽峰子さん追悼式。
1974. 3. 16~17 第4回兵庫県登山研究集会(摩耶・自然の家)のべ142名参加。
3. 23 鹿島槍・赤岩尾根で大阪府連が2重遭難。「仲間のあやまちは自分のあやまち」という立場で物心両面の支援を訴える。
6. 8 西日本活動者会議が岡山市で開かれ15府県から53名(うち兵庫18名)、深野一郎氏が問題提起「遭難事故をなくす活動をどうすすめるのか」
7. 21 武庫川で淵上博さん(芦屋労山)が渡渉訓練中水死。
9. 会員数1,000名突破。
- 10.19 遭難を考える集会。
- 11.10 ロックガーデン岩小屋岩で脱出訓練をしていた竹中正樹氏(芦屋労山)のシュリングのテグス結びがほどけて墜落し右手首骨折。この事故が直接きっかけとなって多発する岩登りの事故を防止するためにも科学的に岩登りを教育しなければならないと「岩登りテキスト」を講想し作成にかかった。
12. 5 第1期県連リーダー学校開校(～1975. 3月)
1975. 1. 28~29 遭難対策研究会① 兵庫県で。
2. 13 淵上、竹中事故について事情聴取(山と仲間編集会鳥越氏)
4. 5~6 富士山の全国遭対講習会に5名派遣。
5. 8~11 岩登りテキスト(案)にもとづき岩登り講習会を実施する。(現在の県連初級岩登り教室の原型となった。)
5. 31~6. 1 遭難対策研究会②名古屋市で18名参加。
6. 26 第2期県連リーダー学校スタート(～9月)
7. 25 槍ヶ岳で岸本喜則氏(武庫労山)が転落しケイ椎第6脱臼圧迫骨折で入院。1年8ヶ月の重傷事故。
8. 3 保墨岩で玉井進吾郎氏(摩耶山友会)が墮落し腰椎第2、3圧迫骨折で入院。10ヶ月の重傷事故。
8. 12 笠ヶ岳金木戸川で住田末則氏(伊丹労山)が滝つぼに落ちて気絶し、人工

- 呼吸で回復。
- 9.4 遭難討論集会① 19労山86名、9月9日2回目 18労山78名
- 12.20 第3期県連リーダー学校スタート(1976.3月)
- 1976.2.19 第1期初級岩登り教室が開かれる。(以後年に2期実施し、1983年秋で16期を終えた)
- 3.20 奥穂高・ロバの耳で第3期リーダー学校の修了山行パーティが遭難し、安田勢喜さん(西宮労山)が凍死。安留絃一(甲山)、平野恭一(西神戸)、西嶋喜好(伊丹労山)の3名が両足とも中足骨で切断の凍傷。岩佐正敏氏(WV六甲)は手足の指の一部を切断)
- 4.12 ロバの耳遭難、救助隊総括会議
- 11.6~7 第12回県連総会で「県連教育体系」を決定した。
- 1977.1.2 槍ヶ岳で摩耶山友会パーティがリングワンデルングをおこしビバークとなり凍傷。臼井、池田均の両名は足の指を一部切断。
- 3.10~11 山行指導担当責任者会議で「入山前体力評価の考え方」と日常トレーニングを土台においた「山行活動の強化の方針」を提案。
- 5.5 鹿島槍・赤岩尾根で上田孝男さん(尼崎労山)が滑落し死亡。
- 7.26 ナンダデビィ登山隊出発(11月下旬帰国)
- 11.27 保聖岩で高見正幸氏(みなと労山)が転落し重傷。(目的とする山行のトレーニングと合致していなかった)
- 12.25 ロックガーデン“中村フェース”で中村邦興氏(甲山労山)が転落。(目的とするトレーニングに合致していなかった)
- 1978.3.5 五竜岳で滋賀山友会が遭難し4名全員が死亡した。兵庫から5名を遺体収容活動に派遣。
9. 剣岳。別山尾根で藤井正文氏(かたつむり)が転落し腰椎圧迫骨折の重傷
- 10.22 六甲山からゴミを一掃する運動第1回統一行動日(以後毎月1回実施し、1983年10月16日で56回)
- 1979.5.3 明神岳II峰で谷口千秋氏(芦屋労山)が滑落し重傷。
- 6.7 救急法 講習会
- 6.10 搬出法 講習会27名(2回目を7月1日に33名で)
- 6.12 第4期県連中級登山学校開校(～1980年5月)
- 7.26 インドヒマラヤCB12女子登山隊出発(～9月2日)初登頂に成功!
- 12.13 会員数2,000名を達成!

1980. 5. 10 インドヒマラヤシブリン峰登山隊出発（～7月6日）外国人としての初登頂に成功！
12. 12 高層天気図学習会（52名）をはじめて実施（以後毎年12月に実施する）
1981. 1. 11 芦屋ロックガーデン階段化反対の署名活動をスタート（16万余集約し6月29日環境庁長官と会見）
1982. 1. 23 会員数2,300名に（最高到達点）
1982. 3. 21 八ヶ岳中岳沢でみなと労山パーティ（13名）が雪崩に襲われ11名が死亡。2名が救出される。
3. 22 県連盟は直ちに各会へ本格的な山行活動の自粛を要請。
5. 2 八ヶ岳遭難者追悼式（660名）
7. 25 ・八ヶ岳遭難現地追悼式。 ・県連として山行活動を再開する。
9. 11 日本・ネパール合同キャリオルン登山隊出発（～11月12日）初登頂に成功。
12. 2 “淡河廃棄物処分地”の再検討を求める署名活動がスタート
12. 2 事故事例から学ぶ冬山学習会①（凍傷について）36名
12. 13 “ ” ②（雪崩・滑転落について）37名
1983. 4. 3 第1回六甲全縦タイムトライアル（250名）
1983. 4. 24 八ヶ岳遭難者追悼集会（329名）
8. 15 五竜岳・遠見尾根で辻宗郎さん（西宮労山）が転落し死亡。
8. 22 遠見尾根遭難事故報告集会。
9. 10 “ ” 討論集会
10. 2 第1回県連駅伝大会 20チーム 120名

兵庫県勤労者山岳連盟連盟規程

1. 前文

私に在りては文學を樂しむ吾樂に親しむように、スポーツも人間らしく生きる當然の権利と見え、今日の發達した社会では他の民主的な諸制度の如くともに、勤労者の体育文化の普及と向上は、国の政策と自治体が施設を充實せしめ、スポーツを樂しむ環境を整えることが保障だと主張してきた。

美しい四季と変化に富む山岳をもち我國の山々は、古くから人々の生活と深く結びつき産業の發達と共に、芸術の伸張に貢献してきた。近頃江会成立後スノーリゾートビニズムが發生し岩と雪と氷を求め岩登山家を生み出した。資本主義社会の恩恵を受けけるこより登山家は新しい登山の分野を開拓し、山行形態、技術と創造したが、秘傳と言語記録を継ぎ続けた英雄主義と運命を美化する風潮をもち、日本でも登山史は連続史でもあった。

山での事故は人々が生活する場と全く異り、厳しい自然条件の中で生命の危険はもとより、肉体的疲労、その救出、対応の処置など困難を極め、大膽の人と莫大な費用を要しとうとう登山者で願うことが不可能な場合が多い。

連盟が登山者の英智と探検と体力を起した自然の力で発生してもその原因は登山者の側に在る。事故は、登山者は日常の生活環境、資金、休暇などの労働条件や、所属する山岳会活動の状況や連盟防止対策の在り方又は人柱や山に対する態度が原因な社会的背景を前記して山に入るからた。

永遠に山での事故を防ぐため正しい登山思想に基く安全登山の研究と本格的な救急の備蓄、事故防止の志士と自らの資費と設立に付け代わらない。これらは救えぬいざいざい高き山岳の険難により運成される。

この規定は所為する会員の利益を守るためのものでなく山での事故を起さぬための努力を義務づけ、万一起した場合が仲間を次々にする運命と組織の力を管理し損失の軽減からんことを願うものです。

この規定の成立に於いては、山岳連盟の歴史的背景を自覚し保持する諸規定(則)が共有の財産として継承するよう不断の努力を尽くすことと誓約する。

2. 総則

- (1) この規程は連盟対策についての必要な事項を定められたる山行から事故をなくし、運動の発展に資することを目的とする。
- (2) この規程は、山行のあり、救助組織、救済基金の各面より連盟の発展に資し、事故を防止に起すべし、という趣意をもち、この趣意は、連盟理事会の承認を得る。
- (3) 県連連盟対策委員会をもち、この委員会は、連盟理事会の承認を得る。委員若干名と、各会から各1名選出された委員を構成し、委員長1名および委員若干名を置く。
- (4) 県連連盟対策委員会は月1回委員長が召集する。また必要に応じて委員長が召集する。
- (5) 県連連盟対策委員会の活動を行う。
 - ① 連盟特別の研究、分析を行い、救済に資し、普及する。
 - ② 各社が情報の収集、蓄積をなすに促進。
 - ③ 関係法令およびその他の情報の研究、指導。
 - ④ 救急技術の講習および訓練の研究、指導。
 - ⑤ 山行計画書の検討と必要な調査。
 - ⑥ 連盟救済基金の管理、指導と救済活動の展開。
 - ⑦ 連盟対策基金の管理、運用。
 - ⑧ その他必要な事項。
- (6) 県連連盟対策委員会は各会連盟対策を統括し、指導する。
- (7) 各会連盟対策は、精進山登山、救急、災害に資する山行のうえ、別に定めらるるものについては、山行計画書を連盟対策委員会へ提出し、検討をうけなければならない。
- (8) 各会連盟対策は県連連盟対策から山行計画書について協賛をうけたときは、報告書等を尊重しなければならない。

3. 救援組織

- (1) 登山会員としての自覚と連帯に基づき、もし万一、遭難が発生した場合に徹底的かつ効果的に対応するために、救援組織をもうけ、各会から募った遭難隊員で組織する。
- (2) 協力は各会遭難隊を通じて県遭難隊に登録し、県遭難隊が管理し、指揮する。
- (3) 協力は県遭難隊の出動要請によって出動する。
- (4) 救援活動の細目は別に定める。
- (5) 救援の発数は、原則として、例会(会山行)、各会の山行規定に基づく自主山行、個人山行の場合とし、その他の場合にはその責をみわめない。

4. 遭難対策基金

- (1) 県連の連帯の力で、いかなる事態にも対応する物質的基礎として、遭難対策基金をもうける。
- (2) 基金の財源は、会員の出資金および寄附金その他とする。
- (3) 会員は毎月20円出資するものとする。
- (4) 基金は、例会(会山行)、または各会の山行規定に基づく自主山行、個人山行での遭難においてその捜索または救援の費用として一定の限度まで支出するものとする。支出方法、支出額等については、別に細則をもうけ定める。
- (5) 基金は、各会遭難隊の要請があれば、捜索または救援の費用として、一時貸付をすることができる。貸付方法、貸付額等については、別に細則をもうけ定める。
- (6) この基金の管理、運用は県連遭難隊が行うものとする。但し当分の間は県連事務局が行うものとする。
- (7) 基金は特別会計とし、年2回、会計監査をうけ、結果を公表する。

附則1. 2-(7)の別に定めるものについては近畿X連の山行とする。

2. 4-(6) 当分の間は県連事務局が行うものとする。

1. この規定は、私たちが行う山行について必要な事項を定め、私たちの山行が私たちの健康を増進し、生活文化を豊かにするために資することを目的とする。
2. 山行とは次のものをいう。
 - (1) 例会山行—例会の事業として計画し、実施する山行をいう。私たちの山行は原則として例会山行によるものとする。
 - (2) 自主山行—例会山行がないときに、会員同志で自主的に行なわれる山行をいう。
 - (3) 個人山行—例会山行、自主山行以外に会員外のものを行う山行をいう。
3. 例会山行は別紙様式(1)による山行計画書を会の運営委員会および遭難対策委員会に提出し、遭難対策委員会の検討と運営委員会の承認をうけて実施する。
4. 自主山行および個人山行を行おうとする会員は山行計画書を運営委員会および遭難対策委員会に提出し、その承認をうけなければならない。
5. 山行計画は、おそくとも山行を行う2週間前までに提出しなければならない。
6. 運営委員会ならびに遭難対策委員会は、山行の承認にあたっては、慎重に検討し、必要があれば、指導、勧告を行うことができる。指導、勧告をうけたものはその事項を尊重しなければならない。
7. 山行の種類を問わず、宿泊を伴う山行および遭難対策委員会が必要と認める山行の場合には、登山本部をもうける。山行参加者は下山後直ちに登山本部に山行が終了した旨を報告しなければならない。
8. 山行終了後は、速やかに総括を行い、別紙様式(2)の山行報告書を作成し、所定の機関に提出する。
9. 単独行は原則として認めないものとする。

遭難対策活動について

兵庫県勤労者山岳連盟

はじめに

兵庫県勤労者山岳連盟は一九六六年四月に結成されて以来「安く、楽しく、安全に」をスローガンとして、遭難のない安全登山を行っています。基本的には県連加盟の各会の山行はよく準備され、トレーニングを行ない力に応じた慎重な態度で行なわれてきました。

年を追って山行内容が巾広くなり、岩登りが盛んに行なわれるなど技術的にも高度のものを追及しはじめてきました。しかし結成以来三年を経ない間に、一九六七年七月に剣岳の雪溪で滑落事故一件（神戸）を起こしたのをはじめとして、一九六八年には六甲山の岩場で墜落事故三件（尼崎、西宮、宝塚）と槍ヶ岳の雪溪で滑落事故一件が発生しました。これらの事故以外にもホエーブスの引火事故によりテントを焼失した例がありました。幸いにもこれらの事故は死亡者を出すまでには至らなかつたが、全国的には登山会員が二名死亡するという事故も起っていました。

短期間のうちに事故が続出している現状のように登山技術の発展にともない山行が高度化しつつあるにもかかわらず、相対的に登山思想の確立と普及およびそれに基く具体的な事故防止、対策がた遅れていることは重大な問題であるという声と共に、今一度遭難対策のあり方、強化がクローズアップされてきました。

県連盟ではあいつく事故の対策を早急に講じる必要を痛感し、事故防止対策に具体的にとりかかっています。

遭難対策規程について

一九六八年秋に県連理事会で以上のことを確認し、遭難対策委員会を確立し、全県的に登山思想を深まるきっかけをつくり、加盟各会が連帯して遭難、事故を防止し、対処してゆく規範として、遭難対策規程をつくってゆくことにしました。委員会の中で協議し、規程の原案を作成し、一九六九・六・二二県連第四回総会で承認されました。この規程を作成するにあたって、①山行規定 ②救助組織 ③遭難基金の三つを柱としました。この三つの柱は「安全登山」の啓もう活動と合わせてそれぞれが重要な関連性を帯びているといえます。

① 山行規定について これは遭難規程全体に含まれるが、各会が現状に合わせて、自主的な規定を決めることになつていきます。しかし県連として統一した考えを各会の規定に盛り込んでもらうために〇〇〇〇会山行規定（案）を作りモデルとしました。この規定は私達が行う山行が登山の掲げている「安く、安全で楽しい登山」を実践していけるように山行のあり方を明示し、山行に関する手続「計画から報告にいたるまでの」を定めています。この規定で最つとも問題になり各会でも議論されたのは「単独行」の取扱いでした。県連としては単独行という登山形式が目的意識的に登山が推奨するべきものではない。しかし現実としては得むをえない面もあるとして「原則として認めない」という表現を用いました。この問題が各会で承認され切つたのは一九七〇年一〇月でした。この論議の中には各会および会員の登山思想が

如実に浮きほりにされ、安全登山についての大きな啓もう運動となつていきましたが、まだこれからも「単独行」の問題は話しあつてゆく必要があるといえます。

② 救助組織 万一、事故が発生した場合に救助できる体制がなければ、安全登山の保障はなにも同然です。従つて日常的に連絡網を整備し機敏かつ効果的に対処できる体制がどうしても必要であります。救助要員は登山会員としての自覚と連帯に基いて各会から夏山経験三年以上の会員を募り協力員として登録することにしていきます。又、救援の発動は、前項の山行規定に基く山行の場合となつていきます。

救助組織は連絡網の整備と救出技術の学習・訓練をし研究してゆくことが必要ですが、現実にはまだそこまで踏みだすことが出来ていません。

③ 遭対基金 この問題は全国的にも大きくとりあげられ全国単一の基金制度が提案されています。兵庫県連としては、ハイキングから冬山という巾広い層を結集してゆく点で全会員がまとまつてゆける金額として一人月額二〇〇円という額。

を決めました。この基金は全員拠出制であり、全員が出してゆくことは遭対問題について全員が考えることになり事故防止の思想の普及に役立つこととなります。確かに現実に冬山で遭難が起つた場合など、ボウ大な金があることは目にみえています。このような点から見れば現実的な金額ではないと言えますが、額の面は組織を大きくしてゆく中で解決されてゆくのが基本と考えます。

遭対活動の現状 ①啓もう活動、第四回総会で規程が承認されて以後、各会の総会で運営委員会で論議し規程、特に山行規定の制定を含めて批准を求めました。一九七〇、一〇まで一年半ほどかかつて加盟各会の批准が終りました。前述のように、この規程の論議によつて、各会の事故防止の思想が啓もうされ、兵庫県の登山運動に一定の前進的役割が果たせています。このことは規程承認以来、山行内容はより巾広く、技術的に高度化しているにもかかわらず、事故発生はほとんど減少していることからもいえます。(神戸では一九七一、五剣岳で滑落による骨折事故一件発生、別途報告予定)

② 遭対規程の整備 規程が出来て精神が盛り込まれたものの、まだ手足が十分はえていないのが現状であり、細則の整備、作成にかかっています。まず、前文が完成していません。規程(2)一七の「……別に定めるものについては……」というところは「近畿以遠を山域とする山行および近畿においても各会遭対委が必要と認められた山行とする」と決めました。

(3) 救援組織の協力員の登録申込書及び登録証を連絡網整備をする点からも検討し、協力員が自覚するようにしたいと考えています。(3)一四の「救援活動の細則」、(4)一四、(4)一五、の「支出方法、支出額および貸付方法、貸付額の細則」について作成中となっています。(4)一六の「基金の管理、運用」は当面、県連事務局で行なうようにしました。これらの諸点を早急に決定しなければ、名実ともに私達の規範となりません。

③ 遭対委の活動 (略)

仲間の死を無駄にすまい

兵庫県連会長 武原 勉

- (1)富士遭難は大きな衝撃でした。労山なればこそその「連帯、友情の捜索」の努力が実を結んだことが、今となってはせめてもの救いです。亡き友の御冥福をお祈りしたいと思います。
- (2)兵庫の救助活動は十分に静岡の仲間の期待に応え得る程のものではなかったとしても先発を含めて3回、のべ33人を現地へ送ることができました。みんな費用の自弁は覚悟のうえの参加でした。退職金をポケットにねじこんで飛び出した者、一年間山に行かなかったのに借金をしてまで参加した者も居ました。「現地の作業は、メシを喰うのがやっと、茶ものめず、煙草をつけるひまもない文字通り厳しいものだった。」「だけど、対策本部でうなだれて元気のない清水の仲間、遺族の方々の姿が胸にやきついてはなれなかった。」「ギョソときた。だから理屈ではない。身につまされて頑張ってきた。」「と彼等は告白しています。捜索活動参加者の総括会議に飛び入参加した女性の一人が嘆息をまじえて語りました。「女はあかんなあ……。気持だけはヤキモチしとんやけど、行っても邪険になるだけ、第一“ツルハシ”なんて見たことも聞いたこともないんやから……」すかさず野郎達が云いました。「そんな事ない。本部のテントと作業場との連絡、茶でも沸かして配ってくれたらごっつい助かったやろ。何もせんでもエー、“ガンバツター”の声だけで、わしら元気がでる……。」「ドツと吹きだす笑いは同感の表現でした。しかし彼女は笑いませんでした。男女の差は通りこえ、静岡と兵庫の距離を飛びこえた働く仲間の連帯の心はどっと吹きだし総集して、富士へ、静水へと注がれたのです。私はこのことを決して忘れまい。大切にしたいと思

ます。兵庫県連として派遣したのは33名ですが、文字通り県連600名のひとりひとりの心の代表として、静岡の仲間を示し得た、せめてもの友情の証しであったとの実感は決して私だけのものではないと思います。33名の仲間達本当に御苦労様でした。

- (3)静岡の仲間達の苦悩は筆舌にはつくし得ぬものだったはずですが、よくも耐えて頑張ってくれたものと云わねばなりません。清水がもしつぶれたら、労山の一万人は「清水をつぶした烏合の衆」になり果てたはず。何故なら労山の真骨頂「働く者の連帯」の看板を自らはずすことを意味するからです。労山の意地にかけても「清水をつぶしてはならない。」清水を励まし、より強力な清水労山の再建をサポートする。その事によって労山全体も逞しさを加えるはず。その取組みこそが我々の「総括運動」であるべきはずですが。だから今、静岡の仲間が金を必要としているなら「山行を一回減らすこと」を執行してでも友情カンパを送らねばならないし、一枚の葉書に「頑張ってくれ」の一言でもよい。訴え励ます事は誰でもできる。是非今からでも実行したいものです。
- (4)「この際に議論はぬき、基金制度の確立を」の声がたかまっているようです。しかし事柄の本質で討論を深めるのではなくて、この論は「対策主義」の域にとどまるのでは。「採決で下山を強行」と誑売が「赤軍派」ブーム便乗したナンセンスは論外として、マスコミは型通りの非難キャンペーンをさしひかえました。「勤めのため下山を急ぎ……」の見出しで、リーダー杉本君の手記をそのまま報じたサンデー毎日をはじめ、マスコミ一般は事柄の本質を正しくおさえるべきだとの立場を取りました。遭難対策は最早働く者のおかれている立場を科学的

にふまえること、そしてその対策に及ぶものでなくては、技本対策とはなり得ないと論調がはじめてマスコミで日の目を見たことを重視せねばなりません。そのことの真意は私達にとって全く厳しいもの、決して同情などと即断してはなりません。私はこう考えます。「働く大衆は無理せんと山に行かれへん。だから作ったはずの労山ではなかったか。労山よシツカリセラセ。」と。また、「労山よ！ 汝の価値にめざむべし。1,000万円の基金が出来たことが新たな3,000万円の安易な遭難を引き起すはめになってしまつては手おくれた。」と。

(5) 色々教訓が具体的に書かれています。山溪岳人 etc、仲間のニュース、機関紙誌のまさに中心課題であつて当然。また内容も「その通り」で異議なしですが、次に敢えていくつかのべるのは私見です。

④6年でやつと10,000人になった組織です。全く新しい運動を作るのだとめざした労山が今なお大きく残している思考錯誤の部分に性急に「既成のものさし」を当てはめる事はやめたい。例えば「労山は山岳団体」として山行を先んさせた価値判断の基準を持ち込む傾向です。岳界一般では通用して当然の記録主義との見わけがつかなくなつて芽を出す「あせり」が原因で、登山観が現実生活から遊離する。自己の過信と山への過少評価をうみ、無理な山行、安易な計画となつて遭難をうむ。「山に志して6ヶ月で6級の岩を登る」これは決して労山の会員の尻をたたくに相応しいものさしではないはずです。「山に登れへん、岩もへタクソ」だけど皆が山に登っている日曜日、事務所で必死にガリを切つて充実感を持ち得る仲間がいる。労山のすばらしい特徴です。「山を舞台にして活動する若者の全国的な、ふれ合いの場、サークル」であつてこそ、労山は山を知らない若者とも広範に結びついて期待をあつめ得るもの。今こそあせつてはならない。

⑤しかし決して安易に流れてはならない。たしかに労山、「みんな仲よく一緒に山へ」でなくてはならないのだが、それがつい「みんな仲よく冬山へ」と短縮する安易さを

許してはいないだろうか。非科学性は働く者に幸せな未来を決して保証しない。厳しい山が舞台である以上、当然ふまえるべきセオリーがある。「まず尾根を歩いて広く知り、次いで自を遡つて深い山の理解に到達する」「安全に予備をもつて、これをなし得る岩登りの技術」「夏から始まって秋・春・冬へと山行は発展し、登山の中味も深まる。そのために必要な具体的な技術、装備用具の徹底理解、研究。ステップバイステップの確実な科学的積み上げが、登山にとって絶対必要だ」とのABCが、今こそ再確認されなくてはならない。地図が読めず、天気図を書き、読みこなし得ない者を無計画に、5月の雪山に誘うの愚かさを今我々はおかしてはいないだろうか。確かに必要な一人ひとりの「ケジメ」の自覚、そこに到るまでの民主的な運動の積み重ね。豊富な中味の蓄積の上でなおやむを得ない遭難にそなえて「基金の確立」を考える。是非そうしたいものです。しかしそこで忘れてならないのが「スポーツは権利」という大切な課題です。社会主義国では、厳しくもまた到れりつくせりの登山政策の実行を国が保証援助し、その上での遭難は政府が面倒を見、遺族の生活も国が保証するのです。「働く者のおかれている条件の中にもこそ遭難の真の原因は追求されねばならない」のなら、生活を改善し、労働条件をよくすることが課題です。賃上げ、反合理化が今では遭難対策だという理屈に決して無理はないのです。2ヶ月の夏休みに加えて登山家のためには更に別の休暇が権利として与えられる社会主義国では、決して今回の富士遭難はなかったであらうと信ずる時私は富士で亡した仲間のことが無残に思えてならないのです。決して彼等の死を無駄にはすまい。

(6) 以上はあくまで「さし当つての感想」域にとどまるものです。あまりにも問題は深く広いことを痛感します。集団討論を通してこそまとめ得るものです。小論はあくまでそのキツカケ。要するに云いたいことは「討論を討論を！」です。仲間の奮起を切望します。

— 未完 —

(兵庫県連「事務連絡167」)

遭難対策について安全の保障をどこに求めるか

兵庫県連 田判常雄

三月と五月の春山での仲間への死は、私たちに大きなショックを与えました。会員のみならず家族の者にもかなりのショックを与えたようです。私達はこの仲間への死を決して無駄にする事なく今後の活動に生かすようにしなくてはなりません。これらの遭難事故に対し兵庫県連では捜索活動に参加すると共にカンパ活動にも積極的に取り組みました。これらの一環として6月に三度の遭難対策に関する討論集会を持ちました。一回目は武原会長の「仲間への死を無駄にはすまい」をたたき台にし、会の現状を出し合い遭難につながる要因は何かを考えてみました。二回目には小松島山の会の仲間三名を迎え、遭難時の状況や山行の取組み、現在の会の状況等の説明を聞き遭難の原因を考え、教訓を出し合いました。三回目では上記二度の討論をまとめ安全登山を行なうにはどうしなければならないかを考えました。まだまだ具体的な行動を提起するには至っていませんが、若干の問題点を討論した事を中心に報告したいと思います。

私たちは山での遭難は起るべくして起っているものと考えています。従ってそれには原因があり、原因がある以上当然防止策があります。その原因究明と防止策なくしての事後対策は論外といえます。更に遭難の対象者が初心者から高度のテクニックを有する者にまで至っている以上、技術もさることながら「働く者の命を大切にすの思想」その延長線上の「登山観」を考えない訳にはゆかないと思います。

1. 登山の大衆化と安全度

私たち労山は登山の大衆化を目指し発足した山岳会です。それは遭難をなくすための大衆化でもあったはずですが、すなわち働く者の生活に根ざした命を大切にすの思想を基礎に様々な困難を乗り越えて団結し、登山技術、登山知識を高め、安全に安く楽しい山行を実践する中で登山を大衆化しようとしたはずですが、しかし、現在は正しい働く者の命を大切にすの教育をせず、又、安易に考え非科学的な心情論で野放しに山へ行く大衆化、科学的な登山を抜きにした大衆化になっているのではないだろうか。武原会長も言われている通り「みんな一語に仲よく山へ」が「みんな仲よく冬山へ」とはなっていないだろうか。地味な一歩ずつの進歩こそが確実な科学的な進歩こそが本当の登山の大衆化ではないでしょうか。

2. 誤まった初心者保護主義

これは/とも深い関係を持っているが、私たちの中に誤まった初心者保護主義があるのではないだろうか。全てのことに余り深く考える必要のなくなったこの頃、考えさせない仕組みの社会、この状況の中で会がいつまでも手をとり、足とりで指導するのではなく自分で考え、自分で行動する、そういう能力を身につけさせることは重要です。そして、そのことこそ多くの活動家を育てることであり、重大な時に判断を鈍らせない安全を保障することだと思えます。

3. 山行について

「山に登ることを大切にすのと同じに山に登る前を大切にす、山に登った後を更に大切にす。この全てが我々のする山行だと思ふ。山に登る前と後を除いて労山の山登りはあり得ない。」(兵庫県労山事務連絡NO.20) 私たちの登山運動が創造(古い登山活動を批判的に継承し、創造的に発展させる)であるならば私たちの山行は常に発展しなくてはならない。更にそれは理論化されねばならない。要は二度と同じ誤ちを犯してはならないのである。

(イ) 山行計画の段階での中心メンバーの姿勢

その山行の成否の50%までを計画の段階での安易さが遭難を誘っている場合がほとんどです。例えば岩登りにヘルメットを持って行かず、落石を受けたとか、雪渓であるにもかかわらずピッケルを持たずスリップ事故を起こすなど、また合宿や大きな山行を成功させるためのトレーニング山行に対しても

なまねまのこころを、登山の安全のための心算に

つい安直に「まあ、いいだろう」的になりがちです。トレーニング山行で事故をおこして、その合宿が成功したとは言えないでしょう。こういう話しがありました。電車に乗る前にヘルメットを忘れた者がいた場合、そのまま行かせるべきなのか、メンバー各人はどんな態度をとるべきか、リーダーはきーちり指摘し、判断を下せるのか。指摘された本人は謙虚に受けとめられるのかどうか。計画を確実に実行するかどうかは中心メンバーの姿勢にかかっています。目的を成功させるために安全面には厳しい姿勢で臨む必要があります。

(ロ) リーダーシップ、メンバーシップ

山行中はリーダーを中心にまとまりを結ぶことが安全を保障すると思われまふ。せつばつまった時、リーダーのもとに集まらず、まとまった行動もせず身勝手な行動をする。よく聞くことです。しかし、これは突然生じたものでなくその会の体質から発生したと考えられます。日常の会員の生活態度や日頃の山行での小さな問題が徐々にたまって山行の途中で爆発する。各会の中ではっきりさせねばならない問題はケンカをしてもはっきりさせていく必要がある。平素から何んでも素直に話せるふんいきや、会員の性格、考えていることを知って深みのあるつながりをもつ、その中からメンバーシップは生れるものです。リーダーは内的にも力量をもメンバー全員にわたって正しく把握しておかねばなりません。

(ハ) 反省会のもち方

私たちの山行でやもすれば軽視しやすいのが山行反省会です。私たちの登山運動は創造であり、たとえ少しでも発展させねばならないなら山行で最も大切なのは総括といえるでしょう。何故なら総括こそが理論化への道だからです。反省会の内容も楽しかった。おもしろかった」に終始せず、少しでも事故につながる危険はなかったかを点検するのは非常に大切です。又、安全には不可決です。そして遭難の起きた状態に対する分析、要因に対する分析、遭難の起こりかけ状態に対する分析、起こりかけた要因に対する分析、日常生活、社会生活に及ぶ究明を行ない文章化や表にして今後の山行に生かすべきでしょう。

おわりにこのまとめは6月に三度に渡って「遭難について」と題し、討論した内容をまとめたものです。又、兵庫県連の反省として出された意見がほとんどです。非常に不十分ですが、何かの参考になれば幸いです。

(第4回全国登山研究集会 1972年7月8～9日で報告、事務連絡NO 21)

高気圧低気圧

登山の歴史のなかで、数えきれないほどの事故があった。登山者はそれを教訓として、それを肝に銘じて、「事故をおこしてはならない」という結論を得てきたのである。

登山行為が事故と表裏である、というのは、今では通用する思想ではない。

それにしても、登山界は、遭難防止の努力を怠ってきたのではないか、という悔いがある。事故は不可抗力だったと判定することで結着がつく問題ではない。この判定が許されるとするならば、それは何と傲慢で、恐ろしい態度かと背筋が寒くなる。

遭難事故は、くり返されてはならない歴史である。

最近になって、遭難事故対策は、予防こそが最も大きい課題であるといわれている。たしかに、救助技術と遭難対策基金とは、かなり関心をもちたれて検討されてきた。しかし予防策については、漠然とした論議にとどめられていたのではなかったか。そこに、行政による「登山規制」が、わり込んできた。

しかし、登山における遭難事故は、登山を認めるかぎりには、登山者にとって最も大きな問題である。予防策には真剣にとり組まねばならない。

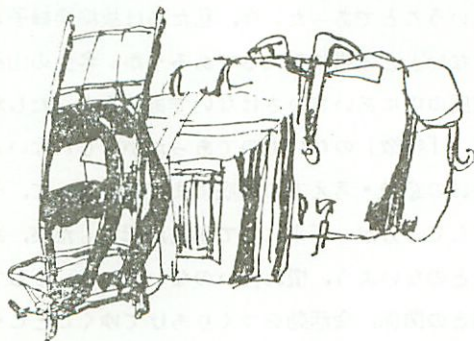
登山ではかねてから、遭難対策の柱として、教育活動・救助態勢・遭難対策基金制度を考えてきた。これは過去の教訓から導きだされた結論である。

予防策は教育活動に尽きる。民主的な活動のなかの教育活動こそが、遭難防止に大きな力をもつはずである。

しかしこれも特効薬の機能をもつものではなく、長い時間を要することである。体系だった理論が必要だし、指導者・施設・時間・費用が必要である。現在の私たちは、そのいずれも不十分なものしか持っていない。この現状のなかで、私たちはどうするか、を考えなければならない。

さらに、現在の日本の登山者の組織率は、登山人口のほんのひと握りほどといわれている。山岳会などに加入している登山者には、教育の機会があるが、大多数の人たちはその機会にも恵まれないという状態である。登山が登山を大衆化するためには、教育活動とこの組織の外にある人たちのことまでを含めて考えなければならないであろう。

その意味で教育活動は、登山運動の根幹をなすものであり、いかに態勢を充実するか、ということにかかっている。日常の活動のなかでひとつひとつ事ながらを着実に積みあげていくことでしかないのである。



総会決定を實踐するにあたって

組織・運営問題と故柳楽さんの遭難を考える

理事長 倉内 司郎

第8回総会はかつてない高い代議員の出席率によって成功裡に新しい活動方針等を決めて終了しました。今、各会は新しい意気込みで総会決定の学習と実践に取り組まれていることと思います。この小文では、新しい活動方針の2つの問題について補足的に述べてみたいと思います。

1. 組織の拡大と会運営の改善(田各)

2. 故柳楽峰子さんの死を無駄にしないために

10月9日故柳楽峰子さんの遺骨は、彼女の死を我が事のように悲しむ200名を上廻る多くの仲間によって三宮駅で迎えられた。10日の通夜、11日の告別式に参加した多くの仲間は、彼女の遺影に別れを告げる時、皆が「二度と事故は起こさない」「二度とこんな悲しい事はいやだ」と彼女に誓い、自からも胸に刻み込んできた。このことは私たちの日常の活動・会運営の中で一体どういうことなのだろうか。彼女の事故の原因については、遺対委員会を中心に究明中ですが、事故に至る経過、県連合同岩登り合宿の取組み等を振り返ってみるとき多くの不十分な弱さが目につく。もしこれらの問題が正面から問題にされていたら、又問題にしようとする連盟や会の体質があったならと悔やまれる。それでは故柳楽さんの事故の教訓を私たちの運動に生かすとは、どういうことなのだろうか、又総会決定にある「事故を起こさないための遭難対策の柱である事故防止規定」とは、一体どういうものなのだろうか。何回かの予定されたミーティング、トレーニングにだれも参加しなかった場合その山行の取扱いはどうなるだろうか。多分中止されるだろう。もし、それが50%位づつ参加だったらどのように取扱われるだろうか。この場合パーセンテージが問題なのではない。判断の基準とするところの基本的な立場なり、考え方を問題にしているのである。一つ間違えば生命をなくす要求をもつ登山は、その内容が厳しければ厳しい程その準備は計画的であり、厳しいものでなければならぬのも自明の理である。けれども、私たちの山行やそれを支える日常の会活動はどうであろうか。そういった視点から意識され、行われ、又チェックされているであろうか。昨年富士山における清水の仲間の遭難をうけて、私たちが3回にわたる討論集会で明らかにしえたことは、一にも二にも「事故につながるあいまいさを許さない」ということであった。今、私たちは故柳楽峰子さんの霊にむかって、「決して二度と事故はおこさない」と本当に誓えるであろうか。各会の山行にのぞむ立場、会員一人一人が会活動にのぞむ態度の中にあいまいさはないであろうか。たしかに故柳楽さんの遭難は、そういういい方をすれば、「特徴」のないものであったかもしれない。「特徴」がないからこそ、会活動、一人一人の会員の意識・考え方の奥底にまでわけ入って、それらを正さなければならぬのである。

不幸にして、万が一不幸にして事故が起こった際、あれも不十分だった、これも不十分だったと悔むことのないよう、慣れ合いのない厳しい、そしてあいまいさを許さない厳しさの故に暖かい、仲間との関係、会活動をつくりあげてゆくことこそ、本当の意味で故柳楽峰子さんの霊に報いることではないだろうか。

皆さん方の声を聞かせて下さい。

「遭難対策研究会」について

(研究会の目的)

全国的な運動の前進の中で、会員の増加、山行内容の「向上」と比例するかのようになり、最近、死亡事故が多発しています。遭難をなくすことを目的の一つとして創立された労山としては、そういった点からいけば運動そのものが遭難しかかっているともいえる状態にあります。昨年来、遭難の多発と運動の現状といったことについて意見を交換する機会があり、その中で「遭難問題についての全国的な意見交換と研究の場が必要」ということ、そしてその開催を全国連盟に要請していただくことになりました。同時に自主的な研究活動を進めることが全国連盟の遭難対策に関する諸活動を前進させるうえで大きな役割を果たすことになるだろう、ということについても意見の一致をみました。

以上のような趣旨にもとづき、遭難対策ならびにそれに関連する労山の日常活動、教育活動、山行等の問題についての意見交換、研究を目的に自主的な研究の場として有志による「遭難対策研究会」をつくり活動を行ってきました。

(活動の経過)

第一回研究会

一九七五年一月二十八日～二十九日 (於) 兵庫県芦屋市

二日間にわたる話し合いを通じ、遭難が多発している現状にストップをかけ生命を大切にすることを働くものの特権としての登山を進展

させるため事故をなくすことをめざす遭難対策の「はじめの一步」

をこれまでの全国の運動の経験の中からほりおこし、また、新たに作りだすことのためにこの(案)のような骨子でまとめあげ、それを六月二十八日～二十九日に東京で開催される第六回全国登山研究会で討論の素材として報告し以後全国の仲間によって検討をうけてゆくことをきめる。(参加者) 十二名

原稿執筆依頼

☒ 事故事例分析ならびに研究のため、遭難事故報告書、まとめの送付依頼(群馬・宮下正次、香川・真井英明、高知・大森義彦の各氏から送付があった)——ひきつづき行っていく)

第二回研究会

一九七五年五月三十一日～六月一日 (於) 愛知県名古屋

二日間にわたって六編の原稿について討議を行い、それぞれの原稿の基本的な考え方、論旨を確認するとともに、表現等についての部分的な訂正と補足をきめる。(参加者) 十八名
(今後の活動について)

全国連盟教育遭難対策委員会へ結果するとともに、研究会として残された課題をやりとげるためひきつづき活動を行なう。

(遭難問題に対する基本的な見解)

現在、労山における遭難対策は大別して、事故をおこさないための教育等を重視すべきという事前対策重視の考え方と事前対策も必

要だろが現実に事故が起っている中では当面、遭対基金と救助隊を確立すべきという事後対策重視の考え方にわかれ、問題が整理されないまま、そして具体的に問題を煮つめるといった機会もないまま時間が経過、各地方連盟、単位山岳会まかせの中から事故が多発し、多くの仲間の生命が失われているというのが現状である。

全国遭対基金制度は遭難対策に一定の貢献はしたが、今、何より必要なことは事故をなくしていく活動、事前対策を抜本的に前進させることである。事故をおこさないための方策を明らかにするにはまずその前提として「なぜ事故をおこしてはならないのか」、「なぜ山で死んでほしくないのか」、「山での事故はさげがたいのか」、「なぜ山に登るのか」等について理論的な究明が必要であろう。同時にあまりにも単純なミスや不注意が原因となっている事故も少なくないといった現状は、入会時から登山の基礎知識、基礎技術を働くものの登山観と不可分のものとして文字通り責任をもって系統的に教育する必要性を示しており、その内容、考え方等についての研究討論がさしせまって求められている。さらに、岩登り、氷雪技術等のテキストづくりと指導法の確立も求められているところである。又、山行中はもちろんのこと、計画立案の段階から事故につながる「あいまいさ」を許さない規律を作りあげることが必要であるが、山行と下界での日常活動は不可分であるところから、それは日常の会活動の中でのあいまいさをなくしていく努力と同一のものであり働くものの規律性をもとに血の通った会活動、仲間づくりが求められているといえる。

本来、遭難対策については、その性格からいって全国連盟の指導のもとに行われるべきものであるが、すでにふれたように、私たちの運動にとってさしせまっていたの最重要課題ともいうべきこの遭難対策も全国的な意見交換・討論の場はほとんどなく、その立場、認識も各地方連盟・個人によってバラバラといったのが実情である。

上記の課題をやり切っていくためには、①全国的にバラバラな立場、認識を相互に理解しあい、②意見のちがいを討論によって煮つめ、③全国的な遭対活動の到達点をまとめ、④遭難対策のあるべき方向と姿を明らかにする、ことがどうしても必要である。全国連盟がこれらの課題にとりくむ場合、各地方連盟、単位山岳、個人における自主的な研究活動はその成功を支える保障となるであろう。私たちは微力ながらそのために全力を尽す決意である。

過去のいかなる時期にもまして、今ほど私たちの運動から事故をなくすことが求められているときははないといっても過言ではないであろう。生活を豊かにするべき登山で生命を失ったり、心身に障害を受けることがあってはならない。全国の仲間がそのもてる智恵と力のすべてをかたむけるならば「事故があつてはならない、おこしてはならない」を単なる相言葉から現実そのものにするのが可能となるであろう。

遭難対策研究会

(世話人) 倉内司郎 (兵庫県勤労者山岳連盟理事長)

(連絡先) 〒六六五 宝塚市小林二丁目七の三七

宝塚勤労者山岳会気付

(TEL) 〇七九七一一七二一〇七九二

●資料●

「岩登りテキスト(案)」について (1)

作成のねらいとその内容

倉内司郎

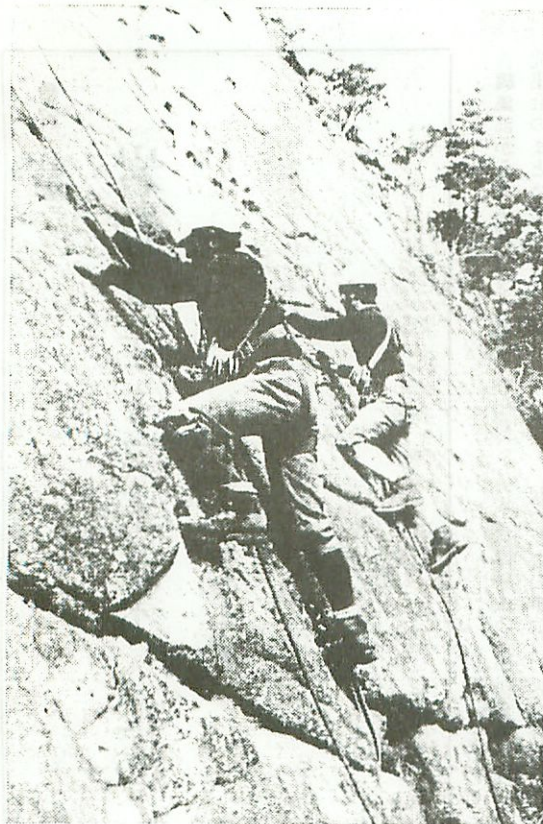
▲編集部から▽本誌前号に第六回登山研究集会のまとめを「特集/これからの登山」として掲載しましたが、この研究集会の中で提起された兵庫県倉内司郎さんの『「岩登りテキスト」(案)』についての全文を、二回にわたって掲載します。兵庫勤労者山岳連盟では、この「案」をもとに、正式なテキスト作りを予定します。この「案」についてのご感想、ご意見を編集部へお寄せ下さい。

昨年十一月一日〇日芦屋ロッタガーデンの「岩小屋」で宙づりからの脱出訓練をしていた芦屋労山のT君が使ったロープアセンドー(サレワ社製)のシュリリングのテグス結びがほどけて墜落、右手首の橈骨と尺骨を骨折するという事故が起っ

た。芦屋労山の「中級登山学校」の中で起ったこの事故は、安全登山をかかげながらいまだ、そのよってたつべき考え方と手だてをもちえないでいる私たちの運動に様々な問題を提起したのである。事故後の話合いの中で、自己確保をとっていかなかった問題、ほどける状態にあった結び目に気がつかなかった問題、末端処理の問題、ひいてはシュリリングに適した結び目の理解の問題、装備チェックの問題、リーダー、講師等から注意や指摘が適切に行なわれたかの問題、本格的には学校なり訓練なりの目的、意識性と指導法の問題等問題点がいもづる式に出てきたが、ひとことではいえないならば、この事故は、きわめて幼稚なミスであり、本人ならびにリーダー、講師の注意力の欠如と

指導法のまちがいに由来するということを指摘することができる。しかし、こういった幼稚なミスや指導法のまちがいは何も芦屋労山に限って存在する特別なものではなく、実はどこの会にも共通している問題なのである。例えば、登山用であっても中空式(ハノンモック式)になつていない、内側にスチロール類がはりつけてあつて衝撃がそのまま頭に伝わるような構造のヘルメットや、胸部式の安全ベルトをはじめとする欠陥商品を、会の中で最も熱心に岩登りをやる者が使っていたり、いまだに手袋を用いずに確保している者、安全ベルトの連結部にジュラルミンのカラビナを使っている者等、事故に直結する問題は、私たちのまわりに、いくらでもみうけら

れるのである。それではなぜ、こういった「危険」が野放しになつてきているのだろうか。このことについては徐々に明らかにしてゆきたいが、ひとことではいえず、安全な岩登りを登山運動の中に確立しなければならぬという目的意識性と、それを運動の中で実現するための理論と方法とをもちえず、自然成長的にこれまですべてのやり方を踏襲しているからである。よく言われるように私たちの中でも岩登りはいまだにきわめて閉鎖的にかつ徒弟的に行なわれており、全体としては、これまでどおりのやり方の域をでていないというのが実情である。ヘルメット等を例に指摘したようなことは、一部の「頑迷な」人たちを除いてはちよつと考えただけで理解できる問題であるが、理解が即改善につながるかは別の問題がからんでくる。即ち、理解をどう会全体のものにするかである。このことは会運営の問題であり、次にみるように、これまでどおりの考え方を考えることなくしてはその達成はむずかしい、ということなのである。T君の事故のあと、他の会のことと位置することなく、その事故から学ぶというか、その事故に照らして自分たちの会のやり方なりをふりかえり問題を明らかにし、同じ誤りをくりかえさない申しあわせなり手だてをとった会がいくつあつたらうか。又これまで事故を起こした会



＜六甲山・妙号岩で／編集部＞

なり人は、その事故の教訓を仲間にも普及するという活動、二度と同じ過ちをくりかえさせないための活動にどれだけ力を入れてきただろうか。これらのことは仲間に対する思いやりの問題であり、人間の生命を大切にすることをヒューマニズムの問題であり、思想の問題である。

私の属している宝塚登山では、私自身が手袋をつけずに確保中、火傷を負って以後、確保に手袋を着用することはもちろん、岩登りをやる前には必ず安全ベルトのテストをさせるなどで心がまえと整備に対する安全知識を身につけさせるようにしており（これも、岩登りの全般にわたるものとはなっていない）、他の会

の者にも口やかましく問題提起をしてきたが、こういった個人的な努力には限界があり、根本的には、運動全体が正しい知識と指導法を身につけ、それを組織的に実践すること以外に、解決方法はないと考える。すなわち、安全性に対する認識を個人の段階から会の段階へさらには運動全体のものにすることが、そしてそのことの組織的な実践こそが私たちの岩登り（登山）から事故をなくしてゆくための出発点となるであろう。

Ｔ君の事故は、その原因や問題点から明らかのように「正しい技術指導と基礎理論教育」ならびに「装備チェックの習慣化（義務づけ）」が行なわれておれば

防げた性格の事故であり、事故（遭難）対策としては事前に属するものである。

「正しい技術指導と基礎理論教育」と「装備チェック」をこれまでの断片的で中途半端な教え方・指導法にとってかわらせること、そして、岩登りを全面的かつ系統的に指導する制度をつくりあげることによって、Ｔ君の事故を私たちの運動に生かすことができる。それでは「正しい技術指導と基礎理論教育」はどういった内容をもつべきであろうか。私は次の二つに要約されると考える。

第一に、ザイルやカラビナについてと同様に「岩登りとは何か」「その心がまえは」等といったことを岩登りをやるのに不可欠なものとしてとらえること、そして、実際に岩にとりつく前にきっちり理解させること。

第二に岩登りといえば、即、「岩場へいって」といった安易な考え方、やり方ではなく、今すぐこのような誤った考え方、やり方をきっぱりすてざり、まず、屋内での学習、そして屋内での実習をへて、さらに岩場へいって、まず安全ベルトのテスト、脱出法といった基礎的な実習を終えてから、いわゆるフリークライミングにすすませるといった規律をもつこと。これらのことをあたりまえのこととして今後新しく入ってくる仲間、岩登りをこころざす仲間へ教えてゆくこと

ビッグホーンテント

冬仕様
大量出来上がり

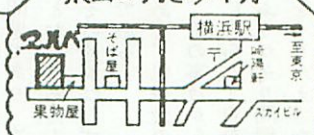
- 本体：通気性ナイロンツイル地
- フレーム：10mmφグラスファイバー
- 200(間) 200(奥) 135(高)cm
- フライシート改良型



現在市販されている小さく、張るとタルミフライシートでは風雨には効果がありません。
当店の改良型は、大きく、タルミも出ず、しかも軽いので、このテントをオールシーズン用として使うのに最適なフライシートです。

山とスキーの専門店

東口より徒歩7分



内張、フライ付価格 ¥29,800

211 スポーツ

横浜市西区平沼1-33-2

045-323-0559

によって、私たちの岩登りの安全性は高められてゆくであろう。

以下、具体的に「岩登りテキスト」(案)に即して説明を加えてみる。

(案)は、屋内学習、屋内実習、屋外実習の三つの部分からなり、それぞれの項目は次のようなものである。

■屋内学習

- 1 岩登りの意義・目的と心がまえ
 - 2 用具と服装(装備)
 - 3 岩の形状と名称(スライド使用)
 - 4 用語
 - 5 パーティの編成と登攀順序
 - 6 確保と基礎理論
 - 7 スライドでみる基礎技術
- ### ■屋内実習
- 1 装備の携行法
 - 2 ザイルの結び方、まき方
 - 3 確保の姿勢と方法
 - 4 体力測定とトレーニング方法
- ### ■屋外実習
- △はじめて岩登りを行なう人たちに▽
- 1 準備体操
 - 2 心がまえの復唱
 - 3 装備チェック
 - 4 安全ベルトのテスト
 - 5 脱出法の基礎
 - 6 確保訓練
 - 7 ホールドの使い方
 - 8 トラバース

- 9 懸垂下降
- 10 フェイスでの登下降、確保、ザイルさばきの同時訓練

△通常訓練に入る前に必ず行なうべきこと▽

- 1 準備体操
- 2 心がまえの復唱
- 3 装備チェック

屋内学習では正しい岩登りの基礎知識を身につけることを目指す。①登山の中での岩登りの位置づけと、岩登りの意義・目的・心がまえを明らかにする。②すでにふれたがヘルメット・安全ベルトをはじめとする装備について、生命と身体を保護するといった本来の目的にふさわしい材質・構造・使用法を明らかにする。③岩の形状、名称、岩登りの用語について、スライドを使用しながら教える。④アンザレインの意味を明らかにし

どのようにパーティとして登るかを理解させる。⑤確保の基礎理論について正しい理解をもたせる。装備の学習は、料理教室のように四～六人を一組として、講師が使う教材と同じものを組ごとに用意する等の、効果的な方法をとる。適宜ベーパーテスト等を実施し、理解度を高めるようにする。この屋内学習には、約一〇時間程度をあて、講義と討論といった形ですすめる。

屋内実習 屋内学習の延長として岩場にとりつく前に実際に経験して、身につけておくべきものとして、装備の携行法、ザイルの結び方、まき方ならびに確保の姿勢と方法を体育館等にて行なう。約六時間程度。

屋外実習 どんなスポーツでも、それを行なう前に準備体操をやることはあたり前のことであるが、岩登りは、このあたり前のことすらやられないことが多い。また、やる場合でも、ラジオ体操第一とか第二をただ何となくやっているといったことがないだろうか。形だけではなく、やはり目的になつたものを工夫して行なわねばならない。

次に登山は安全第一でなければならぬとする私たちの「立場」「考え」を岩登りに即して、具体化した「心がまえ」を全員が声を出して復唱し、常に安全登山に対する自覚を新たにす。こういふことは古くさい、軍国主義的なものと感じられるむきもあるが、形ではなく、自覚的なものとしてつくりあげてゆきたいものである。

そして、ザックから装備を出し、身につけるにあたっては、装備チェックを相互に行ないあうことを慣例化する。ここまでのことは岩登りを行なうときは必ず励行するものとする。

さらに、はじめて岩登りを行なう人たちにに対しては実際にぶらさがったり、お

ちたりして安全ベルトの機能、性能を確かめるテストを行なわせ、同時に、ブルジョック法による脱出訓練を行なわせる。次に屋内実習をもとに、確保を実際に即して、いささかのあいまいさも排除して行なわせる。このあとホルドの使用

一方、トラバース、懸垂下降をやらせ、一定の総合練習としてフェイスにおいてツルベ式の登下降、確保、ザイルさばきの同時訓練をさせ、それらの後にはじめて、形状に応じた登攀と下降を許可する。

兵庫では、岩屋のロックガーデンにおいて形状別のフリークライミングの課題を設定し、反復練習にあたらせるとともに、RCCの先達が素手で攀じ登った「ゲートロック」から「若小屋」までの岩々を一日で余裕をもって登りきる事ができるようにした人を、一応フリークライミングの修了者とみなすとの考えをもっている。

各地方連盟においても、近隣のゲレンデにおいて、以上のような立場からフリークライミングの課題を設定し、岩登りをごころざす登山の仲間がその課題のマスターをめざして訓練にはげめるようにしていただきたいと考える次第である。

この屋外実習には、形状に応じた登下降を行なうまで約五〇日をあてる。

(つづく)

(兵庫県勤労者山岳連盟理事長)

2 遭難対策の一歩の前進をめざして

昨年度は、玉井教育部長（当時）の事故ののち、各会指導部長、遭難責任者会議、遭難討論集会等を数多く持ち、私たちの運動の中心である山行活動において、事故が私たちに及ぼす影響をい
ろんな角度から討論し、「なぜ、山で事故を起こしてはならないのか」「山での事故はさげられないのか」
を一定限度明らかにし、山行の準備と内容の重要性、山行終了後の成果と教訓を明らかにし、後
に引きつぐことの重要性を確認しました。

今年度は、それらの討論のうえに立って具体的ななてたとしてこれまで以上に、こまかく、冬、春、夏登山
バスの各会連絡会、反省会を持ち、計画書、報告書をあたりまえのこととして期限までに提出させるよ
うにしてみました。その結果、かなりの会での改善が見つけられるまでになりました。しかし、こゝ一
部でまだ旧態依然の会もあり、会指導部の姿勢の問題として必要な指導をしていく必要があります。
連絡会、反省会では、山行の安全のためのチェックに重点をおき、装備の不備の指摘、メン
バーや山行ルート、日程の変更さらには山行中止等の勧告を必要に応じて行なってきました。

今後は、ソ連・アルペン・スズメ連盟の入山時体力評価基準を参考にした基準を山行チェックの
重要な項目として運用します。このような数多くの目的、意図的な連絡会や反省会の開催
といった、活動は地味ではあるが非常に重要な活動であり、他に例をみない兵庫独自のものとし
て今後さらに充実させていく必要があります。また、遭難委員会の果たすべき役割の重要性から遭
難委員会の中に、事務局を設置、日常業務の処理にあたらせるとともに、高度な判断を必要とさ
れる計画等に対し迅速、的確に対処するため、若干名の遭難委員を新しく配置する等、また、例
年どおり救急法講習会や搬出技術講習会を開催するとともに、日赤や全国連盟主催の各種救
急、搬出講習会へ積極的に参加し、多くの有資格者、経験者の養成をはかります。さらに、ことしは
アマチュア無線の講習会を企画、資格の取得を検討します。

	形態	対象・資格	内 容		期間 時間
各 会	新入会員のつどい	新入会員	入会のしおり、趣意書規約、山行規定		2~3H
	初級登山教室 (会員向)	新入会員のつどいを受けたもの	(理) 趣意書(仮案) 登山の心得、トレーニング、装備、燃料、計測、乗書、気象、記録のとり方、地形と地図(概念図・ルート図) 山の危険、山での食料、山での動植物	(技) テントの張り方 バッキング、收束のしかた、コンロの扱い方、歩き方、ヒモの結び方、岩のぼり3英支持	3か月 (年2回)
	初級登山教室 (一般登山愛好者)	一般登山愛好者	(理)	(技)	1か月
県 連	初級 岩のぼり教室	各会の初級登山教室を修了したもので、受講を希望するもの	(理) 岩登りリスト案について、岩登り意義、心がけ、目的、体力測定とトレーニング法、岩登り用語、岩の名称、形状、用具と服装、確保の基礎理論、岩登り基礎技術、装備の携行法、カールの歩き方、確保の姿勢と方法	(技) 安全ベルトのテスト、脱出法、確保の実際、フック法、懸垂下降、登下降、トラバース、ギヤール操作、3英支持、ハーネス、フリークライミング	2か月 (年6回)
	登山学校	希望者	(理) 登山とは何か、その理念と目的 ・近代における体育とスポーツ ・国民スポーツ運動の歴史	・登山の歴史 ・スポーツと法律	1か月 (年2回)
	中級 登山学校	初級岩のぼり教室及び登山学校を修了し、受講を希望するもの	(理) トレーニング、リマ論、運営論、搬出法、救急法、岩登り技術、沢登り技術、スキー技術	(技) 沢(大峰)上り古へ木谷、上野へ神倉、相川へ舟川(熊野川)、相野谷へ立間谷、岩(不動岩)全山(新岩)全山、氷雪技術(御在所、富士山、御岳)、積雪期、大峰、奥駈、別宮、マサヒ、米山、戸倉、終了山行 3000M B.C.	6か月 (年1回)
	リタ学校	別に定める	(理) (検討中)	(技) (検討中)	
	リタ学校 練成合宿	別に定める	(検討中)		

入山前体力評価基準

種 目	ソ連スポーツマスター 一級アルピニスト	県連基準
鉄棒の県垂	12~14回	12回
綱 登 り	8回	未
腕 立 て 伏 せ	25回	30回
ひざの屈伸 (片足づつ)	計25回	各15回
足を固定しての後屈	50回	50回
100メートル走	14秒	14秒
1500メートル走	5分	5分20秒
5000メートル走	18分30秒	20分
スキーノルデック (六甲全山縦走 54 km)	2級	(男) 8時間以下 (女) 9時間30分以内

2. 遭難対策の一層の前進をめざして

故柳楽峰子さんを前穂北尾根4峰で失なつて以来、前総会までに仲間の生命と身体を代償に私たちが明らかにしてきた仲間を良く知り、あいまいさをなくす、から日常トレーニングにうらうちされた山行を、という連の教訓のうえに事故を起こさない遭難対策をつくりあげることは私たち全体の責務であり、同時に神聖な義務でもあります。

総会以後、入山前体が評価基準の意義とそのクリアをめざして日常トレーニングの重要性がようやく県連全体に理解されかけてきました。また、日常トレーニングは大きな合宿前の一時期といった断片的なものに大部分の人たちがとどまっているようです。しかしほんの一部ではありますが、日常トレーニングを励行している仲間も生まれています。いまでもなく、安全な登山の前提は堅強な体力であり、これを培うのは地道な日常トレーニングしかありません。岩登りや高度な山行をこころざす人は会のメンバーを対象とするのではなく、自分の登ろうとするルートや山を対象にトレーニングの質と量をかえる必要があります。各会におけるこれらの人たちの自覚的な行動(トレーニング)は必ず会員に浸透していくでしょう。そういった意味で、各会の山行面の中心にいる人たちの責任は重いのです。もち論、山は日常トレーニングさえやっておけば良いといったものではないことはいらまでもありません。気象の知識、医療の知識をはじめ、それを知らなかつたためとりがえしのつかないことになったという事例は沢山あります。私たちは今、そういったことを明らかにしたうえで、日常トレーニングの問題に到達したことを肝に命じなければなりません。

現在、県連の中にある一つの傾向については是非、注意を喚起しなければならない問題があります。それは、トレーニングが目的とする山行に合ふものであるかどうかの問題です。昨年末のみろと崩山の保聖岩における墜落事故はそのわかりやすい事例です。南アルプスの主稜縦走のトレーニングに保聖岩での岩登りのトレーニングは妥当なものだったでしょうか。又同じく昨年末の正月に穂北縦走をめざしていた甲山崩山の茅屋ロックガーデン・地獄谷「中村フェース」での20キロの荷物を背負つての岩登り中の事故もわかりです。さらに、ことし5月に婦人部山行として取組まれた北鎌尾根も基礎的な岩登りの技術をもっておればあとは体力がポイントとなるルートですが、「北鎌尾根は困難」という感覚的な認識はえてしてトレーニングを北鎌尾根に本当に必要な体力の強化という方向へではなく、すでに「十分にもちあわせている」岩登りの方へむかわれがちなのです。こういった傾向はそれが事故に至ったかどうかは別にして、又、あらわれ方はさまざまですが、大なり、小なり各会にみられることです。これらの事例は私たちに山行管理能力のすみやかなる向上を求めているのですが、いまでもなく、登山は総合的な知識を必要とするものであり、一朝一夕にはゆきません。

＝山行活動の強化充実のために＝

倉内 司 郎

現在、兵庫県労働者山岳連盟では日曜ごとのハイキング例会から、スキーや冬のきびしい山行まで多種多様な山行が企画され実施されていますが、どの会も共通した悩みにぶつかっています。

それは、① 山行面で会員が順調に育たない問題（正確には育てえない問題）であり、② その原因でもある例会や合宿が単発のものや、その場しのぎのものだったという、年間を通じて山行企画に十分なりのない問題であり、さらには3年・5年といった先の見通しをもった山行活動を、展開できていないといった問題です。山行活動は山岳会の生命であり、この山行活動の弱さ、停滞は山岳会の「生命とり」もなりかねません。会員や私達の回りにいる登山愛好者の登山要求に応えられる山行活動を、どう創っていくかは、私達にとっても非常に重要な問題であり、早急に現状から抜け出し、山行活動を抜本的に改善、強化することは会員拡大にとっても不可欠の条件です。そしてこのことは山行活動、即ち、会が今以上停滞しない前に、そして、仲間の生命をなくしたり高価な犠牲を払う前にやりとげねばならない課題です。

見通しをもった山行企画、確実にステップバイステップで会員を高められる山行企画をつくりあげ実践するには、山行責任者を含む、会の中心部分が考え方を大胆に改め、会活動全体を改善することなしにはむずかしい問題です。そして、十分な調査、研究、討論のうえに基本方針を決め、いったん決めたら、力をあわせ全力でやりとげなければなりません。そこで冬山を例にとり、兵庫の実情とその改善の方法を考えてみたいと思います。

◎各会で冬山はどのように決定されているか

これまでから、例えば上高地から西穂高や八ヶ岳の一般ルートのように、ベテランから初めての人がいっしょに行けるところが選ばれています。なぜそうなのかというと、「労山は山へ行きたい人に責任をもたなあかん」、「山行要求に応えなあかん」だから初めての人でもつれていく、そして冬山は危険だからしっかりしたものがついていく必要がある、かといってそちらの方へベテランや中堅をさく余裕はない。やむなくベテランから新人までの混成部隊となり、それにあった山城、ルート、形式ということで西穂

高や、八ヶ岳が選ばれているのである。

かくて、毎年入会してくる新入会員を“大切”にするが故に毎年新人からベテランまでの参加できる奇妙な合宿がいつはてるともなく続くのである。

——「労山は山へ行きたい人に責任をもたなあかん」、「山行要求に応えなあかん」の名目のもとにすべての会員の山行要求に応えようと考えるあまり、会と運動を発展させる保証となる会全体の力量や中堅会員の要求は何かしなければと思いつつ、いつまでもそこまで手がまわらず、ひきのばされていくのである。といっても、何もひきのばしたくてひきのばしているのではない。それどころか、各会の中心部分は熱心に会全体の力量、そして中堅会員の力量を高めたいと願っているのである。

◎それではなぜこのような自縛自縛の状態となるのか

① ほんとうに初めての人でも正月合宿につれていくべきなのか。ベテラン、中堅会員のレベルアップの機会を潰してまでも。② 「労山は山へ行きたい人に責任をもたなあかん」、「山行要求に応えなあかん」に落とし穴はないか。実は大きな落とし穴があるのである。

◎どのように改めるか

休暇の面でめくまれた年末年始の時から、総合力の求められる山行を計画、実行するのに適しており、このような時にこそ、中堅のレベルアップや一年間の成果を試す意欲的な山行を行ない、会全体の力量を蓄積すべきである。このことがひいては次に育ってくる仲間がスムーズにステップバイステップで成長できる山岳会としての条件をつくるのである。

冬山の第一歩は近郊の山の雪のハイキングからでも決して回り道ではない。反対にこの中で、ワカン、アイゼンを含めた雪の歩行技術を徹底的に身につけるべきである。（関西でいえば、比良、伊吹、霊仙、＜氷ノ山＞など）雪のハイキングで雪に慣れたところで、3月の春分の日の頃に氷ノ山ぐらゐを舞台に、できるだけ多くの会員が参加できる定着合宿を行なう。三役以下、会の中心部分がすべて参加するぐらゐの重要な合宿として位置づけ、たっぷり時間をとって幕営、生活技術、雪割、イグルー、スキー、ザイルワーク、急雪壁の登下降などあらゆることを体験させ、雪に慣れ、親しませ

る。3月の氷ノ山は、天候も比較のおちつき絶好の舞台を提供してくれるだろう。私自身、3月の氷ノ山の思い出はつきることがない。そして次はゴールデンウィークである。このときには北アルプス等の人のあまり入っていない所でベースキャンプを設営し、尾根や沢を登らせ、3月に学んだものを実際に試させる。登山者でござつたがえず個派などは間違っても選ばないことである。自立心を身につける場としては適切なところでないことだけは確かだろう。

そして、夏には池ノ谷二俣か三ノ窓（小窓でも良いだろう）にベースキャンプを置いて剣尾根や八ツ峰、そして三ノ窓周辺で訓練をしたいものである。三ノ窓周辺でなくとも、夏山旅行を脱皮して、夏の固い雪渓の上で雪上技術の練習時間を是非もちたいものである。

そして、11月下旬には富士山や御岳で雪上技術の講習（県連主催）を受ける。さらに、日常的には入山前、体力評価基準のクリアーをめざすトレーニングがやられているはずである。

もし、こういったことが会指導部の強固な決意で2～3年続けられるならば、「若手が育たない」というのはザレごととなるだろう。そして冬山の計画・立案も、これまでとは自ずと異なったものとなるだろうし、山城、ルート、形式にも変化がでてくることになるだろう。

さらには県連主催の「初級岩登り教室」（2月～4月、9月～11月の年2回）や夏の三ノ窓合同合宿（毎年8月中旬）を年間計画の中に組み入れてゆけばより良いものにしていけるだろう。

以上、自分の経験をもとに山行活動強化のあり方について私見を述べてみた。言い足りないところ、言葉足らずのところがあると思いますが、全国の仲間の御意見、御批判をいただければ幸いです。

（日本勤労者山岳連盟理事）

（登山時報No.42より）
（1978.8.1）



≡≡再び事故をおこさないために≡≡

(教育部長代行) 倉内司郎

最近 岩登りについて注意を要すると思われることが一部の会で起っているので、あらためて各会のみなさんに注意をうながし、事故のない安全な登山をめざしてもらいたいと思います。

さる7月10日 蓬萊峡小屏風岩右ルートにおいて 甲山労山の会員が岩登り中、岩から落ち、確保をしていたパートナーが手掌に相当の擦過傷を負ったとの報告を聞いた。

又、山歩溪山岳会の機関紙「山歩溪 No.25 (7月号)」に百丈岩での岩登りのため、前夜から入った9人(うち女性2人)のメンバーが宿泊地へ着くなり酒宴を開いたことが何のためらいもない筆致でかかれているのを目にした。

「岩登リテキスト」(案)には 確保には 単手(できるだけ不鞆のもの)を用いることとされているし、装備チェックも義務づけられている。又、翌日岩登りをするのに、前夜遅くまで酒を飲むことの是非については、他の地方連盟ならいざ知らず、こと兵庫においては議論の余地のないはずである。

しかし、現実には、手袋さえつけずに岩登りがやられ、岩登りの前夜に酒盛りがやられているのである。これらは、たまたま私が見聞きしたもので、それ以外にも事故につながる恐れのある岩登りのイロハに類するミスが起っているかもしれない。

「岩登リテキスト」(案)がつけられすでに3年、どの会でもそれ以後に、多くの会員が入会してきている。各会の中心幹部が、これまで県連の少なくない仲間が事故の代償に払った犠牲を心に刻みつけているなら、新しく労山に入った仲間には「岩登リテキスト」(案)の根本精神や日常トレーニングの大切さについて教えることに手ぬきや手ぬかりはないはずである。どうだろうか。本当に自分たちの会にこのことでの手ぬきや手ぬかりはないだろうか。

私たちが運動の中で蓄積してきた一歩一歩の教訓を毎日の会活動のなかで生かさない限り、私たちの活動は賽の河原の石積みと同じくむなしいものとなるだろう。

聞くところによると 甲山労山の一人は、指導部の副部長で最近岩登りに強い関心をもち、このときのメンバーはこの事故以前にも個人的に岩登りに出かけていたとのことである。

又、山歩溪山岳会の方は、最近、清水芳山から転勤でこちらにきた会員を中心に、毎週のように岩登りがやられだしているが、そのほとんどが「個人山行」ということで無届けで行なわれているとのことである。(静岡では個人山行が盛んとのこと)、この会員の場合には、静岡と兵庫のちがいをよく説明し、「郷に入れば郷に従え」のたとえのとおり、兵庫の人間になってもらうこと、いいかえれば、自分の所属する会の山行規定や活動方針等を遵守させることに会の中心部分は労をおしむべきではない。

会員の岩登りをやりたいという意欲は山岳会にとって歓迎すべきものであり、実際に岩登りが毎週でもやられること自体、岩登りをやりたいから一歩一歩進んでいけるという会さである中では恵まれた会といえる。

こういった有利な条件をいかして、岩登りをやりたい人が、どんどんその要求を実現できるように、そして、そのことが着実に会全体のレベルアップにつながってゆくような、そして、その底根には、これまで県連が高価な代償を払って得た一歩一歩の貴重な教訓がしっかりとえられている会活動、山行活動をつくりあげるために、徹底的に討議を行ない、きっちりと方針をすりあわせるべきである。県連はこういったことで相談をうけるならば、共に考えるものであり、労をおしむものではありません。

甲山、山歩溪以外の会も、自分とこの会のことではないと傍観することなく「他山の石」として、自分たちの会をみなおす機会としてほしいものである。

一歩一歩の誤ちをおいまいに放置することなく、全体の討議の組上にあけ、正しい解決案をみちびきだすことは二度と同じ誤ちをくりかえさないために、誤ちをエスカレートさせないために大切なことです。

これを書いたあとの7月23日、県連三處合同合宿の不動岩でのロープワークで生徒の一人が人工登攀の練習中、アスミを木にかけたところ、アスミ(自分でつくったもの)の末端の結び目がホロッとほどけるというハプニングが起ったのである。「岩登リテキスト」(案)を書くきっかけとなつたのか、芦屋芳山の中級登山学校での宙づりからの脱出訓練中、ロープアセンドのテクス結びがほどけて起った墜落事故だったことを思うとき、このハプニングは何かを暗示しているようである。

「ころはぬさきの杖」「事故がおきる前の用心」こそが大切なのであり、今一度、各会の中心部分、岩登りに関心のある人は是非「岩登リテキスト」(案)をこつこつと読んで読みなおし、自覚を新たにしたいと願うものである。(なはいは県連)にあります。一部50円)

本来楽しい岩登り(登山)をくればれも悲しみで塗りつぶすことのないように。

2. 事故のない安全な登山は、私たち登山を志すものすべての願いですが、そのためには、故柳楽峰子さんを前穂川峰で失って以後、仲間の生命と身体の一部を犠牲にして得た貴重な教訓を常に念頭におき山行を考えねばなりません。

- ① 事故が起ってからいくら金と力をつぎ込んで失ったものは戻ってこない。金や力は事故をおこさないためにこそ使わなければならない。
- ② 仲間をよく知り、あいまいさをなくし、なれあいを排すこと。
- ③ ホエーブスの取扱いをはじめ、気象医療等山行に必要な知識をしっかりと身につけて。
- ④ ランニングを中心とした日常トレーニングによって常に体力を一定水準以上に維持しておくこと。
- ⑤ 綿密な調査、研究、検討のうえに山行(パーティ編成を含む)を計画し、綿密な準備を行なうこと。
- ⑥ トレーニングの量と質を目的とする山行に合ったものにする。

事務連絡 NO.100 (1979.10.18)

☒ 正月合宿を実り多いものとするために ただちに取り組みを!

遭難対策委員会

■ 計画を充分練りあげて

日ごと秋も深まりつつありますが、各会では正月山行はもう決定しているでしょうか。単にどこへ行くかという事ではなく、何を目標において今から本番までの準備を進めるかという、なかみ、が大切です。一年の山行の総仕上げとして正月合宿を考えている会、冬の山をじっくり味わおう、又雪上技術のトレーニングの場として考えているところなど、それぞれの会によって違いはあると思いますが、いずれにせよ、年間山行の一つの節として成功させるために充分計画を練り上げてほしいものです。

登山はいつの場合でも登る山にふさわしい体力、精神力、技術を身につけて余裕をもって臨まなければなりません、とりわけ冬の山は最

も厳しさが要求されています。3000m級の冬の稜線の縦走は登山を始めた一年生には、あまりにも過酷です。私達の登山では裏付けのない飛躍は許されません。冬山は「何とかなるやろう」「天気がよかったら」という姿勢で入山する様な甘いものではありません。

1976年3月のロバの耳での遭難や、1977年正月、摩耶山女会の中岳でのピバークによる全員凍傷という事故など、私達県連盟はあまりにも多くの仲間の生命と肉体の代償を払ってきています。今一度、これらの遭難を思い起こして手抜かりのない様万全の準備を進めてほしいものです。

■ 万全の準備のうえに ■

冬の山は厳しい気象条件をそなえ、それが無雪期にはない危険性となって横たわっています。冬山の気象、雪崩、凍傷についての知識、濡れから身体と衣服を守る知恵、そして事故対策等を学習によって身につけておく事が大切です。昨年の冬山連絡会で指適された装備についてい

(1) 手袋の数

計画書を見ると多くのパーティが2双しか用意していません。2双しかない1双を非常用として最後までとっておけば、もう1双を使用すればそれで終わりです。最低で3双。岩稜や岩壁登攀では4双以上用意すべきです。たまたまりーダーやベテランが「俺はいつも1双で充分だ」としてもそれをパーティ全体に強要すべきではありません。弱いもの、経験の浅い者に合わせて用意して下さい。

(2) ホエーブス、コンロ

3人パーティで2台のコンロを用意している会があります。一体何に使用するのか。これは冬山における食料計画の問題でもあります。3~4人パーティでは事前に点検し、必要な部品を持参して一台で充分といえます。

(3) サイル

11呎の携行がありますか、実際にはザイルは使用しない場合が多く、9呎の方が重量の点からもベストではないか。

(4) ローソク

少なすぎないように

(5) 電池

キャブライト用の替電池は縦走パーティは2組以上必要

(6) 防水対策

「靴」については「スノーシール」「スノーアウト」などの防水液が効果があります。衣服などの縫製品には高価だがゴアテックスを使用したヤッケやシェラフカバー等の製品を思い切って取り入れるべきではないか。抜群の効果を発揮します。

(7) アイゼンバンド

カジタのアイゼンバンドなども普及すべきではないか。ヒールリングのないアイゼンを使用し、屏風岩で落とした例もあります。

(8) ガソリン注入時

家庭用計量カップを使用すると量がよくわかる。口先がよいので失敗がふせげます。

この様に装備ひとつをとっても「冬山を安全にかつ実り多いものにする」ために、考えれば研究、改善すべき点は数多くあります。まだまだどうしても会の枠内でしか考えない惰性に流された冬山計画の域から脱しきれていないのが昨年の実態でした。私達のレベルにおいて「これでよし」とするならば、会の山行の責任者の姿勢を問題にしなければなりません。さらに食糧についても検討を加え、万全の準備の上に本番を迎えてほしいものです。

又、入山予定者全員がもれなく、できるだけ有利な保険に入る様早いうちに手続きをしておきましょう。

■ 日常トレーニングの励行を

厳しさにうち勝つ強靱な体力こそが、冬の山へ向かう第一の必須条件です。深い雪の登降、着ぶくれ、しかも重荷を背負ってのそして強風にあおられながらの見通しの悪い行動は無雪期のそれにくらべて格段の体力を要求されるものです。さらにアイゼン、ワカンをつけての行動であればなおの事です。すでに県連でも日常トレーニングが定着しつつありますが、正月に入山する者はすべて一人の例外もなく入山前体力評価基準を目指しての日常トレーニングを励行してほしいものです。そして今年は全員が体力測定をし、すべての基準をクリアーできる仲間が数多く輩出されることを期待しています。

正月の山行を立案、検討する段階で、会の山行活動のあり方に今一度思いをめぐらせて下さい。県連盟としては各会の山行活動の強化のためには共に考える事に労をおしむものではありません。

正月までの約3ヵ月間、日常トレーニングに励み、冬山に特有の現象と技術、知識を学習し、チームワークを固め、一人の怪我人もなく、実り多い成果をあげ、無事に正月合宿が終えられる様、すべての会、そして入山予定者は自覚をあらたに正月合宿にむけての準備に取りかかろう。

2、山行活動の強化と

事故防止活動の前進のために

1、第15回定期総会以後下記の活動を行なってきました。(略)

2、事故防止活動について

この一年も死亡事故や障害の残るような大事故はありませんでしたが、小さな事故や事故につながる要因は少なからず指摘されています。又、同じような事故が繰り返されていることをみても、これまでの事故から教訓を学んでいないことであり、他の会の仲間の事故が自分の事として受けとめられていないことを意味しています。

この一年間の特徴は、

第一に各会における山行に対する研究、意欲が低下し、県連の提起している「山行活動の強化について」の方針から大きくはずれている実態が生れていることです。これは、ここ2年ほどの山行をみても明白であり、相変わらず他人志向の山域と旧態依然のポッカトレーニングを中心とした会も見うけられます。「みんな一諸に雪山へ」といった誤まった取組みが、またぞろ頭をもたげてきつつあります。

第二に日常トレーニングが非常に弱いということです。日常トレーニングなくして、内容のある山行を追求することは不可能です。初心者の力量にあわせてリーダークラスは自らを鍛えることを放棄し、結局全体としては「お茶を濁す」ことにしかならない「行って良かった」の総括に終わっている会が多く見うけられることは非常に残念なことです。県連の設定している入山前体力評価基準にもとづく体力測定についても、ほとんど実施されなくなっています。

第3に連絡会や反省会で決められた事が確実に守られていないことです。計画案の提出、緊急時の連絡体制表の提出、留守本部への下山報告、山行のまとめなどは期限通り守られなければなりません。まして連絡会、反省会への無断欠席は論外です。

今年度は、次の点を重点に活動します。

- 1、各合宿前の連絡会における計画検討と山域情報の交換。冬・春山など積雪期登山については体力測定、トレーニング、ミーティング参加状況を報告させチェックする。
- 2、合宿ごとの緊急時出勤要員を恒常的に登録制とし、合宿ごとにチェックしてゆく。
- 3、山岳保険についての研究。
- 4、教育部と協力して入山前体力評価基準の考え方にもとづく各段階のトレーニング指標、基準を検討し設定する。
- 5、高層天気図や救急法・搬出法の講習会の実施をする。
- 6、事故報告書の提出の徹底と事故分析の上、教訓を各会へ普及する。
- 7、第14回総会決定で確認された山行の教訓を学び普及させてゆく。
 - ① 事故が起こってからいくら金と力をつぎ込んでも失ったものは戻ってこない。金や力は事故を起こさないためにこそ使われなければならない。
 - ② 仲間をよく知り、あいまいさをなくし、馴れあいを排すこと。
 - ③ ホエーブスの取扱いをはじめ、気象、医療等山行に必要な知識をしっかりと身につけること。
 - ④ ランニングを中心とした日常トレーニングによって常に体力を一定水準以上に維持しておくこと。
 - ⑤ 綿密な調査、研究、検討のうえに山行(パーティ編成を含む)を計画し、綿密な準備を行なうこと。
 - ⑥ トレーニングの量と質を目的とする山行にあったものにする。

1982. 3. 22

各会会長 殿
事務局長

兵庫県勤労者山岳連盟

会長 大 学 肇
理事長 倉 内 司 郎

山行活動の自粛ならびに各会における
今回の事故問題の話し合いについて

(要 請)

今回の八ヶ岳遭難事故に鑑み、今後の各会の山行活動については、例え山行、自主(個人)山行を問わず、慎重に行なうとともに、特に、岩登り、沢登りならびに本格的な山行活動については当分の間、自粛されるよう要請いたします。

このことは、まず何れも11名もの大量の遭難死をおこした山岳会、連盟としての責任を自覚し、自ら謹慎するためであり、さらには、今回の遭難と11名の仲間死を自らのものとして受取の事故の原因や日常の会活動の問題点を全会員で、ハラをわって繰返し話し合うことで、その原因や問題点を明らかにしてゆくことにより、このあまりにも大きい犠牲を乗り越え、次の確固たる一歩を踏み出す確信をつかんでもらうためです。

もちろん、この間も、芦台川を守る運動や、子供のための盲啞学校をはじめとする登山者の社会的使命や一般の登山愛好者、自然に親しみたいと願う人たちの要求に応える活動をいっさかもあつとかにすべしにはゆきません。反対に、このような時こそうちひしがれたり、事故処理に埋没するのではなく全会員が一致団結して、自分たちの果たさなければならない役割りや責任をしっかりと果してゆく中にこそ、私たちの運動と組織が今回の事故をも含めて、社会から理解され認められる道があるのです。

悲しみを超えることなく、会長、副会長、事務局長のもとにしっかりと団結して、災いを福に転じさせる私たちのがんばりこそが七くだった11名の仲間の霊に応える道であり、遺族の方々への何れへのげましも存じたい。

仲間のみなさんの奮闘を願ってやみません。

七き11名の仲間には心からの哀悼をさせていただきます。安かにおやみ下さい。合掌。

2、山行活動の強化と事故防止 活動の前進のために

1、第17回定期総会以後下記の活動を行なってきました

— 略 —

2、山行活動の強化について

ついにとりかえしのつかない大きな事故を起してしまいました。事故後、多くの会から今回のみならず、みなと労山と同じ事故が自分の会で起っても不思議でないそれぞれの会の現状が出されました。みなと労山の今回の事故は計画書さえも提出されていなかったという県連山行規程への違反に特徴的にあらわれているように、これまで兵庫県連が4人の生命と少なくない仲間の身体の一部の損傷という高い犠牲のうえに明らかにしてきた教訓がほとんど活かされていなかったというやせなさそしてむなしさを感じさせる事故でした。そして、さらに重要なことは、事故後多くの会から出された会の状況です。みなと労山と同じような事故が自分の会で起っても不思議でない状況があるということは、みなと労山を含めて、それらの会が県連の方針、総会の決定さらには仲間の犠牲とその教訓を正しく受けとめ、会運営と山行活動に活かしていなかったということにつきるのであり、そのことはもっと端的に言うならば会指導部に会と会員に対する責任感さらには、生命を大切に考える考え方が欠けていたといわざるを得ません。「『入山前体力評価』の考え方と日常トレーニングを土台においた『山行活動の強化の方針』が各会でとくに山行指導部において正しく継承されていない」ことが山行活動の低調さの原因と前総会で指摘されましたが、今回の事故は、そのことが単に山行活動の低調さといったことにとどまることなく、仲間の生命をも犠牲にせざるを得ないものとなることをあまりにも大きな代償とひきかえに私たちに警告してくれました。このあまりにも大きく悲惨な今回の事故の教訓を学べないとしたら、私たちの活動に活かさないとしたら、労山の会員としての資格を自ら放棄したと言わざるを得ません。

事故以後各会において会活動、山行活動の総点検が行なわれていますが、県連としても各会山行指導担当者会議を定期化し各会の山行指導担当責任者の自覚と理解を高めつつ、仲間の高い犠牲のうえにこれまで明らかにされてきた、入山前体力評価の考え方と日常トレーニングそして、それらに裏うちされた「山行活動強化の方針」の正しい理解と各会での具体化についての指導にあたります。又、各会は、県連で行なわれる各種の教室、講習会、学習会や合宿等へ会員を積極的に参加させ会の山行活動の強化に役立たせることにもっと意欲的、計画的でなければなりません。

3、事故防止活動について

1977年5月3日に鹿島槍ヶ岳、赤岩尾根での故上田孝男さん（尼崎労山）の事故以後、約5年間死亡事故はなかったものの、1977年11月、保曇岩での高見正幸さん（神戸みなと労山）の転落、1979年5月、明神岳での谷口千秋さん（芦屋労山）の滑落による重傷事故をはじめ、小さな事故や事故につながる要因は少なくありませんでした。また、山行連絡会等で指適したにもかかわらずホエーブスの取扱ミスや、小さなスリップなどの同じような事故が繰り返されていました。「各会における山行活動を見ると、いつ事故が起こっても不思議ではないという状況にある」と各会の山行指導責任者の反省を求めていましたが、残念ながら今回、11名もの多くの仲間を一瞬にして失うという大遭難をひ

き起こし、事故防止への有効な対策を講じえなかったことに悔恨を覚えるものです。事故以後、「山行活動の自粛と事故問題についての話し合い」が殆んどの会で行われ、山行活動の総点検によって抽出された問題点を克服する手立てが講じられつつあります。

私たちはすでに4名の仲間を失ない、数名を身体障害者にするという悲しい苦い経験をし、2度と事故を繰り返してはならないとこれらの事故から多くの教訓を得てきました。しかし、今回の事故を鑑みるにこれらの事故から得た「山行活動の強化についての方針」に集大成された教訓が各会の山行活動に活かされていない、あるいは再びそこから逸脱してきていた結果であることを認めないわけにはゆきません。労山は「事故はあってはならない、起こしてはならない」ことを事故防止活動の原点としています。これは①仲間と自分の「命と身体」を大切にするヒューマニズムの思想であり②登山は生活文化を豊かにするためにこそあり、国民すべての権利として保障されるべきもので、そのために家族をはじめ職場、社会から理解され支持、共感を得る③労山は本来、登山行為以外に登山者として社会的使命を果たすことを自らに課しており、一般山岳会以上に山行活動が科学的、意識的に厳しく取組まれなければならない、ということの意味するものです。

基本的な教訓として

- ① 仲間をよく知りあい、曖昧さをなくすこと。
- ② 山に登る時以上に、入山までの準備を万全に、そして山行終了後はきっちりと総括をする。
- ③ 「山行活動の強化の方針」に示されたとおり、冬山をめざすためにはステップをふんだ計画を立案実行する。
- ④ 登山の厳しさ（目的とする山）に相応したトレーニングを自らに課し、文字どおり日常トレーニングで体力の増強、維持につとめる。に集約されます。

多くの仲間は今回の事故ではじめて遭難について、仲間の死について、労山についてを考え、自らの問題としてとらえることができました。2度と再びこのような事故をくりかえさないために真剣に山行活動を考え強化しなければなりません。しかし、今にいたるも11名もの死の代償に應えるために自らの山行活動を謙虚にふりかえることが出来ない仲間がいることを残念に思うものです。このような態度は労山とは無縁なものであり、ただちに克服されなければなりません。

今回の八ヶ岳遭難の事故については現在、みなと労山で総括と報告書づくりがはじめられています。ここでは問題点についてのみ列記しておきます。

- 1、県連盟へ計画書が提出されていなかった。（山行規定の遵守）
- 2、山岳保険、捜索保険はリーダー以外全員加入していなかった。
- 3、県連盟の「山行活動の強化の方針」から逸脱していた。

（イ）終了山行としてなぜ八ヶ岳が決定されたのか（雪山を一度も経験していない者が1名参加していた。）

（ロ）終了山行の体制に弱さがあった。又、リーダー講師及び同行者らの役割が明確にされていない。

（ハ）入山前体力評価基準にちとつく体力測定が実施されなかったし、日常トレーニングも実施されていなかった。

重要なのはこれらの問題はあまりにも当然のことであり、「なぜそれがなされなかったのか」であり、会運営そのものに大きな誤りがあったことが総括されなければなりません。

すべての会において2度と再び事故を起こさないために、仲間を大切にすると同時に、曖昧さや事故につながる要因と問題点を克服する具体的な手立てを明らかにし、確信をもって次の新たな一歩を踏み出せる時が、「山行自粛」が解かれる時であると考えております。一日も早くその日を迎えるために各会のみなさんの奮闘を願って止みません。

- 1、みなと労山で進めている「ハケ岳遭難」の総括を指導、援助し、その教訓をすべての会員のものとする。
- 2、兵庫におけるこれまでの主な事故事例とその教訓をまとめ全会員に学んでもらう。
- 3、県連の提起している「入山前体力評価の考え方」と日常トレーニングを土台においた「山行活動の強化について」の方針を各会の山行活動の基本にすえ、根づかせる。
- 4、当然のことではあるが兵庫県勤労者山岳連盟遭難対策規定と各会の山行規定にもとづき、2週間前に計画書を提出させ、チェックと必要な勧告を行う。山行終了後はすみやかに山行の総括を行い、「報告書」もしくは「山行のまとめ」を提出させる。
- 5、各合宿前の山行連絡会における計画検討と山域情報の交換を行う。岩登り、沢登り、積雪期登山については県連の「入山前体力評価基準」にもとづく体力測定を義務づけ、トレーニング、ミーティングの内容と参加状況についてもチェックする。
- 6、合宿後の山行反省会においては山行の総括、とりわけ事故及び事故につながる要因について明らかにし、教訓とする。
- 7、合宿時は連盟に留守本部をもうけ、各会の留守本部とも緊密な連絡をとりあう。最低必要な遭対器具の常備と調達体制をとっておく。
- 8、合宿ごとの緊急時出動要員を恒常的に登録制とし、合宿ごとにチェックを行う。
- 9、今回の「ハケ岳遭難」に鑑み、山行時の山岳保険、捜索保険への加入を義務づけ、万一の対処とする。全国連盟の遭対基金と合わせて、スポーツ安全協会傷害保険への加入を進める。
- 10、教育研究委員会と協力して入山前体力評価基準の考え方にもとづく各段階トレーニング指標、基準を検討、設定するとともに講習会を開催し普及をはかる。
- 11、装備に関する検討、研究を行いその成果を普及する。
- 12、高層天気図や救急法、搬出法の講習会を実施する。
- 13、事故報告書の提出を徹底させ、事故分析の上、教訓を各会に普及する。
- 14、第14回総会決定で確認されている山行の教訓を普及する。
 - ① 今回の「ハケ岳遭難」のように事故は莫大な金と時間と労力が費やされるが、亡くなった人は帰ってこないことを肝に銘じ、金と力と時間を事故を起こさないため、すなわち山行の万全な準備に費やされねばなりません。山行計画書の作成にあたっては手ぬかりがないかどうかを点検すること。
 - ② 仲間をよく知り、曖昧さをなくし、馴れあいを排すること。特に大切なことは、他会の教訓を謙虚に学ぶことです。
 - ③ リーダーになる人、冬山に行く人は天気図を書き読めること。ホエーブスの正しい取扱方、気象、医療等山行に必要な十分なる知識をつけておくこと。
 - ④ ランニングを中心とした日常トレーニングによって常に体力を一定水準以上に維持しておくこと。また各会ごとに集団でのトレーニングを実施し、個人別カードで記録をとり、相互に向上しあっていく。
 - ⑤ 綿密な調査、研究、検討のうえに山行（パーティ編成を含む）を計画し、周到な準備を行うこと。
 - ⑥ 県連や全国連盟が発行している山行、遭対活動に関する文章の整理、一般山岳図書、雑誌の文獻記事を含めて普及する。又、山行計画書及び報告書を整理し他会の分を含めて今後の参考に資する。
 - ⑦ トレーニングの量と質を目的とする山行にあったものにする。
 - ⑧ 市民ハイク、登山パスについては特に安全第一とし、山域、山地の形状、気象等から無理のないコースを設定し、いわゆる一般コース以上の難易度を求めてはならない。それ以上は入会させ、必要な教育訓練の上に行うこと。
 - ⑩ 岩登り、沢登り、積雪期登山をめざす者に対しては県連盟の初級岩登り教室、雪上技術講習会の受講がそのための最低の条件であることを自覚させ積極的な参加を求める。

山行活動の再開にあたって

遭難対策委員会

責任者 玉井進吾郎

3月21日の「みなと労山」の雪崩遭難以来、私たちは岩登り、沢登りと本格的な山行活動を自粛し、山行活動と会運営の総点検を行ってきました。4ヶ月にわたる各会での話し合い、論議が7月8～10日の各会代表者会議において「山行活動の自粛と会活動の総点検のまとめ」として各会ごとに報告、発表がされました。ここに至るまでの各会における努力は大変なものであったと察することができます。しかし、これですべての問題点が解決されたわけではありません。まだまだ各会において話し合いを続け、論議を深めなければなりません。

代表者会議ではすべての会が「再び事故は起きない」という決意を表明し、7月25日から再び山行活動を開始することを確認しました。

例年なら夏山の絶好のシーズンであります。今年も春以来の山行自粛が解除になったところで、これから山行準備といった会もあることでしょう。7月25日の山行再開と同時にいくつかのパーティがアルプス方面へ入山しました。7月25日の「八ヶ岳雪崩遭難者現地追悼式」は梅雨末期の雨で予定を変更し、小松山荘で遺族、友人、知人、救助活動に参加された方々、みなと労山会員、県連各会会員約150名が参加し雨に打たれながらもしめやかに執り行なわれました。私たちは4ヶ月間の「山行活動と会運営の総点検のまとめ」で得た教訓を、アイマイさを一掃する手立てをこれからの山行活動に具体的に実践しなければなりません。各会におかれましても山行活動の再開にあたり、計画の立案、準備、山行の実行、終了後のまとめ等について、今一度基本にかえり、一つひとつ手を抜くことなく取組んでいただくために、会長はじめ会の指導部の方々は山行計画の指導に心を配って下さるようお願いするものです。この夏山を事故のない安全で成果のあるものに、文字どおり山行活動の再開にふさわしい夏山にしようではありませんか。県連遭難委員会もその決意で臨

みます。7月25日に続き、8月2日は台風10号で今年の夏は厳しいものになりそうです。

夏山山行についての留意事項

(イ)出発までに

①会として緊急時の連絡・出動できる体制(人員、車、装備を含め)を確立し、事務所に図示しておく。

②山行計画書は2週間前に県連へ提出すること。

県連遭難対策規程2-(7)、同付則1により積雪期登山、岩登り、沢登りを伴う山行で近畿以遠の山行は県連へ計画書の提出が義務づけられています。但し、当分の間、畿内の大峰山、水ノ山をはじめとする山域での岩・沢登り・冬山についても計画書の提出を求めるものとします。無雪期の比良山一般コースなどについては各会段階でチェックして下さい。県連への提出の要否については問合せ下さい。

③計画書は必ず各会遭難委員会にてチェックした上で提出して下さい。

④計画書はその山行について参加者が共通認識を表示したものです。又、第3者にも提出します。無事に実社会へ帰るためのパスポートであり、万一の場合のまさにルート図となるものです。必要事項を正確にわかりやすく記入して下さい。計画書の様式は指定しませんが、B5サイズで次の項目の記載をお願いします。

①団体名、住所、連絡先 ②目的 ③山名、ルート名 ④日程 ⑤予備日について ⑥参加者氏名・任務・住所・電話・勤務先電話・緊急連絡先の氏名・電話・続柄・性別・生年月日・血液型・職業・山岳保険の加入先・保険金額 ⑦山域および概念図(ルート図) ⑧エスケープルート(荒天時・事故対策) ⑨装備表 ⑩食料計画(予備・非常食) ⑪トランシーバーの周波数 ⑫留守本部の氏名・電話 ⑬下山連絡予定の場所・日時

なお、計画書以外にトレーニング・ミーティングの実施状況、入山前の体力測定表を求めることがあります。(岩・沢登り・冬山・長期縦走など) 入山時、ルート、メンバーの変更があれば県連へも変更の連絡をお願いします。

⑤) 日常トレーニング、休日の技術、体力トレー

ニングをその目的とする山行に合ったものにする。

⑥必ず山岳保険に加入し、会として一覧表を作成しておくこと。

⑦基礎技術、知識は入山までに学習し、習得しておく（ホエーブスの取扱い、山城の概念図が描けるか）

⑧過去の事故事例を学び教訓として身につける。

⑨必ず装備チェックの上、余裕をもってバックキングを、新人には具体的に出発前にチェック

⑩暴飲・暴食をやめ、体調を整えておく、体調に問題のある人は医者に診てもらう。

⑪体調・トレーニング量による計画の再検討を

⑫同山城に入山する会、パーティと入山前に連絡をとりあい情報交換を行う。

⑬一般募集のバス、山行についてはコース等の再検討を

⑭リーダーはその山行を責任をもって推進できる力量のものが行うこと。安易にリーダーの見習いとしてまかせてはなりません。天気図の作図、読めることは最低条件のひとつ、体力、技術、知識、経験、統率力等総合力が要求される。

⑮単独行は兵庫労山としては認めていません。各会できっちり対処して下さい。

(ロ)入山時 登山口で入山届を提出し、情報収集を行う。

(ハ)入山して ①リーダーは常にメンバーの体力、体調をつかんで対処する。新人は特にしんどくても無理をする場合がある。②ゴミの持帰り、山小屋へではなく下界まで ③ホエーブスをはじめ装備の点検、取扱いを正しく ④他の登山者の迷惑にならないよう、労山のパーティとして規律ある行動を ④無理をしないこと。引き届す勇気を ⑥荒天時や下山が遅れる場合、山小屋から留守本部へ電話を入れよう。

(ニ)下山時 ①一番近い電話から下山の第一報を ②現地の状況・他のパーティの動向 ③事故・事故未遂について報告を

(ホ)緊急時 ①事故発生直後 → 状況判断はまず落ち着いて、リーダーは事故者を確認し、メンバーを安全地帯へ集結させる。天候・パーティの能力、健康状態、現場の難易度等を的確に

判断して、メンバーに指示を与える。現場の状況把握のために、写真、スケッチ、メモを必ずとる。事故者はあくまで生存と考えると、すばやい行動をとる。二重遭難は絶対に避けねばならないが、自力で救出を迫及する。事故者を確認した場合、負傷の有無を調べ、応急手当を施す。負傷者には2名以上が付き添う。確認不可能の場合は、事故現場に標識等をたてる。死亡が確認された場合は原則として、警察官の指示を持つ。②事故発生の連絡方法は → 発生直後の行動がおわったら、又は現場での救援活動が不可能な場合は、すみやかに県連留守本部に連絡をとる。各会の留守本部へも。その後、県連との連絡体制を確保しその指示を受けて行動する。連絡事項はメモにし次のとおり①事故発生（発見）日時、②場所 ③事故者氏名・住所・年齢・緊急連絡先 ④負傷の程度 ⑤現場の状況 ⑥救援の要・不要 ⑦資材の要・不要 ⑧現場での救助メンバー・会名・氏名・住所 ⑨今後の行動及び連絡について ⑩その他

連絡は最寄りの山小屋等から電話・トランシーバー等を活用する。

(ヘ)山行終了後 直ちに反省会をひらき、「まとめ」を行う。県連へも報告書を提出のこと。

山岳保険について

周到な計画と万全の準備で出発し、慎重な山行で安全第一に無事下山することが、私たちの山行の目標ですが、万が一の場合にそなえて、財政的保障についても怠ることはできません。このたびの「みなと労山」の八ヶ岳遭難でもリーダー以外は山岳保険を掛けておらず、反省点として指摘されていたところです。生命保険を掛けているから山岳保険は掛けなくてよいのではとの意見もありますが、ここでいう山岳保険は事故の際、要する費用に優先的に使用するために山岳会が確保するものであります。従って受取人が法定相続人の場合、この保険金は山岳会でまず使用する旨を伝えておいて下さい。

県連遭対委員会としては「山岳保険の加入」について計画書のチェック項目とし、すべての会員がなんらかの「山岳保険」に加入するように訴えます。次の「山岳保険」を紹介します。

(以下略)

2、山行活動の強化と事故防止 活動の前進のために

1、第19回定期総会以後下記の活動を行ってきました(略)

2、山行活動の強化について

悪夢のような八ヶ岳中岳沢の雪崩事故後の山行活動の自粛そして会活動の総点検と繰返しの話し合いを通じて各会においては山行活動面での不十分さやあいまいさなどの問題点を明らかにし、それらの克服とこの面での活動を前進のための新しい方針と決意を固めてきました。かつてないほどの時間と労力を費したこのときの活動を徒労に終わらせてはなりません。なぜなら、そのことは11名の仲間の死を無駄にすること以外のなにものでもないのですから、しかし、山行活動再開以後の正月山行、3月山行、4・5月山行の4回にわたる入山前体力測定会への参加状況は残念ながらごく一部の会を除いて日常トレーニングのうえに山行をという「山行活動強化の基本方針」からのへだたり、もしくは入山前体力測定の考え方に対する軽視を物語っています。山行活動再開後というより事故後1年にもならない時点でのこのような状況は一体何を物語っているのでしょうか。山行活動上の不十分さやあいまいさを克服する方針がいいかげんなものであったのか又は間違っていたのか、さらにはその決意がまやかしのものであったのか、それともたった1年もたたない間に風化してしまうほど脆いものだったのか。いずれにせよ私たちの生命のかかっている「方針」と「決意」の両方について真剣にみなおしと再検討を行う必要があります。

「入山前体力評価の考え方と日常トレーニングを土台においた『山行活動強化の方針』」を各会に正しく普及し根づかせること、そして、そのうえに山行活動強化の具体的な計画をつくりあげることは兵庫の労山の山行活動の基本であり、県連は各会の「方針」と「決意」のみをみなおしと再検討にあたってはその立場から具体的な指導と助言そして各会指導部との話し合いを積極的に行います。又、「入山前体力評価の考え方や日常トレーニングの重要性はわかっているがその具体化にいたらない」とか「具体的な方針はあるのだが実行にいたらないもしくは途中で尻切れになった」といった会についても直接意見交換の場を設定し、指導助言にあたります。

これらの各会との個別の話し合いとは別に「積雪期ならびに残雪期の山行」および「岩登り」をどう向上、前進させるかをテーマに山行指導責任者会議を開催します。県連段階でのリーダー養成は1979年～1980年の第4期中級登山学校以後途絶えており、初級岩登り教室や雪上技術講習会の講師の確保といった点からも又、本格的な登山活動を求めながらも単位山岳会段階でその要求が実現できない仲間たちに応えるといった点からも焦眉の課題であり第5期中級登山学校(実施要項案は資料集に収録)を今夏にスタートさせます。

そして、すでに日常トレーニングを行っている仲間に加うるに第5期中級登山学校の受講生の意欲的な日常トレーニングを牽引車として県連全体に日常トレーニングの気風の確立を目指します。又、一般の岩登り希望者を対象にした初級岩登り教室の実施を検討し一日も早くその実現をはかります。

3、事故防止活動について

八ヶ岳遭難以後すべての会で「山行活動の自粛と事故問題についての話し合い」が行われ、第19回総会で「山行活動の自粛と会活動の総点検のまとめについての提案」がなされました。各会では①「山行活動強化の方針」ならびに「入山前体力評価」についての考え方を学習し、正しく理解し会活動の中に具体化する、②日常トレーニングについて討議を行い会に根づかせる、③これまでの山行活動

をふりかえり、事故、事故未遂の中からその原因と今後に生かすべき教訓を明らかにする、④労山の生命である仲間を大切に、団結する会の気風の確立をめざし事故につながる要因でもある会活動の中にある「あいまいさ」と問題点を明らかにし、その原因とそれが生れてきた背景を解明する、⑤今一度、労山の基本理念について学習を深め、単位山岳会としての任務、課題、責任を明らかにする、の5項目について学習、討論、まとめが行われました。7月8～10日の各会代表者会議において、各会から「5項目のまとめ」が報告され、全体として山行活動の総点検によって摘出された問題点を克服する手立てが講じられつつあることを確認し、4ヶ月を越える山行活動の自粛を7月25日八ヶ岳で開かれる現地追悼式を契機に解除することを決定しました。

山行活動が再開されてまもなく一年になりますが、各会における山行に対する姿勢は大巾に改善され、「まとめ」の教訓が実践されているといえますが、残念ながら小さな事故や事故未遂は根絶されていません。その原因を分析してみるといずれもリーダーが基本を確実に指導していない、つまり手抜きやいいかげんさから発生しており、同じようなミスを繰返している会もありました。事故防止の活動は①まず各会の遭難対策、山行指導の責任者やリーダーが4ヶ月間の山行活動自粛の中でまとめあげた「5項目のまとめ」について、忠実に原則どおり実践することです。②次に山行計画の立案、準備と実行についても謙虚に点検しながら推進する。「あいまいさ」や「手抜き」「慢心」になった場合に事故が発生していることを肝に銘じるべきです。③八ヶ岳遭難者11名を含めた15名の尊い犠牲を無にしないために、繰返し事故事例の報告とその教訓を普及してゆく。④八ヶ岳遭難を知らない仲間が入会し、山行に出かけています。山行準備のミーティングで必ず「遭難の衝撃と悲しみ」と「5項目のまとめ」について論議し遭難に対する認識と事故防止の心構えを一致させる努力をしなければなりません。

1、みなと労山で進めている「八ヶ岳遭難」の総括を引続き指導、援助し、その教訓をすべての会員のものとする。

2、10月8日は県連で初めての犠牲者となった故柳楽峰子さん（神戸労山）の遭難10周年です。1974年7月21日故瀧上博さん（芦屋労山）、1976年3月21日故安田勢喜さん（西宮労山）、1977年5月3日故上田孝男さん（尼崎労山）、そして1982年3月21日故新井良さん、故橋田孝弘さん、故安田憲市さん、故久保百合子さん、故権藤美恵子さん、故間田幸治さん、故柳静子さん、故杉本悦子さん、故田中かおるさん、故田丸敦子さん、故沢田和史さん（みなと労山）の15名の仲間の墓碑を刻んできました。故柳楽峰子さんの遭難10周年に際して15名の仲間の冥福を祈り、故人達の遺志をどのように受け継ぎ発展させてきたのかを報告し、私たち自身が山行での事故を起さないための学習の場として「遭難を考える夕べ」を10月初旬に行います。

3、連盟結成以来17年間の事故事例を集録した冊子を作成し、事故の教訓をすべての会員が学ぶテキストとします。

4、県連の提起している「入山前体力評価の考え方」と日常トレーニングを土台においた「山行活動の強化について」の方針を各会の山行活動の基本にすえ、根づかせるために「山行指導責任者会議」を行い経験交流とトレーニングの成果を普及します。

5、この一年、山行管理は大巾に改善され、計画書はほぼ100%、山行の「まとめ」も80%提出されるようになりました。連絡会のない時期の山行計画を事前に把握するために各会遭難責任者と日常的に連絡をとりあいます。山行規定にもとづき、2週間前に計画書を提出させ、チェックと必要な勧告を行う。山行終了後はすみやかに山行の総括を行い、「報告書」又は「山行のまとめ」の提出の徹底をはかります。

6、この一年は夏山3回、冬山3回、3月連休、春山の連絡会とそれぞれの反省会を行い、計画検討と山域情報の交換、事故事例の研究並びに山行の総括、事故につながる要因を明らかにし教訓を普及してきました。本年も各会の関係者の出席を求めてゆきます。

7、岩登り、沢登り、積雪期登山については県連の「入山前体力評価基準」にもとづく体力測定を義務づけ、トレーニングやミーティングの内容と参加状況についてもチェックします。

8、合宿時は連盟に留守本部をもうけ、各会の留守本部とも緊密な連絡をとりあう。必要な遭対器具の購入常備と調達体制をはかります。

9、遭対規定にもとづき緊急時の出動要員として救助協力員の登録を行い、合宿ごとにチェックします。

10、山行時の山岳保険、捜索保険への加入を義務づけ、万一の財政的対処とする。全国連盟の遭対基金、スポーツ安全協会傷害保険（今年から掛金大串に増）及び損保業者の山岳旅行・旅行傷害保険の加入を勧めます。

11、入山前体力評価基準の考え方にもとづく各段階トレーニング指標、基準を検討、設定し普及します。

12、事故防止の立場から装備に関する検討、研究を行いその成果を普及します。

13、高層天気図の講習会を実施、この面の指導者を養成します。

14、救急法、搬出法の講習会を実施します。

15、事故報告書の提出を徹底させ、分析し、その教訓を各会に普及します。

16、第14回総会決定で確認されている山行の教訓を普及します。

①「八ヶ岳遭難」に限らず事故は莫大な金と時間と労力が費やされるが、何よりも亡くなった仲間が再び帰ってこないことを肝に銘ずるべきです。頭と金と時間を事故を起さないために、すなわち山行の万全な準備に費やされねばなりません。山行計画書の作成にあたっては「曖昧さ」「手ぬかり」がないかどうか、万一事故が起った場合に指摘されるような問題点を放置していないかについて考え、点検することが大切です。

②仲間をよく知り、曖昧さをなくし、馴れあいを排すること。他会の教訓を謙虚に学ぶことです。

③リーダーになる人、冬山に行く人は天気図を書き読めること。ホエーブスの正しい取扱い方、気象、医療等山行に必要な十分なる知識をつけておくこと。

④ランニングを中心とした日常トレーニングによって常に体力を一定水準以上に維持しておくこと。また、各会ごとに集団でのトレーニングを実施し、個人別カードで記録をとり、相互に向上しあうべく。県連の体力測定会にも積極的に参加する。

⑤綿密な調査、研究、検討のうえに山行（パーティ編成を含む）を計画し、準備する。

⑥県連や全国連盟が発行している山行、遭対活動に関する文章の整理、一般山岳図書、雑誌の文献や記事を含めて普及する。又、山行計画書及び報告書を整理し他会の分を含めて今後の参考に資する。

⑦トレーニングの量と質を目的とする山行にあったものにする。六甲山縦走、芦屋～有馬往復など長距離歩行などをとり入れ、脚力の強化につとめる。

⑧市民ハイク、登山バスについては特に安全第一とし、山城、山地の形状、気象等から無理のないコースを設定し、いわゆる一般コース以上の難度を求めてはならない。それ以上は入会させ、必要な教育訓練の上に行うこと。

⑨岩登り、沢登り、積雪期登山をめざす者に対しては県連盟の初級岩登り教室、雪上技術講習会の受講がそのための最低条件であることを自覚させ積極的参加を求める。

(発刊にあたって)

柳楽峰子さんが前穂高北尾根で帰らぬ人となって10年が過ぎました。県連初めての遭難で、すべての仲間が大きな衝撃をうけ、彼女の死を悲しみ悼みました。「仲間を良く知りあう」ことの大切さを教えられた事故でした。

悲しみから立ち上がり「二度とこんな悲しい遭難は繰り返しません」と霊前に誓い合ったのですが、皮肉にも事故は続き、本年8月15日には16人目の仲間を墓碑に刻んでしまいました。私たちは代償とするにはあまりにも大きな犠牲を払ってしまいました。同時に人の命の尊さを教えられ、ありあまるほどの事故防止への具体的な手立て、教訓を得ることもできました。

亡くなられた仲間が労山と労山運動にかけていた熱い期待と山への情熱を思う時、悲しみにひたっていることは許されません。

事故防止の第一歩は私たちが16名の仲間を胸に刻み、死の代償として得た尊い教訓を忠実に実践することに尽きるのではないのでしょうか。

今一度、「遭難はあってはならない。起してはならない」ことを確認しあいたいものです。「遭難を考える夕べ」の開催にあたり、この小冊子をまとめてみました。事故防止への一助となれば幸いです。

1983年10月22日

遭難対策委員会

責任者 玉井 進吾郎

発行所 兵庫県勤労者山岳連盟

〒659 芦屋市業平町5-16 航洋ビル202号

電話 (0797) 32-6633

印刷 柳美堂印刷